

て無我無他の境界に遊ばしむるの妙功力に至りては、彼の讀み了りて後に感慨もしくは愛憐の情を惹起する悲哀悲壯の作に比して更に一層の出世間的趣致あるを覺ゆ。蓋し涕下る瞬間には尙ほ些の塵感添はらざるを得ざれど、無邪に笑ふ刹那には生死なく、苦樂なき也。是れ豈に一種の高雅境にあらずや。第二に、諷刺家の作は其の底に多少の酸氣ありて、人をして毎に人間の事を回想せしむる故に、時としては前の笑は化して暗涙とならざるを得ざるとあり、而もその笑は溫き同感の笑なれば、妙に後の暗涙と融和し、譬へば海に入りて冷を覺え、浴して暖を感じ、人をして心の更に健かなるを覺えしむる如き趣きあり。特に第三の嘲諷に至りては、予は多く之れを喜ぶ能はず。彼等の作は、大抵一時の私情に成り、若しくは一時の虚譽心に成れる跡歷々と見えて、到底無邪の作たるを得ざれば也。且つその爲人よりいふも、性習、閱歷等の結果にて、一へにおのれを頼み、おのれを尊しと思ひあがり、器宇のいたく狹隘なるが多く、猜疑、嫉妬の念深く、只管他を責むるに酷なるが通例也。ふと見れば嘲諷と諷刺との間に差別無きが如く見ゆる故、通例は二者を混同して、バトラーの如きをもアヂソン、デッケンスと並べ稱し、ポーブが『デンシヤッド』の如きをもフィールディング、サッカレーの作と同一に見做すことあり。されどかゝるは截然たる精緻の分別の何事にも確立し難き一例にて、所詮は其の作の醇醜不明なるが爲に外ならず。例へばバトラーは明かに嘲諷家を本性とすれども、其の美處に就いて之れを觀れば優かに諷刺家たる資あるを見るべく、サッカレー、

デッケンスは諷刺家もしくは滑稽家なれども、時としては嘲諷に流れたり。又彼のスキフトは今尙ほ諷刺家の大王と呼ばれて通例は嘲諷家と見做されざれど、予の定義に由るときは、諷刺はその皮相の美處に在りて其の骨髓に在るものはヤハリ嘲諷なり、爲我の情なり。則ち其の作に見はる、好笑は醇粹の好笑にあらざるなり。所詮、嘲諷家の作は、讀むこと漸く深うして好笑の感漸く淺く、能笑者の影の見えそむると同時に、讀む者その特質の由來に想到し、その閱歷、性習、遺傳等に想到し、且つ竟に當代の社會に想到して轉、悽愴の感無きを得ざるに至る。スキフトを精讀して後に起る究竟の感は是れなり。然らざれば讀み了りて後に一種不快の感を生ず、作家が卑劣なる虚譽心と其の淺膚なる自尊心とが歷々として浮動すればなり。バトラーにだに及ばざる尋常の嘲諷家の作は比々是れなり。好笑を滑稽の眞意とせば、斯くの如きは太だ其の眞意にとほざかれるにあらずや。予は所謂諷刺家をすら深く推重する能はざれば、ましてや諷刺家の假面の底に、漫に嘲諷の筆を弄び、他の瑕疵を拾ひ、弱處を許き、以てみづから尊うせんとする者は寧ろ深く憫むべしとなす。何となれば彼等は正面して直前勇往する能はざる者なれば也、直言直諫する勇無き者なれば也。彼の中古の世に於ける侏儒、童坊に類似せずとなさず。侏儒のうち、或ひは東方朔に似たる者あり、或ひは『キング・リヤ』の童坊に似たる者あり、多智圓轉、善く諷し、善く諷し、所謂其の究らざるは哲に似、其の正諫するは直に似たる者無きにあらねど、要するに曾呂利新左の亞流なり。太守

一たび嚇として怒らば畏縮して口を開く能はざる徒のみ。亂離の世、暗黒の朝には、或ひはこの種の徒も無からざるを得ざりしなるべく、また恐らくは其の力足らざる爲に、止むなく暫く侏儒に隠れて、奸を罵り、君を傷み、纔に其の鬱勃たる義憤を遣る英王リヤの童坊の如き者もありしなるべし。其の意は寧ろ憫れむべきなり。或ひはまた怨憤極まりて遍く人間を憎悪し、世を擧げて嘲倒せんとする者、之れを大にしてはスキフト、之れを小にしては鳩溪の如きもあるべし。彼等の心中もまた太だ悲しむべし。蓋し幕政の偏頗と十八世紀の横邪とを知れる者は、彼等の所爲、彼等の所著のまことに已むべからざりしを察せずんばならず。かゝる濁世に於ける冷笑戲謔は力争上に失敗したる天才が自家を立つる唯一の武器なればなり。さはれ名を嘲世諷俗に藉りて、言論自由なる文化の世に、自己の虚譽を思ふの外、何等の目的なく、何等の同感無く、只正面して言ふを憚るの故にのみ、妄に嘲謔の筆を弄し、社會を諷する名の底に個人を譏笑する作の如きは、予は餘り讀むことを好まず、よし讀むも好笑の美を感じざるなり。或ひは恐る、今の讀書社會の需むる所はこの種の滑稽にあらざるかと。予は此の種の滑稽は得ること太だ易かるべしと思ふ。爲我は十九世紀の特質にして嘲謔は冷かなる爲我の必屬なればなり。されどかくの如き滑稽は予の需むる所にあらず、同臭は之れを得て好笑を感じずべし、予は寧ろ一種の不快を感じすべき也。さてまた或ひは此の類の滑稽を欲せずとせば、眞の醇乎たる滑稽の作は今の文壇に求むるを得べきか否か、といふ疑問起る也。

如何なる人が最も善く笑ふか？

(明治三十一年一月)

笑ひに種々あり、苦笑も笑ひなり、冷笑も笑ひなり、嘲笑も笑ひなり。また絶望の笑ひあり、失心の笑ひあり、狂癡の笑ひあり、無邪の笑ひあり、大悟の笑ひあり、娛樂の笑ひあり。このうち何れをか美なる笑ひとすべき。

苦笑と冷笑と嘲笑とは共に自負、高慢の笑ひ即ち侮蔑の笑ひなり。この種の笑ひは私意を離る、能はざるものゆゑ、何處にか苦味又は酸味あり。絶望の笑ひは俗にいふヤケ笑ひなれば、おのづから多少の凄味ありて、好笑といはんよりは崇嚴といふべき趣味を帯ぶ。失心痴騷の笑ひ及び狂癡の笑ひは間、をかしみを呼ばで却りて笑止の感を促す。笑ひの不具なるものなり。さて無邪氣の笑ひ、例へば稚兒の戲笑の如きは、流石にをかしからぬにあらねど、大かたはうつくしき方なり。美なる笑ひには相違なきも、所謂好笑の美たるよりは優美の美に近きこと多く、間、他をして無邪氣なりし來しかたを追懷せしめ、退嬰の念を起さしむることあり。好笑の美としてはむしろ醇ならざるものといふべきか。大悟の笑ひ、是れは浮世の辛酸を味ひ盡しての笑ひなれば、笑ひの間に安住ありて聞く者を魅する力あれど、若し教訓の意籠るときは興味索然たるものとなりて往々にして自尊自

負の笑ひに類似す。

さて所謂娛樂の笑ひにはおのづから種類あり。俗に謂ふ太平樂の笑ひもこの中に入るべく、優遊自適の持前より生るゝ笑ひもこのうちに入るべし。彼の何の主義も無く、何の向上心もなく、自滿自足して現在に安んずる者善く笑ふ。之れを太平樂の徒といひ、劣等の意味にて樂觀家オプティミストといふ。このともがらの笑ひも流石にをかしからぬにあらず、されど往々にして無意義の笑ひ又は馬鹿笑ひに類することあるゆゑ、再三に及びては聞く者不快を感じざるを得ず。彼等笑ひを喜ぶの餘り、時としては大切なる人情をも全く笑ひの犠牲にして顧みざるとあればなり。さて優遊自適の持前の徒はこれに似て大いに異なる所あり、彼等は笑ひを翫物とはせずして生命とする也、即ち笑ひのうちに安住を見出し、笑ひのうちに苦樂を忘れんとするなり。太平樂の徒が笑ひを愛するは尋常の歌人、俳客の目前の貌かたちを愛するが如く、優遊自適の徒が笑ひを愛するは芭蕉、西行が春の心、秋の心を愛するが如し。物の心に可笑味を認めたるはあらゆる人を笑はしむべく、物の形にのみ可笑味を認めたるは只同臭味をのみ笑はしむるに止まる。

以上諸種の笑ひの外に、予の見る所によれば、別に觀美の笑ひ、即ち「詩人の笑ひ」といふものあり。こは實際は以上諸種中の或者と聯關することをまぬかれざれど、尙ほ其本性よりいへば、おのづから他と別種のものにて、必ずしも現在界に安住するが故に笑ふにもあらず、笑ひのみを生命

とするが爲に笑ふにもあらず。もとより高慢の笑ひにあらねば、無邪氣又は大悟の笑ひにもあらず、否、ひとへに觀美上より來る笑ひなり。されば平生悒鬱なる詩人も、其詩人たる本性ある限りは、時に好笑の美に感じて我れを解脱して笑ふこと『タスク』の作者が『ジョンギルピン』に於けるが如きことあるべく、侮蔑を本意として筆を執るも中ごろ好笑の美に撲たれて、我れ知らず無私の境に入り、一分には苦味、酸味を帶べども、一分に醇なる可笑味ありて、長へに他を笑はしむることスキフト、ポーブ等がその著の或部分に於けるが如きこともあるべし。されど詩人とても本は人なり、よし美に撲たるゝ瞬間には全く自我を忘るゝ傾きありとも、その性好笑に適せずんば同化を維持せんは難き理なれば、眞の好笑美に適する詩人を得んとすれば、所詮は、前に謂へる諸種の中に詩の素性を求めざるを得ざるべし。例へば、蜀山、十返舎の滑稽は恐らく大苦闘の精神界には求めがたかるべく、『ハムレット』以前のシェークスピアには『アズ・ユー・ライキ・イット』又は『テムベスト』の滑稽を望みがたかるべし。

史に徴するに、大滑稽と大劇詩とはほぼ運命を同うするに似たり。又眞の滑稽は概して大悲壯詩の後又は同時に出でたり。希臘に三大劇詩家いで、アリストファニスつぎ、『ヂギナ・コメヂヤ』いで、ボカチオ現れ、ラングランドの悲壯の後にチョーサーの諷諧出で、二大悲劇を作して後に縦横自在のシェークスピアもはじめて滑稽の秘訣を得たり。彼のモリエールの如きもラシーヌ、コル

ネーユ兩悲劇家と時を同うし、兼ねて自らも家庭的悲劇の實驗を有せり。然るは如何なる理に因るか。他を笑はしむるとの他を泣かしむるよりも容易なるに因るか。何故に笑はしむることは泣かしむるよりも容易きか。何故に大脚本と滑稽とは時を同うせんとする傾きを有するぞ。

こゝに到れば予が前に掲げたる「何故に滑稽作家は出でざるか」と題したる論説の意と相接す。蓋し笑ひは悲しみと異なりて主として心の据方に基くものゆゑ、多數の人々に同感せしむべき笑ひは大なる笑ひならざるべからず。常識以下又は常識を逸れたる笑ひにては事足らず、常識を網羅して更にその上に出でたる笑ひならでは不可能なり。言ひ換ふれば、客觀的と稱しても可なるほどの大主觀より生れたる笑ひにあらずば、恐らく同じ心持をもてる少數人を笑はするに止まりて其他を笑はしむる能はざるべし。この點頗る脚本と相似たり。彼れも大に成功せんとすれば、狭き主觀を脱し、時處を脱し、常識を網羅して其上にいで、宇宙をも網羅するの概あるを要す。而して此れはたやゝ其趣きあり。

是れその大脚本と出生期を同うする一理由ならんか。さて次ぎには、前論に説きたる如く、好笑は悲哀と違ひて常に現に實在するものならねば、冷かに因果の關係を考査し、若しくは溫き同感を以て之れに臨む時は、初め可笑しと見えしものも、或ひは可憐となり、或ひは痛ましきものとなり、或ひは馬鹿らしきものと變りて、正當に謂ふ可笑味は爲に失はるゝ傾きある故、物質上及び精神上

に於ける現實の苦闘激烈にして、人々常に悲痛を感じ、若しくは當代の理想定まらずして人々處世の方針に迷ひ、隨うて人事の是非及びその因果の理を尋問し研究せんの念人々の胸臆に盛んなる時代には、涙又は汗に比して笑ひはいと乏しかるべく、就中、多數に同感せしむべき大主觀（即ち客觀に相當する程）の笑ひは得難かるべし。更に通俗に之れを言へば、無我夢中の心持にあればこそ箸の倒れたるもをかしけれど、少しく眞面目になりて事々に因果の道理を探りはじむれば、笑ふべきといと／＼乏しくなり、假令笑ふともタカゞ微笑位にて、例へばアヂソン一流の笑ひに過ぎざるべし。之れも笑ひには相違なく、滑稽には相違なけれど、所詮、あまり上品過ぎて今人の求むるとき大喜劇の料とはなるまじきなり。

勿論、如何なる精神的苦闘の世にも、人の天稟の自然にて、その思潮に捲込まれざる詞客もあるべく、又前代太平の氣脈を遺傳して新思潮に漂はざるともがらもあらめど、尙ほ、一九、鯉丈の作が十九世紀の青年をして快笑せしむる能はざるが如く、又三十歳前の悟道三昧の何となく底淺きが如く、かゝる輩の筆頭の可笑味は他の苦悶の徒を絶倒せしむる力なし。苦闘の世を笑倒せん力ある笑ひは苦闘をくゞりぬけたる笑ひ、即ち因果を探りきりたる後の笑ひ、前に謂ふ大悟の笑ひに近きものならざるべからず。予はシェークスピアの喜劇を讀みてその壯年の淺薄なる喜劇とその中年後の圓熟せる喜劇との間に此間の消息の仄かなるを覺ゆ。大悲劇成りて大喜劇いづるの理或ひはこの

あたりの消息に基かずや。もとより詩人中にもその天稟次第によりて、先天的に好笑美に感じ易きものもあるべく、さる天稟を具へたるは、假令如何なる時勢にいつるも、周囲の障害に打克ちてその天賦の特質を發揮せんか、それはもとよりこゝに否定すべき限りにはあらず。されど予が見る所謬りなくば、苟も詩人と言はるゝ限りは、何れも多感多情にして所謂神經性ならざるなく、而して神經性にはおのづから二種ありて、その主觀性に屬するは言ふまでもなく、時勢に克つ能はざる約束を有するもの、譬へば今日の如き社會に在りては到底忘我して笑ふ能はざる者なり。又他の客觀性に至りては、常に其周囲の大氣に感じて移動し、左右し、能く同化するを得といへども、是れ將た周囲の潮流が我が今日の如くならんに、能く安住して笑ふを得べきか。予は今日の社會の情況の稀有空前なるを信するが故に、その多感の詩人をして悲哀、就中、小悲哀の美を認めしむるは易けれども、大好笑の美を認めしむるの難かるべきを感ぜずんばあらず。(此段は後に掲げたる「詩人の二性格」といふ説を参照せられたし。)

以上筆に任せて論じ來りたる所や、散漫に流れたれば、讀む人恐らくは主旨の在る所を領せざらんか。予が意は理想未定の時代には大なる笑ひなし、研究時代には大なる笑ひなし、故に我が今日の文壇に滑稽の作出でざるは自然の數なりといふにあり。前代に屬する者は或ひは笑ふことを得べし、新思潮に浴せざる輩とがらは或ひは笑ふことを得べし、されども新代を笑はしむる能はざるべし。而

して新代の作家、就中、眞摯なる新代の作家は未だ笑ふ程の餘裕を有せず、彼等よし笑ふとも、大人を笑はしむる能はざらん。されば今にして滑稽の作を渴望し苛求するは書肆の願望としては當然、普通讀者の要求としては恕すべく、新代を指導する批評家の言としては、予は其本意の那邊にあるかを訝り、その平生の詩觀の那邊にあるかを訝らざるを得ざるなり。

今更のやうなれど、人の持前ばかり争はれぬものは無し。概して言へば、人々の一生は、その歴史も運命もその持前によりて豫め定められてありといふを得べし。崔嵬の山嶽もまろばすべく蒼茫の河海も瀾すべし、變改しがたきは人々の天稟なり。通例、生理上より人の持前を分ちて、神経質、膽汁質、多血質、粘液質など、類を定むれど、こゝには文學に最も縁故深き神経性の上のみに就いて觀察を下さんに、一概に神経性に屬するものとせられたるうちにも、自ら二大性別の截然たるを覺ゆるなり。最も此の區別を詳かにわきまへんとする時は、存外にこちたく事々しき論文となるべく、恐らくは讀む人々も倦厭すべし。さまでにして吹聴する程の觀察にもあらねば、只筆任せに思ひ得たる所を言はんに、

神経性と一概に總稱する性格に、予の見る所によれば、主觀的性格と客觀的性格との二大別あり。さて予が主觀的と名づけたる神経性即ち純粹の神経質は、何事につけても我が思ふ所を本尊とする性質にて、内に決する所無ければ一步も進退する能はざる持前也。他の客觀的神経性又の名多血的神経質は之れと異なり、むしろ物に觸れ、事に觸れて、我が思ふ所動き易く、それが爲に、場合に

詩人の二性格

(明治三十一年九月)

よりては、我れを忘れて右し又は左するとあり。主観性を *concentrative* と名づくべくば、客観性は *diffusive* と名づくべく、彼れを *rigid* 若しくは *stiff* と言はゞ、此れを *placid* 又は *flexible* と言ふべし。主観性の人は、何等か先づ概念やうのもの若しくは主義やうの據りどころを得ざれば作することも出来ず、進退することも能はずといふ性なり。即ち先づ何等か「内」に依據する所あるを要す。客観性は然らず、その時々々の衝動に促されて云爲行動する持前なるゆゑ、其の進退の動機は間、「外」にありて「内」にあらず。隨うて前者は能動的となり、後者は所動的となる。所動的なるが故に所謂客観性の動くや、その方向一ならず、或時は右し、或時は左し、その心このもかのもに動きて、はじめは殆どその歸趨する所を知るに由なし、喩へば酔人の蹣跚として歩むが如く、曲線の波動を畫くが如し。之れを色に譬ふれば、白にもあらず、紅にもあらず、青にもあらず、黒にもあらず、竟に何の色とも名づけがたし、むしろその境によりて色を變ずる薄鼠色のたぐひにも喩へんか。この種の持前の人にして、その心に誠なく、道義なき時は、浮薄の徒となり、世に謂ふ八方美人の徒となり、詩人作家としては、何の主張も無く、何の觀念も無き、淺膚なる叙事詩人に終るべし。されば身方としても頼もしげなく、敵としても恐るゝに足らぬ人物も、このうちより出で、醉生夢死の徒もこのうちより出で、卑劣無操の徒もこゝより出づ。是れ客観性の甚だ危険なる所以也。

他の主観的は之れに反す、先づ「内」に定むる所ありて、さて後に動くゆゑ、その方針（尠くとも其の當時ほどは）牢乎たり、其の進むや直線的にして、譬へば馬車馬の前進するが如し。その據る所唯一なるが故に、殆ど毫末も顧盼すること無し、顧盼せず、斟酌せず、故に思ひ切つて勇往するなり。よしや屢々反省すとも、その窮極の裁判を下すものは我が概念もしくは其の概念に依據せる我が感情に外ならざるがゆゑに、到底その方向を劇變することなし。この持前より觀する時は（譬へば）物の數は零と一とあるのみ。彼れは零と一との間に萬里の懸隔あるを認めれども、一と二もしくは三との間の關係と、一と百もしくは千との間の關係とに、懸隔あることを認めざるなり。この持前の者は以爲へらく、一は我が理想なり、一を遂げずんば零即ち死あらんのみと。彼れは一以上萬億までの間に幾何の *Alternatives* あるもそを容るゝことを肯ぜざらんとす。即ち俗に謂ふ「一かバチか」主義なり。この性の危険は頑陋偏固に流るゝことにあり、その私情のみ盛なるは刻薄となり、殘忍となり、その智乏しき時は頑愚となり、その情激切なる時は狂暴となり、その意、情と共に剛き時は狷介となる。さもあれ彼の剛毅果敢の士もしくは彼の直情徑行、主義に殉し理想に殉する義人烈士は、常に多く此のうちより出づ。猶ほ他の客観性格のうちに寛厚溫潤の君子人を出だし、無私公正の士を出だすがごとし。

その大小高卑の差はさまざまなれど、要するに、主観性は一理想、一概念、一主義、若しくは我

が意、我が情に執着する者、隨うて其の彌高からんことは之れを望むべきも、その次第に廣からんことは望み易からず。彼れは猶ほ山嶽の如し、星霜と共に或ひは其の高くなりゆくを望むべきも、その集凝的傾向著鋭なる爲に、その範圍を廣うせんはいとく難し。この種の持前は、假令萬卷の書を読むも、豫め成心ありて讀むが故に、我が意に適へるは取りて我が城を堅むるも、他は唾して取らざるなり。又千百の人に接するも我が心に合へるには襟を披きて對問するも、さあらぬは悉く擯斥して應接せず。その人生を觀察するや、毎に概して演繹的なり、毎にその心に前提あり、成心あり、唯一の尺度あり、その性の本來より言へば、楯の兩面を見ることを欲せざる者、極端より極端に走らんとする者、*ball* を口にするを悦ばざる者なり。即ち *eposic* なり。之れを詩人に見る、大抒情詩人もこのうちより出で、詩風を刷新するの天才もこの内より出づ。又之れを政治、宗教、其他の社會に見る、革命家や、創業家や、概ね皆こゝより出づ。

客觀性は、彼れの *no but* に對して *ever but* なり。觸るゝ所の物に同化する傾きを有するが故に、往々にして全く我れを遺失せんとす。夫れ優柔不斷は神經性の通情ながら、客觀性の斷決し得ざるは、左顧右盼するが故にして、主觀性の踟躕するは、内外相闘ふが故なり。客觀性は時としては全く我れを遺亡して因循し、主觀性は常に我れを意識し、譬へばハムレットの煩悶の如く、自問自答のうちに踟躕するなり。この苦闘の結果、客觀性は、雙方に對する義理人情の遂げがたきが爲に稀

に自ら殺すことあるべし、而して即ちその間に自家なきなり。主觀性は、自家の理想と他に對する義理人情との調和せざるが爲に或ひは間自殺することあるべし。即ち其の死期にも「我」あり（必ずしも「私」にはあらねど）。客觀性は自我を失す、故に時としては中庸を得、又常に屢顧酌量す、その常識に富む所以なり。故に彼の非我界を叙するの作即ち客觀詩（叙事詩）は主として此の種の性格に適す。守成家、整理家はた此の性よりいづることあり。

主觀性は一理想、一概念、若しくは一主義を固守するが故に、その一言一動は其の守る所に依據す、隨うてその前提たる據りどころを是認すればその一言一動、悉く之れを是認せざるべからず、即ち一言一動の末までも悉く *logical* なり。彼れは義にあらざれば言はず、義にあらざれば動かざらんとす。義は主觀性の生命なり。唯、「義」を生命とす、故に *logical* ならざるを得ず。唯、*logical* なり、故に窮屈なり、嚴格なり、苟もせず、忽諸にせず、故に寡黙なり、深沈なり、峻嚴なり。單調なり。

客觀性は然らず、その重んずる所は義にあらずして寧ろ「情」なり、我が情プラス衆他人の情なり。或ひは義理に拘することあり、而も其の所謂義は我が見定めたる義と限らずして遍通的に謂ふ義なり。故に甲の所謂義と乙、丙、丁の所謂義と、相牴牾し相衝突して自家その間に介するや、或ひは遍通の義を證し得ざるが爲に、首鼠兩端（若しその心に熱誠無からんか）彼れに同じ、此れに同

じ、浮萍の波に伴ふが如くならんとす。而もその同化と同感とは此の種性格の必然なり。その本来よりいへば、求めて而して後に然るにあらず、寧ろ其の境と遇との刺戟が彼れをしてその心理態度を變へしむるなり。既にその境遇によりて心狀に變化を生ず、その云爲言動はた隨うて變ぜざらんとするも得んや。快活なる境に觸れては半無意識にして快活となり、悒鬱なる境に接しては同じく半無意識にして悒鬱の人となる。隨うて或時は眞摯、或時は洒落、或時は深沈、或時は儂佻。他人のかゝる性格を見て彌信しがたしとする所以なり。唯、それ他になづき易く、親しみ易し、故に能辯なり、sociableなり、滑脱なり、圓轉なり、變幻無窮なり、多方面なり。

總じて主觀性は現實界には其の性格上の必然の約束によりて兎角に安住の地を見出だすことを難んず、故に動もすれば歴世に傾き易く、悲觀に流れ易し。即ち純乎たる悲劇の主人公なり。

客觀性は其の高卑大小を問はず、概して現實に安住す、その下劣なるは喜劇の主人公にして、其の高上なるは自然を樂しむの徒なり。豊年主義の徒もこゝに宿り、樂天の徒もまた之れに居る。

彼れに仙骨あらば、此れに俗骨あるべく、彼れ高くば、此れ廣かるべし。彼れ抒情詩人たるに適し、革新家たるに適せば、此れ叙事詩人たるに適し、保守家たるに適せん。

主觀性は、新文明の劈頭に生れて何等かの功を成すべく、新文明成熟の後にいで、は、多少悲しむべき慘劇の主とならん。客觀性は、社會整頓の時代に生れて、多少有用の材たるべく、或ひは一

世の師表たらん。誤りて新文明の劈頭に生れば、其の業ほとく言ふに足らじ。

主觀性は秋月の如し、その光に浴するもの、淨光に照らされたる山川の美を言ふと共に必ず其の澤の源を仰ぐ。客觀性は春日の如し、人春日の麗らかなるを言ふも曾て空を仰ぐ者なし、即ち其の澤をたふふるも其の源を忘るゝなり。例へばシェリーを讀むや、シェリーの性格と理想とを意識せざる能はず。スコットを讀むや、彼れが傳を讀まずして誰れか能くスコットが性を知らん。一は高くして一は廣し。誰れかこの高大と廣大とを併せて詩界の晝夜を占領するものぞ。蓋しこの客觀性とこの主觀性とを不可思議にも双つながら併せ有して、はじめは抒情詩人として革新家として世に現れ、後に翻然として大覺し、叙事詩人の資と守成家の質とを兼ね具ふるに至らんものにあらずして、誰れか能くその人なるを得ん。所謂大劇詩家はこの種の人物より出づ。予は英のシェークスピアにその一例を見、獨のゲーテに其の形跡を見る。而してゲーテの竟にシェークスピアたらざりしは、爲我的十九世紀の必然の影響に因るものなりと思ふは非か。

學者頭と詩人頭

(明治三十六年)

物の見かた、考へかたを大づもりに見れば、知慧學問に關係なく、古今東西を一貫せりと見ゆる二大區別あり。一方は科學家式、俗に碎いていへば學者肌の考へかたなり。他方は文藝家式、つめていへば詩人質の見かたなり。この二つは陰陽の如く、男女の如く、匣と蓋との如く、相補つて初めて完き考へかたとなるものなれば、その偏りたるには多少の過失あること勿論なり。

何事につけても先づ經驗を第一とし、事實や名目の取調を第二の必要件となし、且つ其の取調べたる事を分析し、解剖し、分類し、或ひは比較對照し、或ひは圖表、統計表を拵へ、徐ろに歸納し、或ひは反對説を萬べんなく檢べ、場合によつては自身で拵へて持出し、自ら詰り、自ら痛めつけ、それを反駁し、辯解し、自問自答の獨相撲幾番の後にも、尙ほ念に念を入れて批判し、考察し、推理し、概括し、萬止むを得ぬ時には假定説などいふ間に合せの足場を築いて立脚し、さてやつとの事で最後の斷案を試むる、是れが學者肌の本領なり。

耳目に觸るゝ、やがて直にその物の本體を會得し、面倒なる工夫、段取を嫌ひ、推理、研鑽を経ず、一足飛に大體の考を纏むるを主とし、直覺を尙び、總合を重んじ、出来るものなら只一つ二つ

見聞したばかりで物の道理が百から千まで、底の底までも見え透くやうにありたく、叶ふべくんば一朝豁然として心機一轉して頓悟すると同時に、宇宙の實體を直観して自然人生を律すべき千古の天則を吞込んでしまひたく、尙ほ十二分の慾をいはず、思ふとすぐにその事が實行さるゝやうありたいものと願ひ、兼ねてさやうの方面の心的作用に於ては慥かに先天的特長を具へたりとも見ゆるもの、それが詩人質たちの持前なり。勿論双方共に教化、薰陶の效能乃至自省、自修の力によつて種の變化、階級を生ずべく、學者肌ながらに詩人質の長所を兼ね、詩人だちにして學者肌の研究法を利用する大ぶ重寶な合ひの兒もあれば、中間ぶらりのどちらつかずで虻蜂捕らぬ出來ぞこねもあり、又いづれの役目も丸きり勤まらぬ全くの片輪ものも随分ある習ひなれど、先づ大體をいへば、所謂學者肌は血の氣の薄いはうの頭腦の作用あり。

その美なるものについていへば、注意深く、思慮細かく、逆上ひせず、ひがまず、くねるとなく、かたよるとなく、心におちつきあつて事物を八面から鑑定する餘裕あるなり。但し其の二の町なる者に至つては、おツかなびつくりに類し、因循に類し吞込わるゝ、機轉鈍く、些細の勘定までも算盤とらねば氣がすまず、何事も十二分考へぬいた上でなくては決斷のつかぬといふ姑息肌、どちらかといへば老人かたぎなり。然るに詩人質は之れに反して、小氣味よいほど突飛的なり。尤も聰明だの、機敏だの、一を聞いて十を知るだのといふは其の美なるものを褒め立てた言葉ながら、總體

に吞込よく事の分り早し。若し夫れ其の似て非なるものに至つては氣短かの向う見ず、とつたか見たかの早吞込だけに大づかみは勿論、勘たがへ、はきちがへ、屢あり。すべて考へかた馬車馬の走るが如く一直線にして、右左りさへも顧ることなし。血氣の頃は俗人も學者も男も女も、實は大抵是れ也。さればダーキン一派の科學者に言はすれば、かくの如きは「劣等種族の特質」の事に、大人に尠く、少年に多く、男に尠く、女に多く、學者よりも無學者、文明人よりも未開人、英人、獨人などよりも日本人、支那人などに多き肌合にて、畢竟は鍛鍊の足らぬ程度の頭腦、主として本能的に働く類の頭腦を意味し、いづれかといへば女性肌の心性 *womanish quality of mind* といふべきものと一概に貶なす次第なれど、彼のヘルデル、シェリング等を音頭取としたる近世の詩人、藝術家の辯護者、所謂ロマンチストらにはすれば、直覺に秀づるは人の最も人たる所以にして、宇宙の實相に悟入するの法は此のものに頼るの外なし。直覺は是れ第二の視力、天の賜へる豫言の資、彼のニュートンが地心引力の發明、彼のゲーテが植物學上の創見、いづれも皆演繹の結果、直覺の作用、哲學的問題とてもトッのつまりは是れ沙汰、その他投機商の駈引、宗教家の頓悟、古往今來、何事にもあれ煎じつめた果は大概このもの、庇を被らぬ者あるまじ。プレートーは此れあるが爲にアリストートルよりも大なり、ベーコンが到底シェークスピアたるべからざるもこのもの、力なり。曰はくどうした、曰くかうした、と效能しらべとめど無かるべし。

寔にそれも一理にして此れもまた一利なり。按ふに學者肌は眞昏暗の中を卷尺マセリヤクをたぐつて小田原提灯をぶらさげて、方十里といふにめげもせず、地勢の探検を試みんとする氣の長き隠居などに喩ふべし。あふなげのない所が取りえなれど、まだるツこいことこの上なし。これに對して詩人質チチは提灯の微小を卑み、老人の迂遠を嘲り、自轉車で五重の塔にかけつけ、その頂に馳登つて偶然の閃電を俟つ短氣者の如し。同じく方十里の山水の全景をば只一瞥の下に見て取らうといふ魂膽なり。いかさま此れは機轉の利いた巧ウマい思附には相違なけれど、いつ首尾よく稻妻が閃くやら知れたものでなく、萬一草臥れて假寐トウクの間に通りぬけてしまつたら、一生昏闇に立往生して石龜の地軸を踏まざるを得ざるべし。幸ひ都合よく閃電があつたりとしても、それによつて全景を瞥見したるは己ればかりとする時は、晝などにかいて見すれば格別、さなくば我れ面白の獨合點にとゞまり、他に傳ふるの術なかるべし。そこに至ると小田原提灯は百萬千萬も製造自在、配分自在のととて、凡人も俗骨も女も子供もその恩澤にあづかるを得る便宜あり。是れ此の勝劣が考へ物たる所以なり。

伊豆の國の海岸に三尊窟と呼ぶ名所あり、そのあたり巖巖おそろしく峙つて浪風いと荒くすさまじければ不斷は船を寄せがたし。麗かに晴れたる日、纔かに退潮を俟つて櫓を操り、辛うじて窟の内部に進み入るに、高浪は船を弄んで大いに高く僅かに低く、屢々岩の天井に打あたつて微塵ともならん危険を忍び浪の下るを機として漕入り、さて遙かに奥の方を窺ふ時は、髣髴三體の黄金佛が

黑暗々中の巖壁に當つて燦然としてきらめくを認むることあり。但しこれは浪の下る只一刹那の機勢ズバなれば、信心極めて堅固にして冥助甚深のものならずば見そこなふこと勿論なりといふ。

さて俗説はかくの如くなれど、其の事實を叩けば、此のもの阿彌陀佛でも何でもなし、纔かに閃き入る日光が暗中の巖に映するとき、先入主となつたる看る者の成心が迎へて以てしか解するのみ。猶ほ品川の廿六夜待に今も尙ほ東京の翁媪連がチラと出かたの月の影のほのかなるをば三尊の阿彌陀さまと拜むがごとし。所謂主觀的の解釋に外ならず。手前尺度ものさしの測量なり。而して詩人式の考へは、ともすれば、此れに類し易き所に病ひあるなり。

かうはいふものゝ、此の詩人の考へ方には慥かに人心を魅する魔力あるなり。その名目の附けかた、解釋の鹽梅にこそ疵あれ、本場仕込の直覺家が睨みには、必ず何か一廉か二廉位のは遍通不朽のうまみ、有り難み有つて、そらろに涙ぐまるゝばかり、いつまでも棄てがたし。例へば、希臘文明の絶頂に立つて長へに人間が渴仰心を歌ひかなづるにやと思はるゝプレートが理想論、何がさて自立、自利一邊の武斷時代の眞只中に生れて南北東西に亙つて萬古變るまじき人間社會經綸の大緯おほこいを繰出したりと見ゆる基督が絶對訓、乃至老莊が直觀に成れる一種の復初説、近うしてはルッソが感慨に生れし自然論、感情主義、此れも彼れもいづれ皆同じ流れの産物にあらざるはなしと考へて見れば、此の式の有難がらるゝも理り千萬といふべき也。いや、そればかりで無し。彼の中世の

神祕論派が獨合點の達觀、ロマンチック哲學者が大獨斷の空中伽藍、ニイチェが空想、トルストイが一邊觀、と大科學者にでもなつた積りで叩き崩さうとするもの、氣を持直して目の据ゑ方を換ふるときは、崩しかけた其の目前に碎けて散らばる明月や夜光、碧玉、紅玉、燦爛錯落、眞珠やら、瑠璃やら、それを悉く拾ひ集めたならば、其の明光、大ラボラトリーの黑暗を照して、餘光幾千燭光の電氣燈をも凌ぐことなきを保せず。只どうして拾ひ集めたものであらうか、疑問なり。

要するに、學者肌の長所は其の慎嚴周密にして一言一斷苟もせざる所にあり。而して其の短所は煩瑣迂遠の形式、繁疑不斷の内容、無情に似たる其の冷淡、其の乾燥、殘忍に類する其の苛細、其の深刻、其の屑々と其の拘々と其の齷々、其の齷々、さながら地藏尊の恵みに洩れし賽の河原のいたいけ亡者の、積んでも崩れ、積んでは崩す小石細工埒あきかねて、待てどもく出來ず、千年萬年待つたとても恐らく此の爲體ではと覺束なく思はる、所が弱身なり。それに反して詩人式の長所は單刀直入、直指人心、或時は拈華微笑の幽玄、或時は不立文字の簡淨、漲る黒煙、めまぐるしい陰影には目もくれず、飛びかゝつて化物の正體を引捉へ、鳶口只一挺、大紅蓮、小紅蓮の眞只中へ向う額巻で躍り込む氣負ひの働き、きびく〜と心地よき直截、思ひ切つたる手取早さは純粹の學者肌にかけても眞似得ぬ所ながら、たゞ困つたことには、かゝる考へ方の弊として、兎角手前尺度（うさし）の測量に陥り易く、情に眼昏みて一寸前の文目（あやめ）も分らぬとあり。然らざるも其の咄嗟の心的作用たる

より生ずる自からなる結果として、おしなべて疎枝大葉の觀察、散漫にして簡龜、甚しきは孟浪杜撰、支離滅裂、自家撞着、前後矛盾勝手次第、さなきものも廬山の格構を只一面から窺ひ、乃至稻妻でちらと見たる全景、只もう茫漠としたる大體觀なれば、己れすら程經れば夢の心地となりゆくを、同氣相求むる者、よしや一時は之れにすがつて何等か得たる所ありげに思ふとも、やがては元の木阿彌に立戻つて、精神上に寸益なく、胸に手をあて、考へて見れば、風がはりの狐につまゝれたやうな心持ばかりが残るべし。

併しそれもよし。鱗のかしらも信心がらなれば、窟の奥の日光が阿彌陀佛と拜まれし爲に勇猛精進の菩提ごゝろが奮ひ起り、神が憑いたと思ふばかりの一信で飛んだ目覺しい離れ藝のしてのけらるゝ不思議の利益なきにしもあらざるべければ、詩人式も臨機の別方箋としては重んじ用ひて然るべきものなり。只いつもく此の呼吸一つにて宇宙百端の料理鹽梅が出来ること、心得る手合こそ氣の毒、殊に其の柄でも無い癖に、見事此の式で押通さるゝこと僭上がるやからこそ氣の毒なれ。眞物（ほんもの）にさへ色盲（いろめくら）、藪睨み多からば、賈（まが）ひ、受賣には皆目にも劣る者あるべき理なり。皆目見えざるは始末よし、見當大きにちがつたるに、自身はちがつたりと思はぬ者ほど世に厄介なるものはあらず。

併しそれもよし。只此の詩人式の考へかたが他の學者式に比して復然立優つたる思想式なるかの

如く寡聞の青年者間に言ひ囃され、其の簡便な所が無精者共の氣に入つて、唯一無上の思想式でもあるかのやうに崇められ、一切の思想の是非、宗教から道德、人倫の根本義、日常實際の舉措進退までが之れによつて律せられんとする傾きあるに至つては、着實なる人々の取越苦勞せらるゝ、もつとも至極ならずや。

今日の思想界が前古未曾有の大亂脈にして人々思ひくともいふべき亂調子なれば、之れを分つて相對峙する二派又は三派となさんは、到底望まるまじきこと、一應は見ゆれども、若し假に何とかして強ひて二大別し得るものとすれば、その法は只一あらんのみ。即ち形式上よりは上に謂へる學者式と詩人式とに分つことは是れなり。さて又内容上よりは所謂「開化」、「文明」、「社會の進化」を讚美することに於て大同する者と之れを呪咀することに於て大同する者とに分つことは是れなり。千分萬裂、紛々然、錯々然、囂々然たる混戰亂闘の中に於て此の二つばかりは稍、鮮明なる旗色なり。

然るに詩人又は詩人式の思想家は比較的によく呪咀軍に投じ、學者乃至學者式の思想家は比較的によく讚美軍に馳參す。是れ先づ頗る注目すべき現象なり。次に注意を要するは、此の二大思想式の對峙が社會進歩の要具たることは是れなり。即ち一方は二三の大樹のみを見て全林を見ず、他方は無數の樹々を見て同じく全林を括る能はざるの概あるが故に、彼れに三分の實相、此れに七分の眞理、少しく檢覈すれば、決して偏棄すべからざるの理明かなると同時に、双方の内容を分析し、比

較し、その一々に就いて勝劣是非を明かに決せずもあらば、「文明」の是非曖昧となつて、世に處し身を修むるに當り、去就進退に迷ふ者生すべく、殊に青年者流は詩人式の説を悦ぶ習ひなれば、或ひは爰に飾非の口實を得て品性墮落の縁を醸さんもの必ずなしともいふべからず。要するに、文明是非の鐵案を下すことは今の德育上の一要務なりといふことは是れなり。

次に、更に注意すべきは「文明」の呪咀に於て大體は相同意したる詩人者流が其の内容の是非に至つては往々甚しく相牴牾し、或ひは甚しき自家撞着を包藏せんと、即ち此れと彼れとを相照らし、前説と後説とを對繳せしむれば必然慘烈なる同士打を生じ、其の論半以上自殺又は敗走に歸することは是れなり。ゾラとトルストイ、トルストイとニイチュ、ニイチュとイブセンなどは其の手近き例證とも見るべし。その他、所謂ロマンチストの亞流中にもかゝる例は乏しからず。本營既に然り、その旗色によつて動く野武士の群れに至つては、一知半解の必然の結果として、精刻なる批判の一突撃に逢ふときは潰え走らんこと一定なり。

只其の批判の法、辯明の法が工夫物にして厄介物なり。學者式を以てせんか、肝腎の讀んで貰ひたき當の相手が讀んでくれまじく、さりとて詩人式を以てせんか、是れ五寸を以て五寸に易へ、暴を以て暴に易ふるの似たり寄つたりなり。さて何としたものか、工夫附き易からず。

此の論まだ終つたのにあらざれば、いづれ題を改めてまた説く所あるべし。

「文明」の研究

(明治三十七年)

同じく「文明の研究」といふうちにも様々の色別けあり。彼のモンテスキュー、バックル、ドレーパー諸家の如くに主として歐洲文明の由つて來れる經歷を演繹的に推論するもあれば、最近の文明史家の如くに成るべく推理を避け、批判を慎み、専ら精選せる事實を平叙し、隱約の間に因縁果報の連鎖をはのめかし、其の最後の判断は成るべく之れを讀者の心々に一任すること彼の獨逸邊の文明史家の如きもあり。これら皆一種の「文明の研究」なり。或ひはまた更に遠く開化の源流に遡つて、此の人間社會が原始自然の混沌單純の状態より現に見るが如き複雑多端の所謂文明社會と成り來れる其の發展の蹟を考覈して、歐と言はず、亞と限らず、廣く東西古今に涉つて、恰く「文明」の由緒を探り、進化の因縁を明かにせんと試むる者あり。而して之れを爲すに當つて、一方には例の單刀直入に其の因果の理を推斷せんとする詩人式もあれば、他方には、徐ろに因果の連鎖を手繰つて歸納的に取調を進むる學者式もあり。要するに其の手段方法こそ様々なれ、コントもスペンサーも此の意味に於ける「文明の研究」の同行にして、近くは彼の進化律に立脚せる社會學者連中、ワード、ギッチングスらの一流も先づは同じ鱗の魚族と見て差支へ無し。假に以上諸派を總稱して因

縁上より文明を研究する者と做す。

或ひはまた専ら文明の濫觴即ち原始状態ばかりを取調ぶる學者もあり。未開時代の言語、法律、技術、習俗、宗教、道德等、總じて後に至り發展して所謂文明の要素となれるものを其の源泉について研究すること、手近くは例のラボック一流の如きもの、是れ。かゝる類の文明研究は人類學專門家の著書中に就いて求めなば、一大ライブラリーをなすほどに夥しきことなるべし。

又は主として文明の精髓即ち國家をして文明たらしむる所以の原動力（モチーヴ・パワー）の何たるかを論究して之れが鼓吹奨勵に努力したる者もあり。例へば、コントの人情に於ける、カーライルの人傑に於ける、バックルの科學に於ける、近くはキッドの物質的兼社會的境遇の改良に於けるなど、原動力のつかまへかたこそ論者の氣質々々を現して同じからざれ、飽くまでも實際問題として文明論に熱衷せる模様は相同じ。按ふにかゝる態度は文明其の者を論じたるものといはんよりはおのが經世策上より若しくは理想上より文明を論じたるものといひて妥當なるべし。

或ひはまた、利害得失の上より文明を論ずる者あり。一層適切にいへば、世俗が所謂文明の利益恩澤の夥しく且つ端手やかなるに眼眩み、只其の利あるを見て弊害の甚しきものあるを知らざるが如きを慨き憤るの餘り、主として文明の流弊を算へ、或ひは「大道廢れて仁義あり」と唱へ、或ひは「自然に復れ」と叫び、文化人工の加はらざりし古代の方が今よりも遙かに善美なりしやうに説

く者あり。或ひはさほどに極言せざるも頗る文明の利澤を疑ふ者あり。例へば、ルンナーが非文明論、ロマンチストらが所見、近くはフルードの進歩論、カーペンターの文明論、ラスキン、モオリスら詩人、文學者が著述中に散見せる非文明論、ニイチェ、トルストイ、ゴルキーなど最近諸作家が所見及び一派の宗教家の論説など。これらは直接に本論に關係ある所謂文明呪咀軍の大旗下に屬すべきものなれば、折々引合にいだす便宜上、假に總稱を附して、濃淡厚薄引ツくるめて、非文明論者と名づけおくべし。

或ひはまた主として現文明の成行きを占ひ、或ひは暗き、或ひは明るき將來のたゞすまひを豫察せんと試むる者あり。ビヤソンの“National Life and Character”の如き、ウエルズの“Anticipation”の如き、彼の黃禍論を主眼とせる諸著の如き、其の他メラミーの“Looking Backward”の如きを筆頭と做せる例の理想國物語一流の小説家乃至“Caesar's Column”の如き大破壊、大動亂を豫言する一派の傾向小説など。これらは専ら豫想上より現文明の傾向を研究するものと見做しつべし。

更にまた一派の研究者あり。そは文明の要素調べを眼目として甚だ生まじめなる學者式にて、或ひは多少詩人式も取りまぜて、文明其の者を研究せんと試むる輩なり。一二の例を擧ぐれば、ハートリスが“Civilization as a Science”、フヘンガンの“The Philosophy of Civilization”乃至クロージャーの“Civilization”のたぐひ是れなり。按ふに、文明といふ語が十九世紀以來の大流行語なるだけ

に、此の流の研究に成れる著書は、列國に涉つて求めなば、定めし汗牛充棟ならん。

さて以上種々の研究法あるが中にて此の最後の取調は、言はゞ研究の土臺石を据ゑつくるやうなものにて最も大切なこと、思はるゝなり。夫の濫觴しらば、因縁しらばなどは或ひは定義沙汰を二の次ぎになし、又は大概の定義で間に合せても濟むべきが、利害得失を論斷し又は其の精髓、原動力などいふものを論定せんとするに當つて、肝腎勘文の「文明」の定義がきまらず、其の要素さへもあやふやなるは、譬へば敵身方を見定めずして突貫の號令を下し、眞昏やみのなかで新稿柄のよしあしを論じあふやうなものにて傍ら痛し。成る程、定義調べなどいふことは、随分學者式中の仕事としても興味索然たる仕事にて、天下如何にも太平げにおのれが讀みたる限りのあらゆる著述より見當りたる限りのあらゆる定義を寫し取つて來て一山百文並に陳列し、あれかこれかと心長く比較研究に及ぶに至つては到底腦充血連中の我慢し得る所にあらずと雖も、さりとてまた首から定義調べなどは五月蠅し、まだるっこしと罵つて、驀地まうじに是非論の本營に亂入し雌雄を一擧に決せんと試みるは、是れまた甚しき事こと毀しにして、取りも直さず彼の緒いとぢを見附るだけの辛抱がしきれぬ爲に幾百束の絹絲を茶々無茶苦茶に纏れさせてしまふ手合と相擇ぶ所なし。尠くとも「文明」の要素は何々、其の根本義は何、其の定義は如何位いかにの地ならしは、是非止むを得ざる研究者の義務なりと思はざるべからざるなり。

さるによつて、先づ兎も角も「文明」といふことの内容調べに着手せんに、先づ此の語の根本義に凡そ三つの要素あり。一は進歩發展といふこと、二は團體本位といふこと、三は比較上最善なる状態といふこと、是れなり。以下、此の三要素につきて少しく解釋を試みる。

第一「文明とは進歩、發展プロGRESS、デベロップメントしたる人間の状態なり」といふこと、此れは文明論の中興ギゾーギゾーのかた諸文明論者のほゞ一様に必須と認めたる一要件なるのみならず、随分激烈なる非文明論者と雖も、よし意味の取りやうは異かはるとも、幾分かは認めざるを得ざる所なり。例へば、精神上の進歩は認めざるも物質上の進歩は認めざるを得ざるが如き、道徳上の發展は認めざるも知能上の發展は認めざるを得ざるが如き、是れなり。

第二「謂ふ所の進歩、發展は個人を本位とせずして團體を本位とすといふこと」、くはしくいへば、文明とは個人としての人間の状態が發展進歩せるを主とするにあらずして團體（社會全體）としての人間状態が發展進歩せるを主とすといふこと。按ふに是れも亦た文明論者間の輿論たるに近し。古くはギゾーの如きも、一面に於ては個人の發展を重んじたと同時に明かに「社會の圓滿に成りゆくことは是れ文明の根本義なり」といひ、ハーツスも「社會といふことは文明の精髓なり、これなくば文明は存在せず」といひ、フェルガソンも「文明とは社會的狀態をいふ、社會外に在る人間は文明の感化外に在るにひとし」といへり。

さて此の個人本位か團體本位かといふことは、餘り緊要にもあらぬ閑問題の如くなれども、多少是非論に關係あるゆゑ、後々の邪魔にならざらんため、一通り爰に辯じおくべし。世の非文明論者の中には偉大なる個人を養成することが文明の本來面目なるかの如くに解して、切りに其の名の實に伴はざるを口實として現代の社會を責め罵るものあり。奸佞怯懦の徒は輩出し、大聖大賢は全く跡を絶つ、大英傑もいづること稀に、大詩人、大藝術家のいづることも稀なり、古へに比して劣ることも勝る所なし、かくの如きもの之れを文明といはるべしやといふ者あり。按ずるに、これは大ぶ的違ひの氣味なり。いかさま、道德程度、技能程度の大きに進歩したる少數の個人を輩出せしむることが文明の本旨ならば、釋迦も出ず、仲尼も起たず、基督、ソクラテス、弘法、日蓮、ホームーヤ、シークスピア、フィチヤスやミケランゼロ、成吉思汗やアレキサンダー、其の他此のたぐひの偉人、天才が根ツから出て來らざる今の社會は、恐らく大失敗の文明ならんが、社會全體の品位と調子、即ち社會全體の知識、道德、技能其の他の水準を比較上高めることが文明の本意なりとすれば、數百年以前の最上流の知識の平均は今の中流以下のよりも低かるべく、個人的には退歩せり、墮落せりと文明の讚美者みづからも認めざるを得ざる道德とても、社會全體の上より見れば、數千年前は勿論、數百年前に比しても今日の調子の方が遙かに／＼高かるべし。成る程、上中下ともに偽善者は夥しかるべく、知識ばかり、口先ばかりなる場合もいと／＼夥しかるべけれど、而も數千年乃至

數百年以前には單に上流、中流にのみ貫流したりし道德の潮汐（例へば、四海同胞といふ感情、動物にまでも同情する感情の如き）が今は最下流にも波及しつゝあると事實なれば、個人について言はず平均上よりいふときは今の方がいにしへよりも勝るべし。キッドがその『社會進化論』中にいへる道德思想の擴充も、かく解し來れば事實なり。即ち史に傳へ來れるが如き聖人や賢人は絶無なる代りに彼の子路、子貢程度、十二弟子程度の人物に於ては必ずしも乏しきを告げざるとが所謂文明社會の特質なるが如し。之れを要するに、一國の文野は偉人、天才の有る無しによつて決せらるるにはあらずして偉人、天才を解し得る力、容れ得る力の多少によつて決せらるゝなり。偉人、天才は未開時代にも出で、文明時代にも出づれども、只一つ異なるは、未開時代は之れを解し得ず、容れ得ざること多くして、或ひは迫害し、殺戮し、或ひは悶死せしめ、徒らに埋没せしむ。基督にして十九世紀にいでなば十字架上の厄難あるべき筈なく、ソクラテスをして廿世紀にあらしめば彼れを獄に下す程の事だにも殆どあるべからずと思はるゝなり。又コロムブス以前に幾多冒険の航海者ありき。就中メキシコ發見者の如きは東西兩洋にわたつて調べなば二人三人のみにはあらざるべし。而も前者は當社會に歓迎せられ、後者は皆當代には其の名さへも知られず、否、敢て知らしむるだけの便宜なく自信もなく埋れ果てたり。一つは交通の不便にもよたらんが、主として社會の我れを解すまじく、容るまじきことを豫想したればなるべし。宗教界に於ても、學問界に於ても、

之れに似たることは幾らもあり。彼の英のウィクリフが其の熱誠と技倆とに於ては必ずしもルーテルに劣らずして而も其の功を奏せざりしが如き、彼の佛のラマルクが勿論其の説に精粗の差こそはあれ、ダーキン、ヘッケルよりも遙かに以前に同じく進化論を唱道しながら殆ど何等の反響をも得ざりしが如き、いづれも其の時代の未開なりし證、非文明的なりし證據なり。よりて考ふるに、文明は猶ほ地味、季候の如し、神卉、靈艸をして善く花咲かしめ實を結ばしむるや否やによりて其の地の靈凡の定め得らるゝが如く、偉人、天才をして首尾よく功を成さしむるや否やによりて其の國の文野を決すべしと比喻せば如何。所謂文明は果して讚美すべきものなるか、將た呪咀すべきものなるかは別問題として、そが個人的状態を指すにはあらずして、主として社會的状態を指せるものたる一廉だけは、以上の解によりてほゞ定まれりと見做すことを得べし。

さて第一と第二との取調べによりて「文明とは進歩發達したる社會的状态なり」といふことだけは先づあらかた定まりたるものとして、更に第三の要件たる「比較上最も善き方へ向ひつゝある社會的状态」といふことの當否如何を検せんに、さて是れこそは文明是非論の分かるゝ所以の根本問題なるだけに、大ぶ厄介なる代物なり。何となれば、先づ、「過去に比して善き方へ向ふ」といふ一條件は如何ばかり確實なる基礎の上に立てるにや、果していつまでも維持せられ得べき合理の見解なりや、若しや文明も或程度に達すれば、恰も彼の一個人が壯強極つて老に入り、老積りて老に

墮するが如く、次第に老朽し若しくは糜爛しゆくやうのことはあらずや。希臘や支那の文明がいつしか窮極して亡びしが如き同じ轍を踏むことはあらずや。進化と退化とは相表裏して宛然糾へる繩の如くなるにはあらざるか。進歩發展といふことは、語を換ふれば、次第に増長し、暮りゆき、甚しくなりまきるといふ意味にも解せらるゝにあらずや。されば進化といふことは其のはじめより成住壞滅の悲惨なる理法を暗示しつゝあるにはあらずや。即ち文明には定壽あるにあらざるか。されば文明よりも未開の方が寧ろ理想的の社會状態にはあらずや。などいふ種々の疑問滾々として泉の湧くが如くに起り來ればなり。

さてかく論じ來つて見れば事が稍面倒となるなり。従前の如く今の所謂文明を頭から一種善美なる方向へ進歩發達したる人間社會の有様、未開、半開の状態よりは遙かに優れるものと認定し、よしや若干の缺陷、餘弊等があらつとも、兎に角比較的に慶び迎へて讚美稱揚すべきものと信じ込みたりし時分とちがひ、既に文明の定義を疑ひ且つ其の利害得失を疑ふものが輩出し、呪咀黨、讚美黨と派分けまで出來て、嚴正に其の是非を決せざるべからざる今日と成つては、「文明」又は「シヰリゼーション」などいふ褒意を含める語は甚だ以て非科學的にして不便なりと言はざるべからず。蓋し「文明」とは『易』に所謂「天下文明」を連想し易きが故に「至善」、「圓滿」、「黄金時代」、「文質彬彬」などとも解せられ、「シヰリゼーション」將た「都雅」、「文雅」、「高尚」など、要する

に人間の幾段か高雅に成り登れる状態 *evolved state* と、語原上からも、慣用上からも連想せらるゝと自然なり。然るに嚴密に批判を下すときは、目下文明を以て自ら居る歐米諸國の状態は其の原始自然の状態に比して大いに發展し、大いに進化したるものなるとは言ふまでもなく明かなれども、(已に上にも反問せるが如く)かゝる發展、かゝる進化のト、の詰りは果して至善、至美の理想的結果を齎すべきものなりや否やは、畢竟謂ふ所是、非論の解決を俟つて後に定まるべき事にて、それまでは尙ほ一の疑問のみ。花が咲き盡して散り落ち、實が熟しきつて腐り爛るゝ例を思へば、大發展の其の裏面には大收縮が潜むとも疑はるべく、大進化の傍流には退化の暗潮があるらしとも推するを得べき理なり。若し果して然らば、今の歐米の社會状態を指して大進歩、大進化、大發達などと稱するさへも大ぶ樂天氣の勝ち過ぎた獨斷の命名沙汰なるべきを、まして「文明」だの「シヰリゼーション」だのとお目出たき名目を並べんこと恐らくは間ちがひの種ならん。何となれば、一に常識を標準として聞く者や讀む者は、恐らく文明を非とすることを首から甚しき悖理なるが如くに豫想すべく、或ひは無意義、自家撞着とも解すべく、或ひは其の反對なるは、其の美なる名の實に副はざるの甚しきを憤るの餘り、プログレス、デモクラシー進歩、發達などいふことの全分を擧つて抛ち去らんと焦立つにも至るべし。是れ皆用語の弊なり。若し夫の「文明」を字の如く解し「高尚なる道義の波及せる時代」又は「眞善美具足の時代」、尠くとも故福澤翁が其の文明論中に述べたる定義通りの文明を指すな

りといはゞ、

(福澤翁の定義によれば、文明とは天地間の事物を規則の内に籠絡すれども其の内に在つて自から活動を逞うし人の氣快發にして舊慣に惑溺せず身躬から其の身を支配して他の恩威に依頼せず、躬から徳を修め躬から智を研き古を慕はず今を足れりとせず、小安に安んぜずして未來の大成を謀り進んで退かず達して止まらず、學問の道は虚ならずして發明の基を開き工商の業は日に盛にして幸福の源を深くし、人智は既に今日に用ひて其の幾分を餘し以て後日の謀を爲す「たぐひのものに外ならず」)

今の激烈なる文明の呪咀者といふとも、強ち剛情にウンニヤ、それでもいやだ、嫌ひだと草摺引の五郎がいふやうなことは言はざるべし。彼等は讀んで字の如き「文明」を惡むにはあらずして今の所謂と肩書の附く文明、否、むしろ進エヴォリュション化といふことに伴ひ易き弊、發デベロップメント達といふものに隨ひがちなる流毒を惡めるなり。その證據には彼等の中に「僞文明」といふ語を慣用する者があるにも明かなり。即ち「文明」其の者を非とするのではなく「老耄せる文明」、「糜爛せる文明」、一言に言へば「文明の弊」を非とするに外ならず。と斯う釋きはぐし、取捌いて見れば、非文明黨の呪咀は餘り埒の無き、たわい無きことゝも聞ゆべし。何となればこの國にか僞文明や老耄文明を歓迎し、進化の餘毒や流弊に讚美歌をさゝぐる輩があらう筈なければなり。よしや或一部にさる蒙昧の徒があればからとて、それが爲に僞となすべからざる文明の要素をも抛ち若しくは弊となすべからざる部

分の進化をも棄つるが如きは更に一倍の没分曉的の振舞なればなり。かくいは、否々、然らず、非文明黨の面々が厳しく文明を非難するは今の所謂文明には種々の抜くべからざる悪弊流毒がさながら累代の遺傳病の如く、又は三つ子時代から染込んだる悪癖の如く、烏糞式にへばりつき、怨靈並に付き纏ひて、逆もく如何なる良方箋を以てするも決して之れを根切にするの望みは、理論上は兎も角も、實際に於ては成立し難きが故に、さてこそ其の弊を惡むの餘り是非なく文明の全體をも惡むなり。畢竟、足下らは歐洲に於ける僞文明、老耄文明の弊害が如何程に甚しき度合に立到れるかを察り知ることが出来ねばこそさ。悠長らしき論をも立つれ、佛國革命の前例又は我が維新の大變にても知らるべきが如く、百年以上の積弊が甚しく重疊し、凝着し、固結したる場合には、鋤鍬は勿論、鐵挺でも鉅でも役に立つたにあらず。修繕や取舍は姑息の沙汰、根つぎは到底出来ぬ相談、さういふ場合には悉く打毀して建直すか、全く別の地に建前をするか、それより外には工夫なし、今の呪咀者の見る所また此の意味に外ならざるを知らぬか、と辯解する者もあらんかなれども、それが夫の例の詩人式の短慮に近し。ろくろく脈も診ず、病症の見當もつかぬうちに此の病ひ他にも療治の見込なし、截開々々と叫ぶやうなものにて、玉石共に焚くの悔あらずんば幸ひなりと云はざるべからず。

(此の稿尙ほ書きつぐべき心組なりしが中絶す。)

牛のよだれ

(明治三十八年九月)

知らぬが佛といふことは古い諺なれども、知つたが地獄とは今の世の人の上なり。十九世紀以來假にも文明國の仲間入せる國民にして、誰れやらの所謂「自知の怖ろしき訓練」を経験せざる者なきは今更いはずともながら、廿世紀に入つて此風潮東洋の新參國を同じ渦中に卷込み、「自意識病」てふものが膏盲に入りかけた證據には、東西とも神經衰弱の大流行、世間に青瓢箪のやうな男ばかり夥しくなるは氣のひけることなり。自覺、自知を社會大進化の賜と謳歌し、自然に役せられずして逆まに自然を役し、人爲を以てして天工を補ふこと是れが人間の人間たる本價だなどと謳歌した口振はいつの間にかおひく減り、野蠻や子供の何にも知らぬのを無上に羨ましがり、二言目には文明といふものを先祖以來ちつとも世話になつたことの無い仇敵でやもあるかのやうに疾がり、繁文褥禮、汽車、電車、會社、製造所、いづれも人間の小才覺を以てして天然の善美を毀損するものに外ならずと泡を吹いて慷慨し、痼をたかぶらせた眼で觀るゆゑ、見聞くものが氣に逆ひ、神經は彌過敏になり、自意識益鋭くなる爲、未開人には針ほどの苦しむたことをも棒で列られた程に感じて苦悶すること文明社會の現状にして、餘り名譽でもなければ、お互ひに多少經驗する所な

り。此の爲體にてこゝ三四代遺傳を重ねなば、「時代病」^{マラデーナフゼエーガ}、「世紀末」^{フランドシエークル}などいふ名稱はやがて「人間病」、「世界末」など、改稱さるゝことゝなつて、天が下を擧つて半きちがひ、半よいくのやうな人間ばかりになつてしまふのではあるまいかといふ取越苦勞も萬更無理にはあらず。文明呪咀黨の所謂現代の諸弊は一へにこゝに發源するかも疑はる。夫れ詩人、作家、藝術家は、仲間中にては、褒めて豫言者などと稱すれども、俗人にはすれば、其の國、其の時の最も薄手な人間、凍りつめた諏訪の湖に譬へなば最も春暖に感じ易き部分、瀬戸物ならば瑕入り、國民としては豫め素因あつて最も早く時代病に罹り易き蒲柳の質とも解し得らるべし。さすれば彼等が好んで寫す所の人物は、大昔の小説のとはちがひ、總じて假面を被つた作家自身であると同時に、恐らくは當に來るべき人間を暗示するのことも想像せられ、歐洲作家の或作を讀みては羅甸民族滅亡の豫言も如何さま全くの夢話でないらしく思はるゝ消息乏しからず。かくまで自意識が深刻となり強烈となるに至つてはと杞憂を抱く人おひひに増加す。予の如きも作家の片端なれば、全の他人のことゝ思はれぬゆゑ、自他のために寒心すること屢なり。

そもく自意識のかくの如く過度に發達するに至れるは、餘り久しき間他力ばかりを頼み過ぎ、他律ばかりを尊び過ぎし反動とも見るべきなり。他力とは神、運命、自然等の力をいひ、他律を尊ぶとは君父の命令、輿論、習俗等に律せらるゝことをいふ。姑らく時局の影響によつて特別の心狀

態を生じたる我が國人を除外していへば、今の文明國人の最新代に屬するものゝ眼中には先づ兎角君もなく、父もなく、神もなし、といふが當然なり。ロマンチズム勃興の當時に詩人、藝術家の間にのみ唱へられ又は實行せられたりし美的生活、本能満足は、今は普通人の言ふ所、行ふ所なるが如し。彼等は大抵奇蹟を信ぜず、他界、未來世を信ぜず、祈禱力をも信ぜず。たまく神を奉ずる者あるも、其の所謂神は主觀的の神にして、めいゝが思ひゝに立つる所なり。イブセンが『ブランド』に

"Ye need, such feltness to brook,

A God who'll through his fingers look,

Who, like yow'selves, is heavy grown.

Mine is another kind of god!"

とあるは善く此の間の消息を傳へたり。彼のハウプトマンの作にもまた同様の意味見えたり。畢竟在來の神様は最早耄けて了はれたるなり。現代の所謂神は當人が主觀の投影、其の人みづからの理想たるに外ならず。つまり今人は何事につけても自分一個の判斷を標準とするなれば、自分の心以外に信仰の的もなく、本尊もなく、縋り所もなし。此の意味に於ける「自己中心主義」は實に十九世紀以來の時代精神なり。之れを主觀癖と名づくるも可なるべし。さてかくなりでは、眼中に釋迦

もなく、耶蘇もなく、孔子もなく、アリストートルもカントもなく、君父もなく、國風もなく、只自分を標準の智慧競、意地競となる故に、必然の結果として希臘古代のソヒスト、支那戰國の諸子百家を想連せしむべき獨斷説の額合せとなり、めい／＼別々の世界觀、人生觀、宗教觀、倫理觀、種々雜多の見解、いはゞ無數の尺度ちのさしを持つて來て一枚の着物を仕立おろさんとするやうなものにて、姑、小姑、嫁、針妙、乳母おんば、小間使、家内中を擧る衝突、矛盾、軋轢のごつたかへしては、誰れか鳥の雌雄を知るべきや。是非、正邪、美醜悉く紛糾し、一寸先は眞黑暗の中に成人おとなが悉く迷子となつてしまつた形なり。さて此の事實が世界の人心に及ぼせる影響は、當人々々の性質によつて一樣ならずと雖も、押しならして免れがたきは無主義、無理想の弊に墮するとなり。凡そ自分尺度の結果は、兎角無定見に流れ易し。而して無定見の必然の結果は、信仰無く、向上心無く、道義無きことなり。けだし件の時代精神をほめかせる文學上の作物は十九世紀以來算ふるに違なきほどなれども、最近時の傾向を代表せるものとしては伊のダンヌンチヨの作などは其の著しきもの、一なるべく、彼のシェンキキッチの『ウイザウト・ドグマ』といふ小説などもそれなり。其の主人公たる男は、無論宗教上の信念なく、道德上の主義もなく、戀愛の外に殆ど何等の渴望も向上心も無き懷疑家にして、世界に遍からんとする無主義、無理想の時代精神をスラヅ氣質中より撮影し來れるものとしては穿細至極せり。やゝ詳しくいへば、彼の徒らに空中樓臺を築くことに長じて活動の能力に

乏しく、事毎に理窟を附けて自家を回護する癖あり、存外に他人には無慈悲なれども、多感多情は持前にて何事につけても感受力驚くべく鋭く敏く、感銘は細かく深く、就中自他の心の働きを分析し、解剖し、批判することの精刻なること、到底十九世紀後半以前には其の例を見出しがたしいふものは是れなり。按ふに、今日文藝に従事するものにして、此の性質評を讀みて全然他人のことのやうに思ふことを得るものは餘り澤山はあるまじ。本來此の氣脈は、英に於ては十八世紀の中ごろリチャードソン、スターンに萌し、佛のルッソーに發展し、獨のゲーテに花を開き、全歐のロマンチシストに實を結び、其の後科學の大活動に逢うて標落し、近頃及びて更に第二回の花實を着けんとしてつゝありと評して可ならん。北はシェンキキッチ、南はダンヌンチヨと全く風土、習俗、歴史人情を異にしなから、只此の自意識深刻といふ一氣脈だけは相似たることの著しきを見ても、其の全歐に漲る時代精神たることは察すべきにあらずや。

世間的にいへば、彼のロマンチシズムといふ思潮は一大濁流なり。詩歌學藝の美名の下に血の氣多き我儘者どもを驅つて徒らに空想に耽溺せしめ、幾千人の怠惰者の爲に飛んだ體裁よき口實を供したるに過ぎざりし氣味あり。されど其の源は時勢の必要から湧いた清泉なれば、フィヒテ、シェリングなどはいふに及ばず、ヘーゲル、ショーペンハウエルの跡方附け連までが孰れも幾らかづゝロマンチシストの傾きありて、今日の研究的態度から見れば彼等も自分尺度ちのさしの空想家たる氣味あ

り。彼等の大哲學は一言以て蔽へば大根が主觀的なり、埋立地へ速地形はやびぎやうしてゴシック式の巍々たる大々迦藍を雲間に冲ひらせたやうなもの。輪煥の美人目を駭かし、一代の評判が唾壺からクロコゲイルが這ひ出した程に喧しかつたゞけに、一旦地盤がゐざりかけて土崩瓦解の場合となつては「主觀的見解」の信用おそろしく下落し、「事實」の相場が今更のやうに暴騰し、「經驗」、「歸納」、「客觀」なぞいふ語が流行り出し、何事も實驗の上、實試の上と、堀越式飯たきの格で、念に念を入れ一粒選り、服紗捌きやら、毒の試験やらの管々しさ此の上なし。されども當座は見物皆細かい細かい、とて感心せざるはなし。是れ畢竟ロマンチズム流の空想や獨斷が餘り流行りすぎたりし反動にして、即ち主觀的判斷法に對する客觀的判斷法の勝利なりしなり。英語でいへばロマンチック、サブジエクチベチーに對するサイエンチフィック、オブジエクチベチーの勝利なりき。かゝる因縁にて科學的研究はあらゆる方面に波及し、哲學崇拜熱は頓に冷却し、科學でなうては夜も日も明けぬこととなり、觀察、試験、分類、統計、比較研究、史的研究などいふ言葉は通用語のやうになり、一時は歸納推理萬能の勢ひ、科學の力を以てすれば宇宙間の事物何でも分らぬものないかの如き早呑込の噂、受賣姦しく、何さま、此の割合にて押行く時は、誰れやらがいつたやうに、兩氷洋アイスベルグの氷山を大軍艦の力で熱帯まで引いて來て地球の溫度を平かにすることも強ち大氷山の浮いた話でも無からうやうに思はれし頃もありしが、さても知ること彌、多大にして疑ふことも彌、多大となる習ひと

て、科學の進歩造詣は（肝腎要の根本問題に關する限りは）或程度までにて止まり、それからは牛の歩み、取わけ活物いきものの人間問題となると、懷疑又懷疑、研究の上にも研究の必要が生じて、複雑煩瑣の取調果しなく、所謂、「Scientific spirit takes nothing on trust」で、兎角斷定をしかねるゆゑ、事毎に *might be* と *would be* の「でもあらう」づくし自烈じりつたく、「事情にして變移せずば」とか、「或意味よりいへば」とか、「一面より觀れば」とか、「或程度まで」とか、「何々は別問題として」とか、何事につけても臆病おそらしく條件附コンディションナルの判斷ジヤッジメント七うるさく、煮え切らぬと夥しく、つまるところは底無しソコナシの井戸へ墮込おむやうな氣持にて、何一つ心持よく解決の出來た例なし。まして壽美藏の政岡では血の氣の多い向う正面連が鶴千代や千松に同感し「かゝさま飯いはまだか」と總立になりしも道理あることなり。總じて科學者氣質は頭腦の冷靜を重んじ、感情を貶しめ、斷言し斷行すると嫌ふゆゑに、宗教、詩歌、藝術もしくは現世的事業とは、まさか犬猫のやうでないまでも風する馬牛の趣きあり。そこで以て詩と學問とは次第に中がわるくなりはじめたり。昔は歴史といへば何處の國のも半分は小説のやうなものなりしに、十九世紀以來のは、先づ印度護謨インヂヤゴを嚙むやうなのを本場物とするならばし。又哲學書とても大昔には莊子やブレーのやうな洒落れたのもあり、天文學や植物學を韻文で書綴つた時代もありしを、今は哲學者、科學者の文章といへば的の字づくめの乾燥無味かんばつむゐが學者らしいと相場さば定め、「二二が四」といつても濟みさうな所を、氣取つた手合は「二

といふ數を以て之れを其の同數に乗すとせよ、吾人の經驗せる限りにていへば、概ね該原數の二倍たることを常とするもの、如し……」是れ豈に腦充血連中の我慢し得る所ならんや。

ジョン・モーレーの説によれば、彼のルッソの獨斷論が當代に歡迎せられしも、其の一因はモンテスキュー一派の史的研究が餘りに煩瑣に流れたりし反動なりとか。蓋し、ルッソによりて開かれし空想派の泉流がロマンチズムに至りて汎濫の極に達し、こゝに再び科學派の捲土重來を招き、科學萬能が再度頓挫するに及びて新ロマンチズムまた起り、今日現に見るが如く、新舊の思脈亂麻のやうに入亂れたるなりとも見るべきか。

扱又之れと同時に新聞雜誌的科學思想の普及は、一知半解者流の濫用と相俟つて、大に科學の信用を損じ、「淺薄なる科學」などと、根ツから科學に縁のない我々にまで大きにチャチがらるゝこととなりたり。それも本元さへ隆々の盛運ならば、何のかけかまひなきことながら、實際大本營は當分冬籠の爲體、肝腎の根本問題は扱も其の後ちつともそつとも進歩せぬ地だゝら、天地の本體、本源は扱おき、吾々人間の真相、歸趨からが不明なること十八世紀ごろとさして異つたともなし。嗚呼ニュートン、ダルトン以來科學上に進歩はあれども革命はなし、科學は今も尙ほ過去の推測者、現在の穿鑿者たるにとゞまれり、到底將來を豫言するの資格はないものだわえといふ半疊を打込むもの漸く多く、科學萬能の褒言葉いつの間にか歇み、科學崇拜熱めつきりと冷却し、尠くと

も詩人肌の多血質連中に對しては科學は其の信用を失ふこととなつたり。之れを世に「科學及び實驗哲學の破産」と稱す。昨今の形勢も尙ほ此の體なり。

彼のロマンチズムの汎濫は、世間的に見れば、新代の個人が浮世に處し惱みし苦悶煩悶の結果とも見るべかりしが、今や科學の破産と共に第二の失望煩悶がはじまりたり。一方に於ては物質的文明の進歩に目を眩まして黃金時代が鼻の先へ近づいたやうに思ひ、精神界の事も科學如來の御誓願で萬遍なく救はるゝこと望みを屬せし度合の餘りに甚しかりしだけに、失望も憤激も煩悶も前代の幾層倍に烈しく、氣早の若手は、世界は全く機械的なもの、人間の事は言はゞ夢の戯れ、何でも只利口で押し強い奴が勝ち、宗旨も道德もあつた者かえ、と放埒を意見する實の親に食つてかゝつても、和解へ叔父貴と兄貴からが善惡論で目に角立て争みあふといふ思想の紛糾、大亂派。何が何やらさつぱり分らず。

之れを要するに無理想、無主義の濁浪が天に漲る時代は、進退是れ谷まり、天を仰いだところが、神も佛も本體が分らぬので頼みにならず、只力綱は自分の智慧ばかりとなつては、度胸のあるなしが人間品定め唯一の目安となり、「意志崇拜」の世の中となる自然の數なり。夫れ信仰もなく、主義もなく、理想もなく、何等向上の念もなく、只自分の利益を專一の時代には、生中の人情はどうやら無用の長物に過ぎざるが如くなれども、そこが人間の悲しさには、此の人情といふも

のを流石根こそぎにも棄てかねて、利己と愛他の中有に迷ふ氣の弱い我利々々亡者も夥し。若し此の一代の心的傾向に何等かのイズムありとすれば、假に之れを現世主義と自家満足主義との二大イズムに歸收すべし。濃淡の度、高卑の質にこそ驚くべき別はあれ、現代人心の向ふところ、先づ此の二者を出でずとも見るべし。蓋し我意強くして他人を思ひやる情薄ければ、眼中に宗教なく道徳なき論理上の結果として、人間つまり五六十年と高をく、り、我慾を遂ぐるより外に満足はなしと合點し、哲學者の講義を俟たずとも快樂主義、本能満足説に立脚する筈。扱又靈魂の不滅を信ぜず、他界の存在をも信ぜざる自然の結論が、最も高くして娑婆即淨土説となり、それから墮落した「今日主義」*Today-ism* といふ賈ひ物の流行一世を風靡せんとする勢ひあり。現世安樂が一點張の望み、功名が無上の手段。我が園遊會の立食は今日主義者生存競争のシムボリズムなり。

かういふ時勢となつては意志の薄弱な連中は一段と可憫なり。自身定見なきゆゑ、君子肌なれば、それも一理、これも一理と退讓づくめで埒あかず、つい一生を無能に終り、小人肌は時勢の然らしむる所、生中智慧だけがよく働くゆゑ、左右前後が二三間宛はよく見え、それが爲に足がすくみ、手がすくみ、只管世間が怖ろしく、人の鼻息が怖く、何事も天真爛漫にはえせず、阿附し、面従し、矯飾し、偽善し、宿無し犬が家々の掃溜を探り歩くやうに人目をぬすみて窃々と快樂主義を行ひ、自家満足主義を行ふ。詰り、輿論を奴隸的に怖るゝことは慥かに現代の通弊にして彼のイブ

センが諸作に互つて痛罵せる所のものは是れ也。然らざれば、徒らに疑惑し、危懼し、苦悶し、怨嗟し、自暴を起して墮落し、果は氣が狂うて自殺する者もあり。若しくは筆舌に責任の破壊論を唱へ、他人をして自家が實行し得ざる所を實行せしめんと願ふ者もあり。之れを要するに、小膽者は偽飾し、剛膽者は横暴をも敢てす。輿情の傾向が著しく爲我的なること明かなり。此の間の消息を傳ふる作家としてイブセンは實に其の一番鶏なるべく、ゴルキ一の如きは夜明鴉に比すべし。

爲我的といふこと必ずしも悪い意味にあらず。自家満足主義もまた然り。甚だ高上な意味にも解するを得。例へば、彼のグリーン一派、パウルゼン一派の倫理説の如きを此の時代精神の醇化されたるものと見る場合の如きは是れなり。よしさなくとも個人主義全盛の世に人心が私慾一點張といふ意味の爲我主義に流るゝとも、それは昔から有中の事に於て不思議がるに及ばず、随つて取越苦勞をなし、狼狽へ騒ぐにも及ばぬながら、只こゝに注意すべきは、現代に限り、利己主義といふ意味の爲我主義にも「自是的」といふ特徴の伴ふとなり。昔もアリスチャッポスや楊朱やマンド井ルやホップスがあり。これらは或ひは利己主義に立脚し、或ひは利己主義を是認し、そこに倫理の地盤を据ゑ、表立つて利己主義を主張したりし連中にて、かゝる例は決して今日に始まつたことにはあらねど、それらと目下上中下に瀰漫する粗造品並の「自是的利己主義」とは、唱ふる連中の本意、目的、適用の範圍、實際の作用の上に際立つた相違あり。今は中、小學の童兒までが爲我的功利主義

の信者にして、學問經驗の生中な手合は底を拂つて楊朱、マンドギルの亞流たらずんば、ホッブス、アリスチッポスを生嚙にした連中らしいはまたなこと、ニーチェが新しげに説き立てし倫理説も彼等に取りてはとつくの昔に實踐したるに外ならざるの概あり。彼の佛の澆李派一派の言行に徴し、若しくは近き三四十年間の歐洲大陸文學が明示し又は暗示する所によつてかゝる風潮の如何に現代に盛なるかを察すべし。「斬取強盜は武士の習ひ」とは階級制度と武家的功利主義とに伴へる自是的利己の一例なりしが、近來流行の姦通是認、自墮落是認などに至つては、非階級的、非功利主義的なるだけに、其の影響に於て大ぶ關心すべきものあり。要するに過去の利己主義は大抵半無意識にして半自非的なりしに、現代の傾向は悉く意識的にして且つ多少自是的なり。自ら責むるの心無きゆる悔悟遷善の機縁乏しく、自墮落募り易し。昔は「義務だぞ」と言はるれば奮然として起つたものなりしが、今日は其の反對に「義務だ」といはるれば意志が麻痺るなり。是れ畢竟は教育普及の結果、平等自覺の結果として、一度は社會が經過せざるべからざる倫理的状態なるべく、即ち平等主義に伴ふ個々人が自尊心の然らしむる所と、例の科學者風に沈着拂つてしまへばそれまでの事なれど、かくの如き變現象は、尠くとも天保生れの頭腦をして國家の滅亡を杞憂せしめて餘りあるほどの倫理上のがんどう返しなり。何故といふに、純然たる自分勝手一方を最上善と立つるに及んで、倫理説は全く其の開關以來の標準を逆まにしたりといふべからずんば、尠くとも二三十年以

來の臺座を顛覆したものと云ふべければなり。ニーチェが見事新倫理見を創始したりと信じ、第二の基督を以て自任せしこと謂はれありといふべし。

語は新時代精神の引札にして、舊時代精神の化石なり。十九世紀に入りては、*self-interest*、*self-life*、及び *self-love* に關する語の殖るたること驚くべし。大陸の事は知らず、英語の中にて大陸文學の翻譯、新倫理學説其の他の必要上より十九世紀も其の後半中に造られたのではないかと思はる、語尠からず。一寸した見本が、例の倫理學上の用語たる *self-realization* & *self-satisfaction* 乃至 *self-fulfilment*、*self-centrism* 其他 *ego-theism*、*self-worship*、*self-idolatry*、*egotism* 等。又熟し用ひたる例のうちには *cult of self*、*aggressive egotism*、*egotism incarnate*、*delirious individualism*、*individualism gone mad*、*each-for-himself-ness*、*in-and-for-one-self-ness* など。明治の社會にも大ぶ用ありげな語あり。以て時代精神の趨向を窺ふべく、兼ねて現代の變調は無我、献身、克己、遜讓を絶對の理想としたりし東西幾千年來の舊道徳に對する反動の結果たること、學者先生の取調を俟たずとも明かなるにあらずや。

此の爲我主義大盛の陰影は特に西洋諸文明國の小説中に黒々と映じ居るのみならず、我が明治作家が作中の人物も多少同血脈の人種たることおひ／＼明かになり來れり。歐洲最近名家の作中の男性人物の著しき特質は、いづれも神經過敏にして痛ましきほどに自意識的にして、喜ぶにつけ、

悲しむにつけ、只の刹那も忘我することが出来ず、随つて深刻に爲^{イロイステック}我的にして我が最愛の情婦とすらも曾て同化する能はざるものさへあり。或者は餘りに聰慧にして想像臆測に長じ、直覺に拙く、決斷に鈍く、何事につけても兎角本能的に行動することを難^{かた}ぜんとす。女性と教育無き下等社會だけは尙ほ流石に然らず、彼のツルゲネフ、ゴルキーが作中などに、頗る克く此の間の消息を傳へたるものあり。されど其の實、此の傾向の獨りスラヴ民族中のみ存在するものにあらざる證據は、那、佛、獨、伊、いづこの近代小説を見るも多少類似の人物の寫されたるによりて會得すべき也。イブセン、ゾラ、モーパッサンなどの作中について見るも、眞に他人の爲に忘我し、献身し得る人物は大抵女性にして、男は品^{パソナリティ}性の高下に拘らず、又意志の強弱に拘らず、十中九まで瞬時も忘我する能はざる人物なり。智餘りあつて意志足らざると同時に「自我」といふ念の餘りに強烈なるなり。けだし是れ將たロマンチズム以來の暗流にして「ハムレットはやがて日耳曼なり」と稱せられた頃よりのことにして、露西亞などへも大ぶ早くより流れ込みしものらしく、たしかツルゲネフの所論の中にもハムレットとドンキホーテを比較して後者の勇往直進を稱歎したるものあり。多智に伴ふ懷疑、不決斷、多想像に伴ふ空想、臆病、深刻なる自意識に伴ふ深刻なる利己主義、此の血脉の因つて來る所遠くして且つ深し。

かゝる不健全なる傾向のおひく甚しくなり來れる時に際し、他方にまた之れをして益、激烈な

らしむるに與つて力あるべき一事實あり。他なし、人工の進歩に伴ふ不健全なる傾向是れなり。此の事の詳細は、到底今こゝに述べ盡すべくもあらねど、只一言すれば、文明の進歩によつて萬事萬端が餘り便宜になり過ぎ、それがため、便安逸樂がふんだんになり、身をも心をも苦に慣らすといふことなきより、先づ人間の身體からがおのづから孱弱に育つといふことなり。

Thus first necessity invented stools,

Convenience next suggested elbow-chairs,

And hurray the accomplished sofa last."

奢侈便安が慣れツことなつたる文明社會の通弊は懦弱懶惰の生活なり。現代の人間は自意識の強きため感覺がさらぬだに鋭敏なるに、早くより便安逸樂に慣るゝゆゑに、聊かの苦をも忍ぶ能はず、又自由時代の弊として放縱の癖が沁込み、慾を節するの勇に乏し。現代の理想は *gastroonomy* (食道樂) と *literature* (美文學) なりと或露西亞小説の翻譯中に見えたるは克く此の惰風を喝破せるものなり。夫れ精神上の悅樂は再三にして厭ぐとなけれど、肉體上の快樂は屢すれば興さむるを常とす。神經過敏の癖として、一寸した不快感にも飛びあがるほどに感ずるが常なれど、快感に對しては、視聽味嗅觸ともおそろしく遲鈍になり、到底尋常の物品や尋常の手段方法では満足を感じがたくなる奢侈の増長、衣食住とも、人工全盛時代の然らしむる所として、工夫に工夫を重ねて天然を磨

損し、不健全を募らするに忙しく、飲食から、服飾から、娛樂、遊藝、何でも皆五感を快く振るが目的で出來てゐるゆる、神経片時も休まる間なし。取りわけ上中流の人間は、一世を擧つて珍物を漁る有財餓鬼、榮耀に餅の皮などは今は樺太あたりですら通用のいかゞはしき俚諺なり。香料、嗜好品、リフレッシメント、興奮劑、強壯劑、曰はく何、曰はく何、名は藥、實は毒藥の發明果を知らねば、何の事はなし、滅亡間際の羅馬貴族の贅澤が平等時代の恩澤にて最下級にも波及する爲體、殊に中央首都に在つては理髮師のアップレンチスからが小ペトロニウス其の人なり。電車八達の今日は、日給十五錢の六尺男にして其の足一代、三町とは都の土を踏まいで濟む大便利、運動不足して不消化く、腸胃カタル、神経衰弱、何れを見ても文明がる手合に青瓢箪のつらがまへならぬはなし。かて、加へて何處も同じ生存競争の激甚、生活難に驅立られ、おのれが健康や才分には斟酌なく無理詰込の早學問、只我れ先と出世成功を急ぐ故、さらぬだに神経は過勞すべき筈なるに、鐵と蒸氣と電氣との效力で、急に五大洲が縮小り、西洋と東洋とは壁一重の隣づからなれば、パリ、モスクワの爆裂彈の碎片がイツ支那、日本へ飛んで來まいものでもない世界の狭さ、騒がしさ、目まぐるしさと氣ぜはしさとで深刻な自意識の苦みは彌、以て堪へ難く、或ひは毒と知りながら種々の麻醉劑を濫用し、酒と阿片と女色との爲に慢性自殺を行ふ者の増加するも道理。さすがに此の三つの魔藥だけは一時忘我さする效能あればなり。まして彼の「戀」といふ魔藥の力は餘程甚しき爲我家を

も恍惚として忘我せしめ、時として向上の志しを發せしめ、死を怖るゝ念をさへ全く解脱せしむることあり。宗教の威信衰へて昔の神様は耄けてしまはれた現代に、酒ならずして、阿片ならずして、此の靈驗を有するもの、此の外には亦た有るべしとも思はれず。若し假に有りとすれば、所謂大文學、大藝術なるべけれど、下戸にはアルコールの向かぬが如く、文學、藝術の功德にはおのづから限界あり、逆も彼の「戀愛」の如く普遍なると能はざるや勿論なれば、今日戀愛の神聖が唱へらるゝは畢竟するに時勢の必然なり。さればまた今の青年は、失戀といふことをさながら人生の身代限なるかの如く感じ、氣短かにも自暴自棄して無慚の結果を醸すこと多し。之れを要するに、西洋諸國の一側面を「文明の食傷」と診斷するは、多少道理あることなり。尠くとも「自意識病」の爲に神経の甚しく衰弱したる病人ならぬ病人が年々歳々に増加する傾きあることは事實らしく、彼等は、或ひは父母、祖父母が蕩逸懦弱なる生活の業因により、或ひは自分自身の不養生によつて、いつしか身心を病的に持崩し、ヒステリーの的となり、瘋癲的となり、白痴的となり、甚しきに至つては、荒淫者の末路の如く、飲食も舌に美からず、聲色も視聽に快からず、浮世の事一切を面白くなく、つまらなく、無意義、無趣味に感じながら尙ほ命のみは何となく惜しくといふよりは、死といふことを只何故ともなく怖ろしく感じて、人百倍に苦むさま眞に惘然の至りなり。ゾラが『生の悦び』の主人公、イブセンが『亡靈』の主人公などは死を怖るゝ人物の好例なるべし。尤も特に取

出していふまでもなく、凡そ羅匈民族を代表する最近小説家の作中には此の類の人物殊に多し。又彼の澆季派の詩人中などには事實上の例も尠からざるもの、如し。よしや幸ひにかゝる甚しきには至らざるまでも、苟も現代の青年、就中文藝に従事する連中にして多少此の種の苦痛を経験せざる者はなかるべく、時には經驗せずとも經驗したらしくものせねば幅が利かぬといふほどなり。中には極端より極端に走つて突然宗教信者となれるもあり。宗教家はかゝる場合を發見する毎に狂喜して宗教復活の前兆也などといへど、ロマンチストらの發心はともすれば感情上の道樂、徒の *sublime selfishness* (崇嚴なる私慾) に過ぎぬこと多ければ、餘り多くを望むは失望の基なるべし。勢ひ此の如くなれば、それやこれやを思ひおはせて文明諸國の前途を悲觀し、或ひは羅匈民族の滅亡を豫言し、或ひは「澆季」、「墮落」、「退化」など、種々不祥なる名稱を並べて「文明」を呪咀する人々の日々に増加する、これもまた一理あることなり。

さて之れを一概に大陸一つあなたの精神上のベストと見流し、何の豫防策も講ぜざると可かるべきか。又は風聲鶴唳に驚き、利を享樂すること未だ半ばならざるに、早く既に文明の流弊の戦き、あわて、呪咀黨に雷同すべきか。是れ緊要なる一つの問題なり。

ルネサンスの昔、彼の大思潮が歐羅巴一面に汎濫したりし時、英吉利は島國なれば、其の利に浴することもすつと大陸諸國に後れたりし代りに、人によつては岡目八目を利用し、前車の覆轍に

鑑み、幾分か弊を薄うするを得たりしものあり。我が東洋の新參國うまく此の前蹤に倣ふことを得るやいかに。是れが第二の疑問なり。

ノルダウの『現代の墮落』の序

(大正三年一月)

一時歐洲の論壇を騒がせし博士^{ドクター}ノルダウの本著は、近世文藝の代表者を月旦したるものとしては、其の言ふ所矯激に過ぎて批判の正鵠を外れたりと雖も、所謂世紀末の時弊を剔抉せるものとしては、今なほ頗る含味するに足るものなり。歐洲近世文藝の對社會的一側面を暗示せんと試みたるものとしては、永く參照の價値あるべきを信す。

古來、文藝家を論ずる者に隱然として二大派あり。一は文藝家の立場を絶對的と看做し、其の對社會的利害關係を悉く其の照準の外に置かんとするもの。他の一は然らざるもの。前者は所謂藝術の爲の藝術、若しくは創造の爲の藝術等に立脚せる者の主張なり。彼等は文藝の天地と社會功利の天地とは截然として相交渉せずと做す也。文藝家として卓絶し、所謂創造家たるの實ある場合には、其の性行の病的なると其の對社會的影響の有害もしくは不健全なるとは問はざるも可なりとする説なり。按ふに、かの盲人が其の視力なきが爲に勘の益、聰敏なるが如く、精神病者、狂信者又は自己催眠者が、其の精神に異狀あるが爲に、驚くべき奇蹟を演じ得るが如く、缺陷もしくは自己暗示に基づける精神集中は、往々にして常識と常行との企及し得ざる所を爲すものなり。常人に在りて

すら斯くの如き例屢ありとすれば、絶代の天才者にして悉く功利の俗累を脱し、専ら其の心を藝術の三摩地にのみ集中せしめたらん場合には、未曾有の創造をも善く成し得べき道理なり。

嘗に道理上然るのみならず、内外古今の文藝史を検するに、文藝家の大多數は、殊に其の卓越せる者は、何等かの意味に於て精神上の不具者たるなり。かるが故に、一に創造といふ事に重きを置く以上は、文藝を論ずる者の立場は、自然に超社會的とならざるを得ず。

文藝と社會の利害とを相關係せしめて是非せんとする者の主張にも種々の濃淡あり。或者は宗教家、道徳家の立場よりし、或者は社會經營家もしくは人種改良家の見地よりす。前者は支那、日本、英國等の舊時代の非文藝論者、即ち儒者、ビュリクタン等と其の論の基調を同じうせるものなれば、今更めて説明するまでもあらず。併しながら後者は稍其の規模を異にす。彼等は文藝家を個人として其の私的性行を論議し、又は其の周圍に於ける個々の感化、影響等を是非せんとするにあらず、寧ろ彼等文藝家の作品を以て、全社會又は全民族の精神的趨向を標示せるものと解し、其の不健全なる作物の喜ばれ、もてはやされ、崇拜せらるゝに至る所以のものは、世を擧つて神經衰弱者なるが故にして、彼等は取りも直さず當頽廢時代の精神的不具者を代表せるものに外ならずと做すなり。即ち文藝の健全は、民族の健全に係る根本的問題の象徴にして、之れを大にしては、世界の興廢存亡にも關係すべき大問題なりと做す也。博士ノルダウの如きは、此の後者の見地に立つ者なり。

に立つ者なり。

十九世紀末民心の歸向を悲觀し、歐洲文明の爲に其の將來を杞憂せる論者は、既に少からず。或ひは泰西近時の社會情態を以て羅馬帝政の頽廢期に比せし者あり。或ひは早くも拉典民族の衰滅を警告せし者あり。或ひは之れに附帶して黃禍の怖るべきを論ぜし者あり。或ひは人種改善の機の逼れるを厲説する者あり。或ひは又之れを彼の寫實主義、自然主義、唯美主義等の近世文藝の責任に歸して、其の非議に力めたる者もなきにあらず。然れども世の文藝の愛好者には殆ど神の如く崇められたる世紀末の大家、巨匠を、何の斟酌をも施さず、例外をも置かずして、之れを悉く頽廢的時代精神の代表者なりと斷言し、而も飽くまでも冷靜に科學者らしき態度を持し、詩歌、小説、繪畫、音樂、演劇等の各方面に涉つて手廣く且つ手強く、時代精神を數論痛難せると、ノルダウの此の著の如く大膽にして博到なるはあらず。ノルダウは、彼の犯罪學の泰斗、伊のロンプロゾーの學説を奉じながらも、其の文藝家に對する審判と宣告とは、遙かに其の師よりも苛辣なり。ロンプロゾーは、高き才能ある變質者は何等か社會に貢獻する所ありといひたるに、ノルダウは之れを否定し、總ての世紀末特徴を社會的には有害にして無益なるものと解したり。氏は歐洲の民衆は擧つて神經衰弱症に罹りつゝあるものと做し、其の症候を數へ、其の病源を論斷し、其の文藝上に具體化せられたるもの、頗る詳細なる解剖に及び、更に其の豫後をも談じて其の治療法に論及せり。氏の論を

行るや、主としてロンブローゾーを祖述し、専ら事實に依據して歸納的に推斷し、一見、如何にも慎重にして周密なるのみか、生理上及び醫學上の科語を運用するに於ては、お手の物の觀あるが上に、文藝品の弱點、缺所を看破する事に於ても、侮るべからざる爛眼を有せり。蓋し氏自らも、曾て小説數篇を著したる一個の文學者なるが故に、斯道に關する造詣淺からざるものあり、隨つて論の矯激に過ぎたるにも拘らず、其の文藝家の心理を剔抉するに當つては、時に鋭く當該者の病所に命中せり。加ふるに、論斷直截、措辭明快にして、證例を引くこと豊かに、比喻を構ふこと巧みなれば、初めて此の書に觸るゝ者は、淺弱ならざる印象を受くることを常とす。殊に近世文藝史に精しからざる場合には、或ひは輕卒に氏の説く所を以て全分の眞理なるが如く速斷し去ることなきを保せず。氏の論法の歸納的、科學的なる點が、先づ大いに讀者を籠絡すればなり。併しながら此の書の警戒すべき點は、却つて此の點に在るべし。即ち其の歸納的なるが如くにして其の實は演繹的に其の科學的に無私なるが如くにして、其の實は成心的にして且つ餘りに功利的なる點に在り。氏はロンブローゾー其の他の科學的研究者が、精神病者及び變質的犯罪人の心理、病理、遺傳等を審査し、實驗し、統計して得たる結果の原則を、殆ど其の儘に斟酌を加へずして文藝家社會全體に適用したるかの如き觀あり。されば氏の論は、慎重なる歸納推理法に従へるものゝ如く見受けらるれど、其の實は豫め最後の診斷を下しおきて、之れに相應すべき症候を求めたるものゝ如く、一見、如何

にも道理らしく感ぜらるゝにも拘らず、道理にも又事實にも背ける部分少からず。少くとも文藝家の月旦としては、牽強附會の論たるべき弱點を有す。氏の如き論法を以てする時は、嘗に世紀末の文藝家のみならず、内外古今の偉人、天才、英雄、豪傑の大多數も、或ひは大抵、變質者の定型中に喩攝せらるゝことを免れざるべし。少くとも最も卓越せる詩人、小説家、美術家の如きは、氏が其の論の或部分に於て「總ての天才が皆變質者なるにはあらず」と斷りられるにも拘らず、殆ど皆一種の精神病者たるべきなり。是れ此の著の偏頗矯激と非難せらるゝ所以にして、彼の博士ヒルシが其の『天才と頽廢』に於て、穩健に、眞面目に、無名氏が其の『リジエネレーション』に於て、稍、不徹底に、若しくはショーが其の『藝術の健全』に於て、専ら藝術上の立場より、此の書を反駁せる所以なるべし。要するに、ノルダウの本著は、近世文藝を、多少の反感と成心とを以て、主として功利主義的見地に立つて批判せるものと見れば可なり。

併しながら世間の近世文藝を辯護する者流の論にも、時に大いなる矛盾あり。彼等は古への政治論が君主を神聖不可犯と獨斷したりし如くに、文藝家をも絶對神聖と獨斷せんとす。而うして何故に彼等文藝家のみが、現代の社會に斯かる傍若無人權を有し得るやに就いては、兎角、其の論旨の徹底せざるを例とす。蓋し彼等が文藝の立場を神聖と假定するも可なり、又文藝家の性行は社會の功利と相交渉する所なしとするも可なり、然れども社會の組織と制度とが根本的に革新せられざる

限りは、之れを可なりとする所以は、文藝家の作品が——よし直接的ならざるまでも——何等かの關係に於て——よし近き將來に於ては其の事なきまでも——いつの代かの人生に何等かの貢獻をなすべきものと假定する點に存せざるべからず。然らざれば特に文藝家のみに斯かる特權を與ふるの理由成立たざればなり。創作家たるの實功ある者を眞の文藝的天才と做す所以は、一に此の理に基づかざるべからず。所謂創作にして、如何なる意味よりするも、人生の向上もしくは擴充に裨益せざる者ならんには、特に之れを重んずべき理由なく、又之れを作し得る資格あるが爲に、特に其の人を重んずべき理由もなければなり。彼等にして全然無差別を標榜し、あらゆる尋常の個人にも文藝家同様の絶對自由あるを承認すれば知らず、苟も階級を設け、種類を分ち、文藝家と俗衆との間に等差を立て、創作に努むる文藝家にのみ傍若無人權を附與せんとする以上は、彼等の主張する所も亦た一種の個人的功利主義に外ならず。而うして其の所謂創作は——よし之れは主として自己の爲にするものにもせよ、其の所謂自己が現在目前の小我にはあらずして、常に向上して息まざる底の自己なる以上は——何等かの意味に於て、廣義の人生と相渉るものならざるべからず。更に碎きて言へば、未來の人間生活に何等かの關係に於て、利害の影響を及ぼすべきものと假定せざるべからず。若し斯く解するを許すとせば、創作尊重論も亦た一種の功利觀的評價に外ならざるにあらずや。即ち天才を尊重し、文藝を尊重するは、其の所謂創作に何等かの實效あるを假定するが爲

歟、又は今は未だ創作らしきものを成し得ざれども、早晚、有力なる創作を貢獻し得べきを豫想し、其の潜勢力を尊重するが爲ならざるべからず。此の理を以て推すときは、人は文藝に従事するが爲に尊重せらるゝにはあらずして、高く常人に超越するの創作を成し得るに及びてのみ一種の特權を贏ち得るなり。言ひ換ふれば、其の功の大いなるが爲に、其の過を問はれざるのみ。

然るに世上の事は紛れ易く、天才者を尊重するの餘りに天才者に有り勝なる一種の病的性行を推稱し、或ひは創作を尊重するの餘りに二重三重の模倣に過ぎざる作品をも推尊し、其の結果、文藝の鼓吹に努むるよりも、放埒生活の辯護に力め、藝術の名の下に不義不信を奨勵し、番に社會を累害するに止まらず、往々にして斯道の累害をも醸す者あり。斯かる輩に限りて案外に眞の天才の心に疎く、天才を扶掖するを其の任となすと自稱しながら、——多少の私心に累せられて——餘りに早く激賞し、煽動し、吹聴するが爲に、却つて誤つて將に伸びんとする天才の嫩芽を枯すことあり。或ひは又天才は世間の道德に超越するものと主張しながら、之れを愛するの餘り、及ぶべくば世間的評價の上に於ても一の完人たらしめんとを希望し、牽強附會して以て一文藝的天才を宗教家たらしめ、社會革新家たらしめ、甚だしきは政治的天才、豫言者、聖賢とさへも呼ばんとし、却つて該天才をして往々にして虚榮の邪路に蹈み入らしめ、強ひて其の非を蔽うて君子人を偽裝するの已むを得ざるに至らしむ。艱難は人の性を醇化すと諺にも謂へり。尋常人に於てすら然りとすれ

ば、天才者は殊に然るべき道理にして、現に内外の文藝史傳は其の實例を供して餘りあるに、彼の似て非なる文藝の辯護者流は、とかく濟し崩しの扶掖奨勵を事とし、未だ根づかざるうちに過度の肥料を下し、天才者をして小成に慢ぜしめ、折角の天資を枯殺せしめ了る。彼等は天才の大成上よりいへば、友にあらずして敵たるに幾し。彼等の多くは、要するに一知半解の文藝論者にあらずれば、近世文藝に中毒せる者なり。譬へば、彼の虚弱者が餘りに口に旨き、随つて消化し易からざる食餌のみを攝取せる時、乃至飲みなれざる芳烈の美酒を貪り飲める時は、忽ちにして胃病患者となり了るが如く、彼等は近世の芳烈なる文藝に酩酊せるなり、幾多のイズムの複雑なる織維より織り成されたる消化しにくき近世文藝に食傷せるなり。斯くの如き胃病患者は常に屢、ディヤスターゼを攝るの要あり。例へば、彼の内外の文藝雜誌又は彼のブランデス、エリス、ショー、ヒュネカー、ヘンデルソンら一派の文藝推稱者及びニーチェの祖述者、自然主義其の他の文學鼓吹者等の著書によりてのみ近世文藝の消息を窺へる人々の如きは、萬一の解毒劑として本書を精讀するも有益なるべし。それらの著は、いづれかといへば近世文藝の美所のみを提唱して、其の對社會的關係に疎なるものなればなり。

之れを約するに、本著は文藝に精しからざる讀者に取りては、(前段に述べ置きたる如き取り除きを以てして)、一種の近世文藝論たり、豫備的人種改良論たるの用をなすべく、近世文藝の美なる方

面のみを知りて之れに心酔せる者に取りては、虚心にして研鑽する餘裕あらば、他山の石たる效用あらん。

中島茂一君の重譯の筆甚だ直截にして明快なり。譯書にありがちなる晦澁含糊の失聊かもあらず。是れ一は斯かる談理の書には必要ならざる、彼の逐語譯の法を取らずして、任意の意譯、時としては自由なる抄譯の法を取られたるが爲ならん。按ふに、譯書の晦澁といふことほど眞面目なる讀者を絶望せしむることはなし。逐語譯的精神の忠實も此の一失の前には何の信用をも價值をも存せざると、猶ほ實景に忠なりと稱する或活動フィルム、不出來なるが上に朦朧不明にして、徒らに看者の視力を勞せしむるが如し。中島君の此の譯は原書の要旨を明らかにすることに於て遺憾なきは勿論、少くとも英譯に現れたる明快直截なる文脈は、之れを傳へ得たるものと信ず。唯、意譯と抄譯との爲に文稍、簡疎となりたれば、ところ々論證の貫目を減じたるが如く感ぜらるゝ點なきにしもあらず。其の他は明快といふ長所を以て償うて餘りあるべし。

馬骨人言

〔明治三十五年『讀賣新聞』所載〕

東 西

標題は「馬ノ骨、人ノゴトク言フ」と、斯う手数をかけて訓んで貰ひたい。犬骨折つて鷹の餌といふ諺はあるが、これは何處の馬の骨だか、餘白の埋草になるのだ。

先づ何から申さうぞ!? 此の節は五十行とつゞくと讀者受けが悪いと聞いた故、標題からして初手は「三行有半」とでも命けようかと思つたが、それでは去狀とまがひさうで、縁起でも無いから止めて、長い短いは其の日々の出來心ときめた。

何事も流行向の事さ。名からして粘ばりとニイチェ〜、と言はぬと、此の節の文壇では幅が利かぬげな。自分はニイチェさま信仰でなければ、獨逸語も知らぬが、英吉利人の通辯と同國製の蓄音機で、ほんの一二度、知りあひのやうなものになつたから、ちいとばかり魚まじりの猿真似を申さう。

内實はたかゝ一二度握手したぐらゐ、又はほんの夜目、遠目、馬車のうちの見參であつたのを、

何の事はない、三年も往來して議論でもして来たかのやうに花を咲かす新歸朝の話上手もあれば、二番煎じ、三番煎じの妙振り出し（フリードリッヒともぢりたいな）に手前島の新生薑をへぎ入れて、それを新發明の妙劑と賣廣めるもあるべからずの當節柄の習ひで、お互ひさまのことだ。萬一履ちがへがございましたら、大目に見て下すつても下さらんでも、これもまたお互ひさまのことだ。

反動と桔槔戲

桔槔戲といふ子供遊びを御存じですか？ あつちが下れば、否でも應でもこつちが上る。上つたは器械の勢ひで、無意識の作用で、言はゞ、こつちに居た小僧の位置境遇が然らしめたのだ。上つたと言ふよりは、寧ろ上らざるを得なんだのだ。即ちこれが反動の兒だ。讀んで字の如く反動の小僧だと言ふはうが當然だ。諺に「流れに従ふは死魚のみ」と言つて阿世循俗の徒を罵つたのがあるが、罵世悖俗もほんの反動の結果であつた時分には、小兒、桔槔と多く擇ぶ所が無い。

時計の振子が極端から極端に反動して四六時間地團駄を踏んでゐると同じ理合で、全世界の文化は古往今來列國民が盲反動の兒となつて同じ過不及をのみ繰返すによつて今も尙ほ御覽の如き爲體なのだ。たま／＼盲反動の弊と不利とを看透した大頭が出ると思ふと、今度はまた幾何もなくて

沈滞、爛熟、時計が止まる、新規巻直し、即ち大々反動、潰裂、革命、又しばらくは大搖曳。盲反動に對する盲反動がつゞく。それが即ち自然のまゝの生々化々だ。古代はこの國も同じ格で、興亡隆替相代謝して窮りなく、いつまでも／＼只中央を取りかへたばかりで、同じく地團駄を踏む有様であつたのが、人智の進むにつれておひ／＼と目明反動が殖えて来たので、はじめて進化の實績が兎も角も目立つて来たのが十九世紀の文明なのだ。盲反動と目明反動との利害得失の差、暗夜に巨火を睹るが如くではないか？

反動と引く浪、寄する浪

寄せては返る岸邊の高浪、引く波のまに／＼一さへもせず手を束ねて押流されてゆくは死人か兒女の振舞と嘲り笑ふは一理あるが、又打返す反動の波に乗せられて戻る手合を活人だの、男優りだの、大人はづかしたのと褒めちぎるは一圓解せぬ沙汰ではないか？ 引かるゝも寄するも波の所爲だ。當人の胸に波を御し波を利する儼たる成算のない以上は、第二の反動を呼起す縁となるばかりで、當人に取つても同漂の人に取つても寸益が無い。反動は必至の又必須の勢ひではあるが、之れに人意を加へて利用するとせぬとが進歩と地團駄の分界、動物と人間の分界、廿世紀以前と廿世紀以後との分界、合理と不合理との分界、われ／＼と我々の祖先との分界だ。といふと些ばかり高慢

のやうだが、さうするが我々後生の本務だ。いつまで同じ過を繰返すことだ。大べらばうな！此れほどの理が分らぬ手合は盲か、近眼か、色盲で、一國を感動しようが、全世界を震撼しようが、豪傑であらうが、天才であらうが、時勢に對しては所詮明盲といふ爵位を辭する能はざる手合だ。

盲反動のいろく

目蓋をようあけて、人間の來しかたを御覽じろ。宇宙とか人間とかの真相を専門の、宗教家、哲學者、道德論者などいふ連中からが大概は桔槔戲の片仲間では無いか？ 大乘を非佛説と解した時分には、釋迦牟尼の目性からが大分あぶなかしい位附と成る次第だ。彼の仁義の煩癖を悪んで「自然に復れ」と叫んだ老莊一派はいふに及ばず、只一向に平等愛を説き、身を奨誘したナザレの耶穌、ソクラテスの智育主義に反動したストア派の意育、それに對するエピクロス派、楊と墨、孟と荀、洛閩と王學、ホップスの利己説、重智説に反動したシャフツペリの愛他説、感情説、クラークの直覺説、或ひは禁慾主義、克己主義に對する快樂主義、功利主義、或ひは十八世紀の虚偽的博愛主義、國家至尊主義、專制主義、貴族主義、差別主義、それに反動した佛國革命の個人主義、自由主義、平民主義、平等主義、その個人主義に反動した新國家主義、社會主義、其の空想的なる平等博愛の主義に反動する帝國主義、新國家至尊説、それに對して隱然反動し來らんとする新個人主義、新博

愛主義、全人間主義！

文藝上から見ても同じだ。近くば古學復興時代の大自由に反動した擬古文學の拘束主義、それに反動したロマンチズムの放縱、さてまたそれに反動した「寫實」、「科學」、「自然」の叫び聲、比較研鑽、史的討究の奨勵。恰もそれに反動しつゝある新象徴主義！ 或ひは主觀に對する客觀、或ひは形似に對する神韻。模寫に對する理想。よう御覽じ、名は變つても中身は大抵い、たちごつこだ。正に是れ思想海の寄せては返る雄波雌波だ。いつまでかうして果しなく、満ちつ干つすることだぞ！

ルッソーと其の崇拜者、バイロンと其の追隨者、ショーペンハウエルと其の信徒、ギクトル・ユゴーと其の同感者、いづれも皆反動の兒で、而も色盲か、近眼か、鳥眼だ。儒教に反動した福澤派の倫理説、えらく片荷すつてゐるのに氣がつかぬとは笑止千萬。これもまづ半身不隨の形だ。自由競争の弊におびえて生活上の格闘を禁止せんと欲する社會主義、大體は結構だが、用心せぬと極端の新個人主義を呼返す下ごしらへも同然だ。由來折衷説乃至調和主義は其の持前として、鼻柱が強くなく、概して活動が生ぬるく、随つて實際腰弱でもあり、若しくは腰弱に見えて兎角若手には氣受わるく、偶々其の宜しきを得た場合にも俗耳には入りにくいものだ。何かの拍子で世間に弘まることがあるが、さうなるころには本來の面目は夙に薄れて、いづれかの極端に偏傾つて其の實際

の作用は、ヤハリ他の極端説と一般で盲反動に外ならぬものとなる。蓋し主唱者即ち祖師は一時の善巧方便として唱へた箇條も、其の末流には不易絶對の正法として修せらるゝならひであるとすれば、祖師からが近眼もしくは色盲であつた場合の影響感化は多く説かずとも知れた分の御事だ。

目性のいろく

ペーコンは爛眼の反動者であつたが、惜しいかな遠目が利かなんだ。獨のカント、この人こそ眞個活眼の反動者と全歐羅巴の學界が力綱にした次第であつたが、倫理論を立てるころには殘念や色盲になつてしまつた。佛のコント、彼の仁、目明の反動者の一人として、初手は大分腰強でもあつたが、細君が出来てから色盲になつて、且つは鼻が高くなりすぎて視力を遮つて、笑止や、とうとう目がつぶれてしまつた。

冷然、晏然として沈思考索するを本領とする純粹哲學家者流ですら早晚反動の波に驅られて目がかすむ習ひならば、現在の利害、得喪を、人情として度外視する能はざる宗教家や徳育家が、境に感じ、事に激して、逆上眼を病むに何の不思議があらうぞ？ 折々は目前の急を救ひたさの熱誠から臨機應變の善巧方便を講ずることもあらう、所謂對症療法、其の場合だけに利く妙配劑、其の投藥の當時に在つては盲反動でなかつたものも、程經て、境變つて而も其の處方が其のまゝに襲用せらる

る時は、番に無効なばかりではなく、有害となつた例が夥しい。これは苟も活眼あつて世界の宗教史、倫理史、道德史を讀破した手合は夙の昔に合點のことだ。

半ばは理想界に住するといふを以て自ら任ずる脱俗連の來方がこれだ。ましてや彼の現世間の樂欲を是れ事とする手合をやだ。功名、利祿乃至肉慾の満足を畢世の目的とする現實界の種々餓鬼、王侯、武將、政治家、公民、俗學、俗藝、農、商、工、其の小なる者に在つては、トラホーム患者、障眼患者、風目、逆上目、斜眼、scot-blind, high-grad blind, stone-blind 目前の慾に眩んでは山さへ見えぬ獵師眼、いろはも讀めぬ文盲、女に目のないデレ目くら、子に曇るヒイキ目くら、一寸さきの見えぬ近眼、色盲、生得盲、中年めくら、どう目くらだ！ 其の大なる者に至つても、大がいは斜視、近眼、遠視、色盲！ 秀吉もナポレオンも、おのが乗つた大濤は、干潮だか、満潮だか、地すべりの餘波だか、火山噴火の餘響だか半無意識の偶人、所謂風雲兒だ、運命の子だ。要するに、太閤も豫想外の立身ならナポレオンも鰻上りだ。古往今來政治界の英雄の履歴は總じてこれさ。現の證據が明治の元勳、今の大大政治家連の閱歴を御覽じろ。十中九までは時勢の運轉機に廻されて、半無意識で、ツイソノとんでもない處へまかりでた連中だ。イヤそれから後も、只今もさ。

やれく、とんだ長枕であつたぞ。さてこれから御本尊の流行佛のニイチェ大師さまだ。大師は信徒に聞いても反動の兒だといふから、そこどは何だが、具眼か、没活眼か、反動を御した活

人か、反動に御された偶人か、疑問だ。二つには其の反動の功過如何が疑問だ。世に何の裨益もなく却つて流弊を醸すやうな有害危険の反動ならば、よし全世界の風潮に逆闘した壯烈無類の反動だからとて、言はゞ地震、海嘯などに比すべきものだ。有害無益の、ほんの暫時の破壊力で、たかゞ機械的壯烈たるに過ぎぬものだ。それを見て喝采の聲を揚げる手合は言語道斷の残忍、自分勝手、向う河岸の大火事を偶然が我れに供給する目放樂とばかり心得る輩だ。

ニイチエ 大師

ニイチエの信徒もいろいろだ。本山大陸の阿羅漢連をはじめに、英吉利、亞米利加乃至東西南北の植民地、すつと昇つてそんじよそこの聲聞、緣覺又の名はニイチエはいから、護謨はいからの孰れはあれど、皆一網にひきくるめて、南無ありがたい御法門の緣起大略、あらゝく代言したら、かうもあらうか？

歸命頂禮、こちのニイチエ大師は滔々たる全歐羅巴の時代精神に反撥し、憤激し、竟に奮然蹶起して大膽な新見を唱破せられた豪邁卓落の天才、不世出の大批評家であらつしやりますぞよ。阿世循俗、矯飾自ら欺く、淺ましい、腹立たない、影口ばかりの、腰の弱い、薄志者ばかりが多い濁世に、挺然として勇往し、堂々然、諤々然、秋霜の如く、烈日の如く、自家の所信を赤裸々に披

瀝して毫末も恐るゝ色なく、獨逸全國の輿論、科學界、哲學界、宗教界、國家全體の輿論をも正面の敵とすることを憚らざる獨立創見、果敢勇往の思索家、骨鯁の大批評家、惡文明の破壊者、惡時代精神の顛覆者たると同時に新文明の鼓吹者、善時代精神の謳歌者！ 詩人を兼ねる豫言者！ 師が激して説かれたる御法談のうちには、極端に流れた狂簡の語も間、あらう、就中其の倫理説の土臺となつたる極端の個人主義、「人道の目的は（古今の俗學が唱へ來つたが如く）人類全體の平等の利益を圖ることにあるのではなうて、一に天才養成即ち少數の大英傑を作りいだすにあり」といふ前人未曾言の斷案の如きは矯激至極の言たること勿論でござる。なれども凡そ深く時弊に憤慨する所あつて而して説を立つるの結果はおのづからかくの如くならざるを得ざるものでござるてや。要するに是れ應病與藥、對機説法の御方便ぢや。非常の場合は非常の手段を是認するならばし、所謂毒を以て毒を解するの謂ひでござる！

惡時代精神の一、科學と歴史

畢竟するに、大師をしてかゝる矯激の言を吐かしたは獨逸帝國を中心として全歐巴に瀰漫し、延いて亞米利加、亞細亞に及ぶ惡時代精神の流弊の所爲でござる。先づ第一が所謂科學的精神といふ奴の流弊でござる。とりわけて進化論を唯一の基礎とする科學精神！ 生欲と周圍と、境遇

と適應と、經驗と習慣と、遺傳と傳説と、實驗と統計とを神呪の如くに推しあがめるダーギニズムの科學根性！ ついては、それから分れ出た歴史討究の死學的精神！ 何事もなく比較研鑽、史的考究、ハレうるさやの、又しても歸納推理、又しても細瑣煩擗の死事實調べ！ 果知らぬ研究的態度、其の日送りの假定説の行列！ いつまでも無斷案、長久に無決着！ 只事實！ ひたもの實驗！ さて其の文章はといへば、他國は暫く措く、本場獨逸、受賣獨逸、綿入獨逸の筆法は、定例のやうに平叙、直寫、比喩缺乏の、無味平板の、生硬蕪雜の、簡疎ならざれば緩漫煩瑣の、そのうちの上の部が乾枯平淡、陳腐爛熟、大概是護謨を嚙むが如き、雨水を飲むがやうな惡文字！ 之れを要するに、語法は解つても修辭法は解らず、理窟は具はつても、趣味一切は空々然、科學と歴史の鑄型は知れども文學の眞趣味、藝術の活作用は皆目わからぬ沒風流の俗學根性、偽學的精神の跋扈跳梁！

其の二、平等主義、禁慾主義、常識主義

第二の惡時代精神は、ナザレ男の置土産、人に上下なく、階級なく、父なく、君なく、彼れ我れ無く、一切無差別、偏平等の、初手からして無理づくめの博愛主義！ 天帝の前には高下なく恩怨なしと前提して、恩人をも怨敵をも最愛の妻子をも人食ひ鬼の野蠻をも皆平等に待遇し、謙虛遜讓、

克己獻身、怒を忍び、慾を禁じ、相恕し、相憐み、相助け、相親和せよの弘教の下から、兵力主義、帝國主義の大殺伐、大擽貪、大殘忍に偽善を誨ふる惡平等主義の倫理説！ 此の根本の似而非倫理から割りだした四民平等、賢愚平等、薰猪ごつちや、玉石同價、猫も釋子も皆一つの平民主義！ それにつながる國民的教育、普通的教育の平凡主義！ 個人性を拘束し天才を絞殺す同型主義の惡教案！ それがまた前に言つた俗學、偽學の精神とよれつもつれつ持ちつ持たれつして常識一點張の沒趣味教育、形式教育、てもさても七うるさい五段教授の捏造教育、とゞの結局が凡劣の養成！ 蛙の子は蛙になる、ぞろ／＼わきだすお玉杓子、小俗學や小偽學。嗚呼慘憺たるかな天下に瀾漫する大俗養成の濁風潮！

其の三、國家主義と服從主義

さて第三の惡精神はこれも同じく平等主義の支流で、個人を蔑如する團體主義！ 所謂國家主義、社會主義は即ちそれだ。何事につけても「國家」といふ目に見えぬ偶像佛を第一の目安と立て若しくは「最大多数」といふ捉へどころのない大怪物を最高標準と定めての功利主義！ あはれ無慚やな個々人は、たか／＼有機體の細胞たつた一個が價值程に見積られて、殺されうと生されうと政府又は主權者などいふ覺束ない自分免許の神經中樞での決議次第！ 運惡く國家の安危、社會の利害に

關係する病細胞と、認定せられたが最後のすけ、六尺ゆたかの男一疋の命取ること座一つ押潰すほどにも思はぬげの其方組の曲學、僞學めが大獨斷の高慢口！

曰はく、個人の自由、安寧乃至悦樂は悉皆國家の庇蔭、社會の恩賜だ。國家の爲には獻身し、國家の前には三拜九拜して一も二もなく服従するが國民の當然の本務だ。随つてまた先づ第一に大切なものは社會全體の平和と發達だ。とりわけて國家の安寧と進歩だ。かるがゆゑに國家は至重至尊だ！ 服従々々！ 平和々々！

僞學、俗學が説く所に一面の理はないでもないが、其の謂ふ所の國家の爲、團體の爲は眞實に國家の爲、團體の爲であるか、どうか大疑問だ。もしや偶像佛をダシに使ふ賣僧めが奸策の口實ではないかな？ よしんば眞に國家の爲にもせよ、世界は一社會、一國家の世界ではないのだ、東西南北往來自在の廿世紀の天下だ。人間到る處に青山もあり、白水もある。民の壓制を惡むは虎豹を怖るゝよりも甚しいならひだ。所謂人類の社會が、一國、一大陸に限られぬ限りは、今の所謂國家至尊主義は甚だ以て覺束ない片輪車の倫理主義だ！

蓋し國家的利己主義が是認せらるべき倫理主義ならば、小中學の幼年に對しては一家至尊主義も唱へ得らるべく、家門的利己主義も（封建時代同様に）是認せらるべく、更に大世界を眼中に置いて詮じつめれば、個人的利己主義も或程度までは是認せらるべき理窟が立つのだ。國家的利己主義

は政策乃至法理論の原則としては兎も角も、倫理説としては到底成立すべき理由が無い、然るを、只管一國家、一社會を口實に（若し其の實は或少數が枕を高く鼾睡せんための奸策であつたならば如何だ！）個人の自由意志を抑壓して、或ひは威し、或ひは賺し、或ひは獅子虎を飼馴らすやうに、幼少から躰け馴らして、服従の強制、平和の押賣！ 天然に持つて生れた自立性、反抗性の禁制、競争心、健闘制の抑壓！ 勇猛心の撲殺、自尊心の根絶！ 何と大々悖理では無いか。こちらのニイチヤニズムは隠然として此の惡精神の反動に外ならぬのである。

ニイチエ宗の大綱

然り、ニイチエ師の説かせられた所は、悉く皆以上の惡精神の反動だ。師が前後三段の生涯、即ち藝術論時代、哲理論時代、倫理論時代の諸法談は、其の間に多少の異同、多少の矛盾衝突、多少の變遷あるにも拘らず、要するに科學排斥、歴史排斥、慈悲獻身主義、禁慾主義、一視同仁主義の排斥、國家主義、服従主義、社會的功利主義、平民主義、平等主義の攻撃、沒趣味攻撃、常識的、常套的、形式的教育主義の攻撃で始終したものと評してよろしい。これが即ちニイチヤニズムの破壊的方面即破邪門。さてまた師の建設的方面即ち顯正門を窺ひ奉らん、これも前後、期を異にして勿論多少の異同があつて、中には前と後と相殺すやうな御法談も無いではないが、それは例の

應病與藥の、多分根機に適はしめう爲の御方便である、奇怪に思ふは到らぬ凡夫が淺慮な判断ぢや。佛經に謂ふ眞假、大小、權實、顯密の摩訶不可思議と了解せられい。

師が顯正的福音の概要は、第一には、科學、史學の排斥と相表裏する文學、藝術の鼓吹。第二には、常識及び形式教育の排斥と相表裏する天才の尊崇、自然教育の鼓吹。第三には、循俗主義、因襲學風の排斥と相表裏する獨立主義、獨斷主義の鼓吹。第四には、國家主義、服從主義、平和主義、親睦主義の排斥と相表裏する絶對の個人主義、悖反主義、戰爭主義、健闘主義の鼓吹。第五には、平等主義、平民主義、一視同仁主義、禁慾主義の排斥と相表裏する差別主義、貴族主義、遂慾主義、自恃主義の鼓吹。最後に舊道徳を根本より顛覆する純然たる利己一邊主義、唯我満足主義の獅子吼！尙ほ最晩年の御法談を本として、師が倫理觀の髓腦をあら／＼談り申さう。近う寄つて謹聽せられい。

如是我聞

まづ仰せられる、(お言葉通りでは通じにくいこともあるによつて、時々前後にし、時々伸縮して傳へますぞ) 從來世間に行はれて居る慈悲獻身、克己禁慾、知足遜讓の教訓ほど不健全な、不自然な、有害な教へはござらない。考へても見やれ、凡そ他人の事を先にし自己の事を後にし、

主として他の爲をのみ圖らう／＼と力むる結果は、強ひて我が意を抑へ、我が慾を斷ち、殆どあらゆる生活上の欲望を拒絶し、主義としてはショーペンハウエルの如く、實際としてはモンクや佛教徒の如く、生活を無視し、自我を遺却し、とゞのつまりは人間を擧げて虚無寂滅、無爲恬淡、枯木死灰とならしめざればやまぬ次第となる筈のものだ。斯の如きは生活を否拒すると一般で、活きたる人の履み行ふべき道としては不合理、不自然を極めたものだ。生活せんと欲する意志、其の本然の意志其の物を抑制して薄弱ならしめ、向上奮勵するの心なからしむるものぢやゆるに、取りも直さず活動物としての人の品質を墮落せしめ、とゞのつまりは人生を破滅せしむるに終らざるべからざる病的倫理だ。世の蒙昧どもは數千年來の因襲に誤られて「無私」、「無我」、「禁慾」乃至「慈悲」、「相憐」などいふことを萬古不易の争ふべからざる善徳のやうに心得て居れど、これが抑、の大まちがひだ。其の直反對の「遂慾」、「爲己」、「唯我」、「獨立」、「自恃」などいふことが眞の達人の道徳だ。

太古即ち社會發達のはじめに在つては、何事も強者、優者の命するまゝであつた。事物の名目なども強者、優者即ち少數者の身に具つたものを善といつた。「善」の語源は「高」、「強」、「優」の義だ、「無私」とか「無我」とか「博愛」とかいふ意味は毛頭もまじつて居ない。今日「善」といへば、すぐに「無私」とか「無我」とかいふことを連想するは、長い／＼間因襲した謬見即ち腦的疾

病の然らしむる所だ。

要するに古代の道徳は強者、優者、即ち俊傑、天才、くはしくいへば君長たる者に都合のよいもの、みであつたに、故あつて中頃から弱者、劣者、凡人、俗物、換言すれば奴隷連に便宜な道徳が行はれはじめ、それが竟に勝を制して倫理道徳の全稱を篡奪することゝなつたのだ。自然のまゝの道徳は専ら豪傑連の便利を本として成立つてゐたものだ。即ち、平民的の反對の貴族的だ。「博愛」だとか、「無私」だとかいふ倫理は弱蟲連が自分らの便宜の爲に中ごろから唱へだした人爲道徳で、奴隷道徳と名づくべきものだ。

如何にしてかやうな不自然な道徳が行はれはじめに至つたか？ それには他の理由もあるが、主なる原因は猶太國民の羅馬に對する復讐政策に基いたことだとは大概のものには氣がつくまい！到底腕づくでは叶はぬによつて次第々々に意志を萎靡せしむる惡倫理を浸潤せしめて羅馬全國を亡さん猶太人が苦肉の策略！ 羅馬傳來の國粹たる勇武絶倫の魂、自尊剛愎、勇敢堅忍な豪傑氣象を次第々々に衰へさせうために、女々しい、文弱な、意氣地のない、慈悲博愛の病的の倫理思想を鼓吹し、宣傳したとは、何といふ遠大な、巧妙な、陰險な復讐策ぞ！

基督教主義の人爲道徳が行はれるやうになつてからは、自然の道徳即ち豪傑道徳は地に墮ちてしまつた。それからは奴隷道徳のみが次第にはびこる世の中となつて、其の毒のめぐりかたが年毎、

代毎にはげしくなりゆく。今が其の頂點だ。このまゝでつゞけば人間はいよいよ墮落するばかりだ。

然らば如何やうなのが眞の倫理、道徳であるかと問ふであらう。されば、他でもない、自由を欲し、權力を欲する人の本來の性インスチンクトを出來得るかぎり發展せしめて、其の欲し求むる限りを飽くまで満足せしむるが、それが即ち人と生れいでたものゝ争ふべからざる本願だ。此の外に人の踐むべき道などいふものがあらう筈はない。それをば悖倫の所行だの、不道徳の心得だのと名をつけて、高飛車に叩きつけようとするは、古今東西の因襲的、根本的の大謬妄であるのだ！

今の所謂道徳は初手から人の本性インスチンクトを抑壓し、一切の人格的要素パーソナルエレメントを排斥し、之れに代ふるに空理トラクシオンを以てし、其の抽象の模型の中へ活きた人間を無理やりに嵌め込まうとするたぐひのものだ。就中彼の禁慾主義アッセンシズムといふ奴は矛盾を極めた教へで、言はゞ「生きてゐながら生きてゐるな」と命ずるやうなものだ。

禁慾主義は其の實、利己主義から出た教へだ、蓋し古往今來生活の争闘が激烈となると、自然の勢ひで弱者、多數者は生活慾の満足を遂げること難んずるに至る、さりとして人間の本性であつて見れば、其の慾を根から絶つことも叶はぬ、そこでどうにかして生活してゐたい、而も競争の苦だけはまぬかれないといふので（さりとして強者を壓倒して自在に本性の慾を遂げようといふ程の勇氣も

實力もないところから) 遂に他と闘ふことをやめて自分の本性と闘ふことがはじまる。それが克己主義、禁慾主義の由來だ。「退隱」や「謙虛」や「清貧」や「不犯」や、本體を洗つて見れば、いづれも浮世の軋轢や一身の繁累を避ける策だ。哲學者や宗教家が無爵、清貧、不犯等に安住するは、其の實はせめても心の安靜だけなりと自由に享樂したものだといふ利己的本性から搾り出した窮策だ。即ち人間の本性の所爲だ。争はれぬものさの。

併しながら、かくして安住せうと試むるはみづから欺くの甚しいものだ。生活の諸慾を斷滅せうと力めながら尙ほ且つ肉體的生活をツツけようと試みるは甚しい矛盾だ。直に死んだほうが眞の安靜ではないか？ 死なれぬといふは、肉體的生活が人の本願たる證據で、之れを拒否することの不合理、不健全たることは明々瞭々だ。

人の踏むべき道は「本性の發展」の外にはない。個々人をして出來得る限り我意を貫徹することに力めしむるが、それが人間を高大ならしむる所以の唯一の手續だ。此の本意から見れば「慈悲」、「愛憐」、「忠恕」、「同感」などを勧誘する方今の教へは人の我意を弱め猛進をたゆたはしむる媒となるばかり故、尤も理に悖つた不健全至極な邪教だ。随つて人に憐恤せられて甘んずる奴は言ふまでもなく奴隸根性、慈悲を施す奴も、本來が奴隸倫理に依據した振舞だから、其の心根が卑しい。要するに、惻隱とか、恕とかいふことは根本的惡徳だ。

「自立自尊」は道德上の最初の、また最後の命令だ。人間の理想は絶對の自由、絶對の獨立だ。されば理想的達人といふは、大我慢、大氣力の、我慾一方の、聊かも人に頼らぬ、古人にも今人にも依頼せぬ、尤も愛する人にすら依頼せぬ、如何なる國にも、如何なる人の助をも求めぬ、絶對獨立の、大權力の、善く闘ひ、善く破り、傲然として生活し、萬一、しかして生活する能はずんば傲然として自殺せんと欲する大勇士でなければならぬ。随つて「勇」は尤も必要なる美德で「卑怯臆病」は尤も忌むべき惡徳だ。「健闘」は人の天性の尤も好む所で、「戦争」は國家の防腐劑だ。

天真のまゝで生ひたすれば、人はおのづから此の理想に叶ふ傾きを具へてゐるのだ、然るを似而非道義の奴隸倫理が世を迷はして人の意志を弱めうくと試みた結果、今日の如き弊を生じた。病的な、文弱な訓誨が本で、人間は其の本性に率ふことを耻づるやうになつた。今の道德は虎や獅子を檻に投じて飼ひならして其の本性を失はしめ、獅子たり虎たる品性の皆無となり、猫か犬のやうになつたのを見て、あゝ高尚になつたと褒めるやうなものだ。其の實は大墮落なのだ！ やれ笑止やの！ 無慚やの！

てなこと仰せられたげな。これがニイチエさまの御法談のあらましでござる。

ニイチエ 大師の目性

大師が一生三期の説教、それを悉く取揃へて刊行すれば、毎冊の紙數幾百ページの、卷數は十有餘にも及ぶ程だが、正味はといへば、畢竟するに如是見、如是論、剩す所は譏刺辯難、得意の警句、得意の比喩、韻語詩と散文詩、大かたは詞花言葉、偶、別旨の説と見ゆるも著者みづからの見解が前後全く變つたので、後の方を正しと見れば前の方は消滅して一に歸する。例へば初期の藝術論、藝の爲の生活 "life for art" などは、どちらかと言へば若氣の浮氣沙汰で、晩年には殆ど忘れられた爲體ていたらく。(それを大眼目にそんじよそこらでは隨喜渴仰、世はさまぐさ!) 其の他は重複か、敷衍か、修正、要するに大師の説の髓腦はほゞ先づ前に述べたに外ならぬものとする時は、是非の批判は別としても、何と、時も時、紀元後十九世紀末葉の、處も處、獨逸思想界の產物としては、何と先づ、圖なく單純な、手輕な、おツそろしく生うまな見ではないか! 其の最晩年の、尤も深く熟慮したらしい倫理觀からが只の反動で、何の文あやもなく變哲もないがんだう返しの反動たるに過ぎぬ。一切の間位を閉却した、極端から極端への反動だ。一切の先例を參酌せず、一切の經驗を利用せぬ、寡聞孤陋の獨斷の反動だ。自己が今反動せんとする其の對手かたの諸活動は抑、如何にして起つたのやら、何の必要があつて生じたものやら、一切無覺悟らしい反動だ。

總じて眞の「歴史的知識」は殆ど皆無だ。現在目前の事情さへも、自己が親しく閱歷して相觸れた方面の弊害の外は(それすら只弊害ばかり!) とんと知らぬげの反動だ。佛國革命や、超絶トランセンデント哲學や、ロマンチズムの弊害すらも殆ど心得ぬげの反動だ。偶、過去の事蹟に就いて批判、解釋を試みるかと思へば、前に挙げた基督教の緣起論の手際だ。(禁慾主義アウゼチズムに關する分だけは流石に一寸面白い所がある、これは後に評しよう。) 獻身主義の倫理は羅馬を亡す苦肉の策だなどは、種彦、種員一輩の草双紙か、五瓶、南北らが正本にでもありさうな持つてまはつた空想的解釋、くすぐつたくてならぬ。耶穌イエスの實の父は、誰れか知らんジュリヤス・シイザーであつたげなと附會こじつけなんだろうが、流石に日本流の戲作氣に乏しい所だ。

總じて見聞涉獵の範圍の、狹隘で、淺薄であつた證據は其の著書に歷々としてゐる。ショーペンハウエルだけは、御本尊のこと、て、反覆玩味、再絶も三絶もしたであらうが、屢、援引するルッソー、ゲーテ、とりわけ後者は如何であつたやら。さつぱり彼の大才に誨へられたらしい跡の見えぬから推せば、どう讀んだのやら疑はしい。ましてやダーキンの、スペンサーのは、其の著書中に散見する批判の口吻から察すると、そんじよさる所で行はれる首尾讀みとかいふ奴やつの亞流ではなかつたかな? 論難が輕佻淺膚で、概して猫のちよつかいに類する者だ。況んや近時の諸家の著述、最近の諸研究、直反對の諸種の議論などは、全然徹頭眞暗まごつかりてんてといふ姿だ。要するに此の大師さま、おのが手前を見るほどの目はあれど、後ろを見返る眼はなく、客觀的事變の諸もつの歴史、政治史、宗教史、實業史、社會進化史などが目に見えぬと同時に、主觀的思潮の變遷、哲學史、倫理史、

文藝史なども皆目見えぬ。明かに盲反動の兒だ。

さやう、明かに盲反動だ。併しニイチエが唱へたことに幾多時弊に適中した、参酌もしくは同感すべき觀察即ち眞理素の混じてゐることは無論だ。が、それを知るには決してニイチエ坊を俟たぬとだ。前段ニイチエ宗徒に代つて陳述した現在思想界の諸弊位は、かくいふ馬骨ですらも夙に心附いてゐたことだ。況んや識者、聰明者に於てをやだ。今日獨逸の新教育主義の如きは、畢竟するに、それを救はんための折衷案、調和策たるに外ならぬ。

考へても御覽じろ、綜合にはぐれた分析、直覺と絶縁した推理、換言すれば文學藝術と悉く分離した科學、哲學、又は差別を無視した平等、現實を参酌せぬ理想、例へば、絶對の社會主義、國家主義、乃至偏傾つた常識獎勵、凡俗教育、若しくは煩瑣過ぎた觀察、實驗、推算、統計、調査、討究、参照、比較、其の日暮しの無斷案、目無千鳥の、めくら探りの、無定見主義の倫理説、人生觀これらの片輪車たることは十分と手を又めば解かることだ。いつまでもこの車で此の娑婆を押し廻さうとは、活きた目一つ持つ程の者の假にも思はぬところなれど、そこがそれ、所謂佛蘭西大革命の餘波で、反動の勢ひで、乗りかゝつた舟ではない車だ、今更急に廢められぬわけは、廢めればまた無慚な本の奎阿彌、放縱と空想と臆測と獨斷と無秩序と破壊の大々紛擾、大混沌！ 又候ふや同じ過ちを反覆して、知りつゝも無經驗の少者を惑亂し、無知の昧俗を傷害する、其の愚、其の不

利、其の殘忍を忍ぶあたはざるが爲ばかりだ。

かういつたとて今の血氣盛んな、直覺流の、氣の短い天才たちの連中、作は讀んでも傳は讀まず、傳は讀んでも時勢は讀まず、大概の事は孫引、曾孫引、玄孫引で安心して用を充す、懷疑心の深いやうな、輕信なやうな、自尊なやうな、卑屈なやうな人たちには風馬牛で、逆も聽いてはくれまいが、尙ほ念晴しに喩へていへば、ニイチエが隱然反對した諸種の思潮は、佛蘭西革命以後の大泥濘へ大あわてゝぶちまけた砂利、貝がら、ごろた石、石炭骸だ。今こそは通路の邪魔で、(自轉車の高襟が困るばかりでない) 老人も困れば牛馬も馬車も荷車も大迷惑だ。さればとて之れを今取除れば、又の霜どけ、雪どけが思ひやられる。だから協力一致で踏みつけるより外にせうとが無いと知らぬ片田舎の山伏が道路の修繕案、それに賛成の自轉車連中。貴君がたのおつしやる事も一應は道理だが、もすこし泥濘を歩いて見てからいはいはつしやりませだ。

とはいふものゝ、もう砂利道もよい加減に踏みかためて、出来るものなら、砥のやうにも、蒲鋒のやうにもすべきだに、誰れだ、やつと堅まつた上へ又砂利をぶちあける奴は！ 大べらぼうな！ 而も貝殻を一つ／＼手で摘んで埋める奴があるか！ かういふ唐變木があるから、氣の觸れた山伏の説教さへも尤もらしう聞えるのだ。

之れを要するに、今の思潮の大概は前のニイチエアニズムといふべき諸種の偏思潮の反動なのだ。

ルツソ一の個人主義兼自然主義、それに胚胎したロマンチズムの空想、それと相並んで流れた
 超絶トランセンデンタリズム哲學の獨斷主義、若しくは十八世紀の貴族主義、差別主義に反撥して起つた個人主義、放肆
 至極のバイロン主義、我慾一方のナポレオン主義、要するに十九世紀の起頭はじめに於けるあらゆるイズ
 ムスの反動なのだ。よしや件の反動が既に他の極に流れつゝあるを事實とするも、それは偶、以て原
 動の弊の甚しかつたことを證するのみで、今更また原動に立返ることを促すの理由とはならぬ。今
 日の覺悟は如何にして中正を得べきか、即ち如何にして新反動の勢力を利用すべきか、又も地團駝
 を蹈むの愚をなさずして進歩の道を講ぜんとせば如何なる策はかりごとを取るべきかを工夫するにある。
 (今の所謂社會的、教育主義などは此の種の經營の片影だ。) 而して此の覺悟ある者の眼中には原反兩
 動の利害が兩つながら歴然として掌紋を指すが如くでなくてはならぬ。然るにニイチエは原動の結
 果と弊とを知つて、其の由來と利とを知らず、反動の必要と效用とを知つて、其の影響と弊とを知
 らぬ。高く買つて色盲いろめくら、市價は斜視やぶにらみ、つぶし値は、氣の毒ながら障眼だ!

ニイチエは反動の健兒にもあらず

右のやうに言つたなら、黙れ! (と信徒連は熱くなつて喝破するであらうわい) 斜視やぶにらみでも障眼まごひで
 もかまふものかえ。盲にしてからがサムソンだ、怪力無双だ。尠くとも小百年かゝつて築きあげた

十九世紀の文明を土臺石から顛覆さんりかへ(さうと)した腕力を見ろ! 其の百分一の眞似ごとでも出來
 るか!?

これは御挨拶だ! 併し其の「怪力無双」からが實は頗る心元ない。操芝居あやつりの荒事ではないが、
 立役、敵役、女がたまでを載せた大家體を見事さしあげたと驚くは小兒の眼だ。其の實さしあげて
 る本尊からがせりあげられてゐるのだ。時勢といふ本舞臺一ぱいの大道具の裝置しかけの所爲せいだ。勇士
 のやうに見えるニイチエは其の實偶人でくのぼうだ、明白にいへば、反動の健兒でも逆流の潑刺せきでもなくて、
 むしろ循俗の蕩兒、循流の死魚、と斯ういつたら信徒連は目を丸くするだらうが、其の仔細はかや
 うだ。

蓋しニイチエをしてニイチエたらしむる所以の根幹は、其の極端の個人主義即ち絶對の利己主義即
 ち絶對の差別主義で、其の他は枝葉花實たるに過ぎぬ。故に若し此の根幹に逆俗さかよの實證が無く、否、
 却つて循俗の證があらば、彼れは反動の健兒どころか、寧ろ當代の寵兒、流行兒はやりごだと言つても先づ
 は異論のあるまじき筈だ。枝葉論は後として、兎も角も此の根幹の取調に着手いたさう。

蜥蜴と山椒魚

同じく「個人主義」と名な宣のたまるうちにも(同じく人となのつても、君子と小人では大相違がある如

く) 二大別がある。差別主義の個人主義と平等主義の個人主義、此の二つは、譬へば蜥蜴と山椒魚だ。見たところは似てゐれど、其の實は大ちがひ、蜥蜴は全くの毒だ、山椒魚は場合次第、當對次第で藥にもなる。

差別主義の個人主義の又の名は極端の個人主義即ち純然たる利己一邊主義だ。他人はどうならうと自分さへよければ一切かまはぬ、自分の身の爲に、他を排斥^{おしの}け、陥擠^{つまた}し、打殺すなども場合次第で敢てするをいとはぬといふ主義で、眼中全く他人が無い。此の主義を一家門に應用すれば家門的利己主義となり、一國家に應用すれば國家的利己主義となる。所謂國家至尊説は即ちそれだ。

平等主義の個人主義の謂ふ所の「個人」は自分一身のみではない。平等主義は始終眼中に他人を置く。故に一面から見れば眞の博愛主義とも解せられる。彼の個人を細胞と見る國家至尊主義などよりは遙かに個々人を愛重するの念は深い。我れにも彼れにも一様に善かれかし、同等に利あれかしと望むが平等主義の個人主義で、國家や社會を中心とする説に對して個人中心主義ともいふ。通例主張せらるゝ個人主義は古今とも此の平等主義の方だ。

差別主義は俗語でいへば自分勝手一方主義、平等主義はお互ひ主義で兼愛主義だ。前者は無道德主義だけに簡明直截を極めてゐて、何時^{いつ}、如何なる場合にも去就に迷ふことはないが、後者は自他の利害が衝突した時分に何とするか？ 何等か別の標準を求めねばならぬことになる。それが平等主義

の闕典の第一だ。

倫理學上で謂ふ利己的快樂主義は、言ふまでもなく個人主義であるが、楊朱のやうな極端なもの、外は決して純然たる差別主義ではない。むしろ平等主義で、兼愛交利、相助相養の必要を説くこと他の倫理説と異なることはない。近い例^{たぬし}が天則博士の説の如きがそれだ。純乎たる差別主義に立脚したニイチエの個人満足主義とは根本に於て逕庭がある。

改めて言ふが、差別主義とは純利己主義の謂^{いひ}、平等主義とは交利主義の謂^{いひ}だ。此の區別は記^{おぼ}えておいて讀んで貰はう。

自然主義につながる個人主義

以上辯じたやうな次第で、差別主義即ち純利己主義の個人主義こそは古くは楊朱、近くはニイチエを俟つてはじめて唱へいだされたことだが、平等主義即ち交利相養主義の個人主義は、言はゞ世界開けはじめてよりの倫理觀の一側面で、歐羅巴ではソクラテスよりもずっと以前、亞細亞でも釋迦出世以前からの傳來、随つていつの世、いつこの國の特産物とも定めがたいものだが、特に一種の制限を加へて「自然主義^{オチユラリズム}又の名復初主義に伴ふ個人主義」といふものを捻出し來れば、こゝに一種の別派が成り立つ。復初主義の個人主義、「Return to Nature」といふことを合言葉、枕詞にして

原始未開の状態や性情を其の倫理上の理想とする個人主義。

併し此の個人主義にもおのづから二大別がある。一は積極、他は消極だ。消極の復初主義は獨善自養、無爲恬淡の退隱主義で、老莊一派杯が其の代表、積極の方は、破壊的で、改革的で、排文明的で、進取的で、其の代表が佛のルッソー。而してこれこそ明かに歐洲近代の特産物で、政治上、社會上に於ては佛國其の他の大小革命を誘發し、文藝上に於てはロマンチズムの大跳躍を鼓吹した十九世紀初期の時代精神だ。

「復初主義」即ち自然主義につながる「個人主義」は、其のはじめは、絶えず「平等主義」と同じ息で叫破されて、此の三兄弟は長久に手を携へて行くべきもの、やうに領會されてゐたが、佛の大革命後の大動亂、ギロチンやら、暗殺やら、暗闘、泥闘の果が平等主義の假面の脱落、八面一度に脱裝いて「我れこそは差別主義の個人主義」と儼乎畫樣！ 大百四天で大だんびらをかついだがナポレオン第一世といふ大賊！ 塊、普、伊、西の本舞臺を縦横無盡に蹂躪し、向うモスクワを目掛けて六方を振込まうとする幕切となつては、三階惣出、見物總立、食ふ、飲む、わめく、どなる、つかみあふ。で、自然主義は生殘つたが、平等主義は夙に寂滅！ 純然たる優勝劣敗、弱肉強食、殘忍、無慚の、自由競争の、ニイチエが理想の縦横健闘の時代となつた。天道も神慮もあつたものでない。天上天下「個人の意志力」ほど壯烈しいものはないと言ふ感を引きしめたは此の際のことだ。

利己的個人主義の没落

しかるにさばかりの暴威に驕つたナポレオン第一世も一たび露に敗れ、二たびウオターローに敗れて、絶海の孤島に客死するや、全歐の狂夢漸く驚き、利己主義の睡魔は尙ほ去らねどもさすがに個々人の小弱なるを知り「個人の意志力」の有限にして孱弱くして、はかなく脆く頼みがたく、到底天下の大勢、自然の運命、若しくは大多數の反抗に敵すべからざるものなるを悟り、一たびは（利己心の爲の故に）落膽し、沮喪し、感概し、哀傷し、絶望し、狂憤した。此の利己的個人主義の全勝と失敗とを歌つたのが英のバイロンの作だ。彼れは利己的個人主義の絶望と狂憤とを代表してゐる。

バイロンとショーペンハウエル

バイロンとたしか同年に生れたのが獨の大空想家ショーペンハウエルだ。この大高慢の我儘者がまた利己的個人主義の没落に感概して、其の「絶望の由緒」を理窟に仕立て、一種の厭世哲學を組織した。バイロンもショーペンハウエルも明かに時勢が生んだ驕兒だ。

バイロンは多血質なだけに、狂憤で、暗雲で、破壊的で、無理想であつた。ショーペンハウエルは神経質で、而もお國風の粘ばり質なだけに、沈潜反覆、冷覽博涉、絶望しながらも建設的で、組織的で、兎も角も安住の策を講じて組立てたのが、ニイチエ坊が最初暗雲に信仰し、後に激しく反對した「禁慾」、「無我」、「愛他」、「獻身」、「意志絶滅」主義の、譬へば新小乗的佛教とも言ふべきものだ。こゝに至つては利己的個人主義又の名差別的個人主義も「消極」の極に沈んで、ニイチエ坊に「*life against life*」と嘲られ「畢竟生活の苦をまぬかれんために絞りだした消極の窮策」と罵られても、辯ずる語の無いものとなつた。禁慾主義の一面はニイチエ坊が罵つた如く、慥に利己的だ。蛇の道は蛇だ、よく穿つた。併し禁慾主義の一切が必ずしも利己的ではない、そこには坊が推量は及ばぬ。ソクラテスの料見は豹や熊鷹にはわからぬ道理だ。

利己的個人主義の亡魂

ショーペンハウエルに至つて利己的個人主義は寂滅に歸したかといふに、決してさうではない。利己的個人主義の形骸は死んでも其の精神はいつかな死なぬ。魂となり、魄となり、生靈となり死靈となつて祟を做し、影の如く幻の如く、十九世紀の後半より廿世紀の今日まで、時代精神につきまとひ、のりうつり、影身にそつて暫時も離れぬ。政治家、實業家、俗衆といふに及ばず、學者、

詩人、藝術家、一人として此の精靈にとりつかれてゐぬものはなかつたし、今も無い。怨靈の祟と知らぬ庸醫師らは、一種の傳染病と心得て、(古來用ひなれたのを轉用して)いろ／＼の假名を命じた。

Egoism. Egotism. Ego-centrism. Self-idealism. Self-deification Self-worship. Egoism incarnate. Ego-theism. "Delirious Individualism." "Cult of Self." Megalomania. Ego-mania. "Wholly himself." Self-engrossed. Self-absorbed. Self-gathered. Self-involved. Idio-pathetic, &c. &c. &c.

革命擾亂の弊におびえて個人主義に反對した今の所謂國家至尊主義を見よ。外國は如何にもなれ、只我が國をといふ其の甚しい差別主義(國家的利己主義)に利己的個人主義の祟を現してゐる。前にも言つた如く、此の主義を詮じつめれば個人的利己主義に戻らねば止まぬものだ。そこに心附かんで國家至尊説を主張するは危険至極だ。或ひはまた自由競争の弊に怖れて個人主義に反動した社會主義を見よ。其の平等の利福を個々人々をして皆一様に享受せしむるを理想とする點は取りも直さず平等主義の個人主義で、それが叶はねばもう狂憤だと直に兇暴の振舞をする共產黨、過激な社會黨はいふに及ばず、さなくても我れ知らず、とかく個人中心主義に豹變せんとする傾きある或社會主義論者に至つては、明かに利己的個人主義の怨靈に憑られてゐる手合だと言はざるを得ぬ。虚無黨、無政府黨に至つてはその生靈だ、イヤ眞のものだ。

利己的個人主義の隠然たる跳梁

然り、利己主義、差別主義は決して沈滅したのでは無い。或ひは覆面、黒じたて、或ひは假面、假裝束で、生靈、死靈、憑物の姿で、あらゆる方面に跳ねまはり荒れまはつてゐると評すべきが、方今の世界の有様だ。帝國主義といふも國家的利己主義の假面、獨立自尊と名宣るも個人的利己主義が世を忍ぶ假の名だ。曰はく「我とは社會我ならざるべからず」、曰はく「功利主義は公衆的乃至合理的ならざるべからず」、曰はく「國家は有機體、個々人は細胞、國家の安康を是れ圖れ」、曰はく「社會的教育主義を取れ」、曰はく何、曰はく何。嗚呼そも何の爲にかやうなことを今更あわたくしく宣傳するのだ。他でもない、利己的個人主義又の名爲己一邊主義といふ禍獸があらびまはるを鎮めるための呪文だ！

はて、眉を擧めて、何の訝るに及ぶことか！ 宗教の基礎がゆらいで、倫理觀はおもひ／＼、人の意習にも行習にも何等不拔の標準も目安も無いからは、はじめのうちこそは遺傳の作用で、ぶつぶつ沸かつた良心も、火が消えたり水をさゝられたりするのでいつまでも騰ちかねて、生煮で、かたまりかねて、果は半熟のまゝで慣れっこになつて、いつの間にかやら利己的に剛ばつて、すべて浮世は一分五厘の「一押、二金、三男だ」などと、恬然として公言する程、面の皮が發達して、た

つた一年か二年の修行でマキヤヱリズムの得業生となるは自然の順序だ。それもさうかえ、實の親さへが目前の繁務にかまけて（即ち自分勝手で）最愛の子の教育にすら心を注がぬ今の世だ。夫は夫の自分勝手、妻は妻の自分勝手ばかりの今の世だ。人情知らぬ若い者が自分勝手の不孝、亂暴、他人同士の沒公德、それに何の不思議があらうぞ？ 眼二つ宛具へながら、五大洲一面に漲る最悪の時代精神は利己的個人主義、俗語でいへば私慾一邊即自分勝手一方といふ大濁潮だと心附かぬか？ ニイチエは循俗の蕩兒、循流の死魚だと知らぬか？ 心附いて尙ほニイチエヤニズムを反動といふか？ 然らば、ニイチエヤニズムは兼愛主義もしくは協同主義か？ 抑、また私慾一邊が眞個に人間の踐むべき道か？

ニイチエは循俗の驕兒たるのみ

利己主義の側面ばかりではない、他の側面から見てもニイチエはむしろ惡時代精神の權化だ。決して「文明の眞批評家」でなく、盲反動のサムソンでもない。只の盲目の驕兒で、我儘ツ子だ。常にみづから聊かも前人、時人に負ふ所なきを理想として、一時は唯一人の師と崇拜してゐたシヨールペンハウエルの説にすらも口ぎたない反駁を加へるほどの、獨立創見を表招牌にするニイチエの見は果して如何ほどまで時代精神に（無論利己主義の點は度外に於て）立離れてゐるかと調べて

見ると、大案外だ。其の説の大根は悉く時代精神の糟粕、幹と枝と葉とはおのが空想、花は其の筆（今の乾燥な獨逸の科學壇などに對しては宛がら塵溜へ鶴が降りたやうな筆）實は蟲がついてゐるので、食へる分は殆ど無いが、偶有れば、それは其の詩的想像が結んだものだ。

彼れが藝術觀は言ふまでもなくショーペンハウエルの煮返し、焼直しからはじまつたのであつたが、中ごろからルッソーの復初主義の煮返しやダーキンの優勝劣敗論の生煮などを混合せで、つひに其の倫理論（海豚汁臺の暗汁にも比喩すべき倫理觀）を調理した。“Darwinism gone mad”と評せられたも無理は無い。頻に史的討究を攻撃しながら、自分は博言學を踏臺にしての似而非濫論や由來談、自然科學やダーキニズムを嘲りながら、おのが立脚地は「生欲」や「本性」の一點張で、譬へば生のまゝの進化論に空想の乳汁をぶツかけたやうなものだ。無論宗教氣微塵もなければ、嚴密な意味で謂ふ哲學氣も無い。科學が結晶した常識なら、ニイチエのは結晶した純空想で、もあらうか？

彼れは空想的精神の權化

結晶 常識に外ならぬ科學の今の世に歓迎せられて全盛なは、前の惡時代精神、即ち超絶哲學や、エルテリズムやロマンチズムの反動なのだ。盛んに常識教育の鼓吹せられたのも、せられ

つゝあるのも、件の惡時代精神と闘はうが爲であつたのだ。一面から見れば彼の過激な社會主義や無政府主義などは明かに常識不足の結果だ。論よりも證據だ、古今内外の史傳や實歴に就いて空想の弊と常識の利とを比較して見るがよい。革命動亂後に於ける西洋の社會が空想を忌み常識を苛需するに至つたとの偶然ならぬ仔細はおのづから解る。藝術専門家は常に理想界に住するもよからうし、詩人、小説家は始終空想に耽るもよからう。が普通國民の普通教育は「常識」と「實用」とに立脚せずして何としようぞ？ 同型主義や形式教育の事はおのづから別だから暫らく措く、普通教育の主義としては彼の天才養成主義などいふものは根本的に邪曲だ。小ニイチエ、小ルッソー、小バイロン、小ショーペンハウエルほど、古往今來、有害にして無益な者は無い。一人、二人の豪傑を作らん爲に（それすらも不確實だ！）幾多大切なる「人の子」を不具とすることを敢てする又は敢てせんことを主張する無思慮な、無責任な僻論者らこそ不埒至極な者だぞ。

いつの世、いづこの國にも、此の種の空想の根は絶えぬ。プラトンがおのれ一大詩才にありながら詩人を狂人と同視したも有理。所謂天才を狂の亞流とするも無理でない。常識一邊の徒の陋と俗にも堪へかねるが、これは人に及ばず大毒がないから打棄てゝもおかれる。似而非天才が自分天狗の空想談に至つては間、劣才の青年者流を誤る虞れがあるから、社會經營の上から觀て流石に放任してもおかれぬ道理だ。「常識獎勵」も此の理より見れば有理では無いか？ 換言すれば、ニイ

チエは目下尙ほ依然として獨逸の一方に磅礴たる空想的、精神の權化で、今の所謂「常識教育」を初め彼の演繹推理に對する歸納推理、獨斷思索に對する實驗や觀察や比較や對照や推算や統計や史的討究や科學的研鑽は、いづれも皆此の妖魔を退治せんが爲に起つた新兵なので、多少已に弊を醸したにも係らず、まだく進軍の途次にあるのだ。よしんば凱旋の期はあるとも、思索壇の常備兵として長久に備へ附けて置かるべきものだ。

彼れの思索の取得は何ぞ？

假に反動の健兒だとしても、高く買つて色盲、つぶし値は障眼のニイチエだのに、反動の健兒どころか、今を盛りの惡思潮の權化、「利己一邊主義」の本體兼空想の塊と斯う相場附がきまつたなら、差引き、思索家としての彼れの眞價は幾何かといふ疑問が残る。

知識は相對的だと喝破し、道義は人爲的だと道破したのがニイチエの功績か？ 否、かやうな見解は懷疑主義勃興以來の陳說で、耳だこも先祖の遺傳だ。然らば眞善美の、評價附を「性の満足」に歸したのが新しいか？ 否、これとても殆ど常識的だ。（空想の權化が此に至つて常識的と評せられる、妙であらうかの！）智情意の三作用を辨じ得る程の常識があれば、此れ程のとは自然に心づく。何となれば既に理性（先天的理智）の存在を否拒し、推理智の絶對力を否拒し、絶對眞、絶

對善、絶對美の客觀的存在を否拒する以上は、其の論理上の必然の順序として、心を一時の感情に住せしめるか、若しくは本具の嗜欲に放任し去るか、其のいづれかに歸着せざるを得ぬ道理だ。譬へば、彼の現在に安住しかねた手合が其の必然の結果として、過去を回顧し追慕するか、然らざれば未來を理想し憧憬すると同じ格で、普通の智力（常識）で出来ることだ。「右へ行かれねば左へゆく」、これしきのことは白痴でもすることだが、「理を明かにする能はずんば情に一任し、智に安立する能はずんば性に率ふ」、これほどの方式は古來常識の慣用し來つた所だ。

率性主義の倫理

「性に率ふ。」此の方式は支那に在つては子思以來で、方式としては久しいものだ。「性」といふ語の解次第、即ち内容次第で、萬古一貫の眞理となるまいものでもない。併し色、食も性なら、眠、息、動、戲も性、自衛、自活、交接（生殖）、育兒も性なら、同感、社交、惻隱も性、悲、喜、愛、憎、恐怖、驚訝、疑、信も性、模倣も性、競争も性、反抗も性、和同も性、自由を愛し不羈を欲するも性なら、依頼服従を好むも性だ。通例、近世の心理學者が性又は生能、感情又は生欲と名づくるもの、大體は對我と對他とに分つもの、其の源流の別、本末の解、諸説紛々として今尙ほしかとは定まらぬ。

同じく性といふうちにも、眞個原始的の性もあれば、第二位の、派生の、遺傳的の性もある。對我的と總稱する性が必ずしも皆同等に自己に利益を與ふるでもなく、且つ純利己的の立脚地より見てもいろいろ矛盾することもあつて、到底種々雑多の自己の性を悉く満足せしむることは叶はぬのみか、しかせんと試みるは不利益なことが多い。こゝに於てか性の本末源流を明かにし、尤も重要な髓腦的な主宰的の性を探り出してそれを我が率由すべき性、即ち標準の性と定めねばならぬ。孟軻は其の所謂四端をば人間の性、標準の性と見た。子思は「誠是れ性」と觀じた。荀子、ホップスは利己的と觀、天則博士も同様に觀じた。而してニイチエは漫然として自由を愛し健闘を好み權力を欲する是れ性と觀じた。前の諸家も未だしたが、最後の説の粗漏杜撰は今更辯するに及ばぬことだ。

蓋しニイチエの本性満足論は代數的方式を使ひそこねた計算の格だ。ピタゴラスは不易の方式だが、填めた數字が間ちがつたなら、其の答へに半錢の價値もあるまい。おのか卑な根性のせいからか、あはれ萬の位と十の位とを取ちがへた!

「藝術の爲の生活」"Life for Art" 何と、これは遊ぶを第一の目的にして父母、保姆、子守の干渉に駄々をこねる我儘ツ子の理想ではないか? 「大自由! 大權力!」"Will to power" "Overman" "ナポレオンよりも豪い人になりたいなア!" "サンダウのやうになりたいなア!" 何と、

これは高等小學乃至中學兒童の理想ではないか? 「づうくしいに限るよ!」 「一押、二金、三男だアな!」 ニイチエの理想は之れを抜くと果して幾何ぞ? かくの如きも或ひは人間の生欲でもあらう、但し小兒が觀た生欲、小中學生が觀た、常識の觀た生欲だ。即ち聊かも理想化せざる野性のそむちのまゝの常識が觀た生欲だ。

説明科學の植物學や動物學なら「結晶した常識」たるのみでも事足らうが、吾々人間の爲に、自然の性に率したがひながらも自造し自化するの道を供し、向上の標的を確示するの任ある倫理學は野性的常識の結晶では物足らぬ譯だ。野性的常識一邊では、只管現實的となつて向上の案が浮ばう筈もなく、向上又は社交といふことを離れては、倫理又は道義といふ觀念が成立ちかねる。利己的にもせよ、厭世的にもせよ、ショーペンハウエルのは理想化されてあつたゆゑに、兎も角も倫理の眞意を捉へた。ニイチエの論に至つては、社交性皆無、自分勝手一方の人間の道義。それならば道も理も要つたものでない筈だ、其の時々の出來心できこころでよいことだ。出來心が道ならば、道がないも同じではないか?

倫理は進歩發達を豫想する、流石にニイチエも進歩發達の必要は例の "Overman" に於て認めてゐる。而も「自然のまゝが善い」、「性のまゝにせよ」といふは、進むに及ばぬ、工夫も方案も要らぬといふと同じ意義ではないか? 工夫も方案も要らぬなら、何も管々くわんくわんしく辯するにも及ばぬ譯だ。且

つや真に利己一邊主義なら自家擴張の好工夫が浮んだからとて、我が同情せぬ世間の昧者を教へ導く要もなし、褒められよう（同感せられよう）などいふ卑しい氣は其の主義としてあるまじき筈。いづれにしても世間に發表するには及ばぬ譯だ。何の爲にニイチエは其の説を公にしたか？ 其の衷情を察すると（當人は憐れまれ、同情されることが大禁物であるに係らず）寧ろ憫むべく怛むべきものがあるではないか！

理論は假面、真相は嘲罵（？）

或ひはニイチエが一期の理論は、就中其の倫理論はほんの一時の假面であつて、隨つて、それが道理に合はうと合ふまいとは初めから關する所ではなく、ニイチエが本意も崇拜者の本意も主として其の「唯我満足主義」の公然たる鼓吹と相表裏する「偽善」の彈劾、「矯飾」の痛罵、くはしくいへば「世を憤る詩人の反語」といふ點にあるのではないか？ 然らざれば世の醜態を無遠慮に喝破する天真爛漫の直言即ち散文的大抒情詩と見做さるべき點に存するのでは無いかといふ疑問が浮ぶ。或信徒連は之れに對して「無論だ！」と答へる。

假に右の如く觀察し來れば、ニイチエが傑作の散文詩『ザラツーストラ如是説』は（其の偽善の頭上に打下された大痛棒といふ點からいへば）正に彼のスキフトが『ガリヴァ巡島記』中のヤフー

談と兄弟たるべき異曲同工の大傑篇と見做すべきものではあるまいか？ 只彼れは現世態の醜を露寫するエッキス光線、此れは理想佛の鍍金を剥がし臺座を鏝す電氣作用、彼れは冷罵を包んだ諷刺、此れは熱罵を兼ねた險語、彼れは寓言、故に隱然たる惡口雜言、此れは反語、隨つて正面から見れば露骨の惡德鼓吹。言論自由の十九世紀と專制拘束の十八世紀との時勢の相違で、其の體式には大差があれど、共に是れ世を欺き自ら欺くを屑とせざる詩人肌の眞天才が俗を憤り世を慨する眞摯の絶叫と見做すべきものではないか？

大騙賊の織物師に一ばいはめられた或國の帝が、裸體のまゝで馬に騎つて（みづからは新調の盛服を着したつもりで）首都の大通りを巡幸した。上は大宰相より下は市井の男女老弱に至るまで、一人の其の醜を口にするものなく、或ひは自ら欺き、或ひは他を欺いて、「見事々々！」とほめてゐたを、やがてふと子供が來て、前後の思慮もなく聲を放つて「ヤアをかしいや、裸だ〜！」と手を拍つて笑つたので、一同も心づいてどつと吹出し、帝も初めて驚いて、悟つて慚ぢて、王宮へ逃歸つたといふ有名な諷刺談。何と、今の世の有様はそれではないか？ 偽善者ならざれば自欺者、然らざれば懷疑者、姑息者、逡巡者、昧者、愚者の集合だ。ニイチエが單刀直入の倫理觀は、天に口なし小兒をして言はしむとも評すべきではないか？ 思索家としては頑童でもあらうが、此の至誠、至公な、思無邪な直言、到底人間の物にあらずして正に是れ宛然たる一の天童ではないか！

など、信徒連に言はせたなら辯ずるでもあらう。いかさま、それも一理だ。併しながら反語をして反語たらしめ、實力あらしめんとせば、反語者みづからは反語または諷刺の當對となるべからざる筈だ。わが鼻の上の飯粒には心附かんでゐて、他人の頬邊の鍋墨を諷刺したり、反語したら如何であらうぞ？ 大臣も市民も皆赤裸々で、笑ふ小僧みづからも一絲を懸けぬ生れおちた儘の姿であつたなら、彼れ我れ共に何も吹出して哄笑するの必要の生ぜぬ次第だ。利己一邊主義が眞に人間を貫いてゐる實相なら、反語も熱罵も甲斐のない道理だから、せめて少數なりとも、せめて罵る當人なりとも其の反對の人物でなければならぬ筈だ。

態と反語的に利己一邊主義、唯我満足主義を唱道して暗に偽善を罵倒するは「詩人が憤世の聲」として妙ならぬでもないが、若し其の詩人みづからが本來（主義上ではなく品性上、口の上では無く行爲の上で）利己一邊の男であつたらば如何であらうぞ 「利己一邊でありながら言行に偽善を粧ふ者は惡むべく賤むべきだが、動機は利己一邊であつても、世間の偽善を罵倒して慷慨の詩人めかす者は同感すべく稱すべきだ！」 奇な論法だ！ 希臘傳來か、印度産か、抑、また獨逸製か？ などいふ疑問も生じさうだによつて、兎も角もニイチエの手柄を少々ばかり見ませうわい。

普通所謂の嘲罵家、諷刺家

「五十歩にして百歩を笑は、如何だ」とは古今の嘲罵家、諷刺家、反語家等の頭上に打下さるべき反語の大斧で、恐らくこれが爲に眞二つとならざるを得る者は稀であらう。蓋し彼輩が手厳しく嘲罵し辛辣に諷刺し得る所以のものは、往々にして常人自身が同じ穴の老狐か、さなくば同じ濁流の泥鰻であるため、又はあつた爲に外ならぬ。手前が分は棚へあげ、浮世の醜をひろつて口を糊し、それで文學者で候の、慷慨家で候のとは蟲のよい營業柄さ。蓋し屑拾ひに似て是なるものだ。學藝上の欺騙師が實業上の同惡を罵り、著作上の虚飾家、盲従家が政治上、社會上の同醜を嘲るなどを諷刺嘲罵の並仕立として、最上等が霸氣の野心攻撃、高慢の自惚攻撃、邪説の俗論攻撃、言意背馳の言行背馳攻撃、それからずつと降つては偽善の顯惡攻撃、矯飾の無作法攻撃、モルモンの善妾攻撃、善妾の姦通攻撃、邪淫の收賄攻撃、收賂の窃盜攻撃、詐欺攻撃、詐欺窃盜の強盜攻撃、殺人攻撃等、等、等……何の事も無い、猿の尻笑ひだ！

近劣りのする者は紫派の油畫、役者の舞臺貌、化粧した賣女、鍍金、綿入、大評判の豪傑、學者、道德家、それについて諷刺家、嘲罵者。スキフト、ヴォルテール、ボープ、スターン、鳩溪、三馬……詳傳を御覽なさいだが、どれも親父や兄貴には眞平の手合ばかりだ。其のうちの別仕立と崇められるカーライルからが固必意我の塊で、興の醒めた、敬愛の出來にくい人物、エマーンも逢つて見て大案外であつたらしい。山に比すれば噴火山、水に比すればナイヤガラの瀑布で

もあらうか？ 遠くはなれて御覽なさるうちが花だ。真近く寄つたら堪つたものではない。

とはいへ彼等の説いたとは、兎も角も苦言にがごちで、本人の品性ひとがらは如何どうあらうと、一面矯風の用をするから、出所と調製法とは必ずしも問ふに及ばぬ。兎も角も出来上できあがりりは一種の薬だ。こゝはニイチエの所謂「作者は土質、肥料、作は穀類」で、かゝる作物を評するに必ずしも作者の品性や行實を是非する必要はない。譬へば肥料の性質を想像して米麥をきたなるには及ばぬ道理だ。是れが蓋し世の聰明者流までが彼等諷刺家、嘲罵者を歓迎随喜する所以でもあらうか？

たゞし、それは其の言論が苦言にがごちであつて、多少世間の樂となる場合にのみいふべきことだ。其の著作が寧ろ世間の弊風、悪徳を助長させる傾きの、言はゞ甘言あまごちのものであつたら如何どうか？ 其の甘言は畢竟は苦言にがごちの假面だ、即ち作者自身は其の言とは全く反對の行爲、反對の品性の人だといふ證明が成立てば格別、さなくば其の人の説く所を反語とは受取れぬ次第だ。(當人があくまでも眞面目まじめだと主張し、且つ如何いかにも眞摯らしい證據の歴々たる時に、何も骨を折つて反語にしてのける必要もあるまじく、本人の本意でもあるまい。)既に反語でないと定れば「詩人が憤世の聲」とやらいふことはとんだ買ひかぶりの臆測といふものだ。

本來ニイチエは、個人として抑、如何やうな人物であつたぞ？ 彼れの言は直言か、反語か？ さて、こゝに到ると、馬骨が筆聊か、イヤ大いに鈍らざるを得ぬ仔細がある。無道德主義の鼓吹者た

るニイチエに對して心地よく動いた筆が、個人としての同じ人間に對しては儘にならぬ。イヤ氣の毒でならぬ。併し止むを得ぬから手きびしくまわらう。

品性上より觀たるニイチエ

説明するまでもない理由で、兇暴な鷲や瘴惡な蟒蛇うらまを退治するは愉快だが、同じ屬たぐひの動物ながら青蛇あせたいしやうや鷹たかは、よしんば多少又向つて來ようとも、打殺すに忍びぬが人の情だ。著述上のニイチエ、主義いضمとしてのニイチエは鷲をとろち、蛇へびだが、個人としての彼れは、時としては青蛇あせたいしやう、時としては鷹たかだ。鷹の時は使ひ道がありげにも思ふが、青蛇あせたいしやうの時は只何の事は無く可厭いやだ、醜みにくだ。

ニイチエの品性は主義いضم固定期を界線として截然二期に分たるべきものたるはたしかだ。砲兵時代までの彼れは、傳記家連の言ふ所に従へば、主義に見えた當人とは殆ど全く反對の、柔順な、温厚な、情の深い、無論正直な、潔白な、品行方正な、「兒チヤイルド」としても「學童スクールボーイ」としても、「兵士ソルジャー」としても、すべて模範視さるべきものであつたらしい。どうしてまたそんな男が、あのやうな主義を唱へるやうになつたかといふに、それは第一に従軍中の或經驗インフルエンスの勢力、次ぎには明かにショーペンハウエルの惡感化、第三には惡時代精神の隱然たる感化、第四には周圍の俗學、似而非道德主義、偽善的習慣及びショーペンハウエルの無我主義に對する反動等の然らしめたのであつた。

豹變後即ち主義確定後のニイチエとても、單に常識的、道德を標準として言へば、立派な紳士だ、俗に謂ふ不品行や不道德のなかつたとは明かだから、若し日本流のを標準としたなら紳士の別誂でもあらうよ。強窃盜は無論、詐欺もせねば收賄もせなんだ。邪淫氣は無論ない。一生不犯で、其の邊は奇麗なものであつた。といふと近邊のニイチエ羅漢は「そらどうだ！ 詩人憤世の聲だ！」などと叫ぶであらうが、その近眼流の批評が情ないといふのだ。「收賄と邪淫さへせねば乃公は今の政治家連でも我慢する」と近日或慨世家が申されたさうな、が絶望の歎としてなら兎も角もだが、それはちと鼻元安心でござらうぞ。面部へふき出す揚梅瘡がいつち堪らぬといふは同感だが、それは體裁だけの事だ。根がぬけぬうちは如何して聊も安心は出来ぬ。いつ、どこへ、どう吹出すか知れたものでない。同じ道理で俗に謂ふ悪行をせぬからとて其の人を善人、君子などとは淺慮な見方だ。

之れを要するに、ニイチエは決して反語者ではないのだ。イヤ若しニイチエに品性上敬すべき點があるとしたら、それは、其の才よりも、其の勇よりも、寧ろ其の天真爛漫、頑兒のやうに我儘で、露骨で「赤裸々に正直」な點であらう。彼れを反語者にしてのける或信徒連の言説は、おのが心に引比べての似而非辯護で、最眞の引倒しだ。ニイチエはあくまでもおのが主義を信じ、及ぶべくんば徹頭徹尾、其の主義の文字通りに實踐躬行したいといふのが本旨であつたが、つまり行ひ得なん

だのだ！ 嗚呼！ 彼れの瘡我慢、大高慢を以てして、世間的には言行一致せなんだ點が、そこが實に言語道斷、甚深微妙な倫理上の教訓の存するところだ。

併しそれは、世間に向つて、活人間に向つて利己一邊主義を實踐躬行せんと試みた時のニイチエのことだ。古人に對し、死者に對し、未見無交際の學者、外國の學者乃至無形、不具體の學說、宗旨、主義等に對する彼れの態度、品行は全く別だ。此に至つては純乎たる爲己一邊の人物だ。換言すれば、彼れは、反語者どころか、其の主義其のまゝ、其の理想そのまゝの人物だ。即ち自分勝手一方の、高慢な、剛情な、固必意我の、寡聞孤陋の、勝氣の、瘦我慢の強ひてあらゆる學者よりも上に、其の師よりも上に自家を標置せんことを主義、目的とし、力めて他を排擠する人物だ。彼れはひたもの自我を立し、自我を高めようとのみ努力し、其の必然の結果としてしやにむに、四角八面に反闘し、習慣に反闘し、輿論に反闘し、其のはじめ唯一の師と崇拜したショーペンハウエルにも、其の心友と自ら許したワグネルにも、多少相投合する所あるルッソーの説にもダーキンの説にも反闘し（口汚なく悪口した。而も其の反闘の合理的ならずして、往々にして故意的、然らざれば感情的なる證據は其の著作上に隠然としてゐる。此の點から見れば明かに爲己一邊の剛情者で、俗に謂ふ鼻曲り、つむぢ曲りの頑童（反闘の兒！）だ。やはり近づくべからざる一小噴火山だ。動物園の豹格の代物だ。

崇拜者雲の如しとは死んでしまつた今日の話だ。生きてゐた間には終始傍を離れなんだ崇拜者、信服者はたつた一人の妹ばかり！ 折々圍繞し隨喜したは妹が友達的女連！ 然らざれば遠方の、又は未見の景慕者、愛讀者だ！ 眞の同輩中には一人の「心友」なく、交遊も殆ど無かつた。餘りに凡を抜いてゐるために同輩の友を缺き崇拜者のみを有する例はあるが、ニイチエは果してそのたぐひであらうか？ 何故に居常の追隨者中に、十哲、十二弟子はさておいて、只一人の男性さへも有せなんだか？

或ひはニイチエが品性の價值は、専ら其の古今未曾有の赤裸々の直言、大膽不敵、傍若無人の主張、縦横健闘の大勇氣、剛毅果敢の所謂「超人」的の意志に在るといふか？ 彼れが所信を披瀝し操守を敢行して忌憚せざる大膽力、大勇猛は、今の「薄志弱行の徒」をして驚愕せしめ、慚愧せしめ、奮起せしむるの效があるゆゑ、そればかりでも稱讚するに足るといふか？ いかさま、それも調べどころだ。

ニイチエは大勇者？

大勇者？ 勇もいろいろだが、爰に謂ふ勇とは何ぞ？ 先づ勇の釋義から始めねばならぬ。一切無知の、怖いもの知らずの、無斟酌の、向う見ずの、結果知らずの、命知らずの、白痴的、醉漢的、

狂人的、猪的の盲勇氣も一種の勇。腕力を持ち、才智を持ち、官を持ち、金力を持ち、子分を持ち、應援を持ち、而して強がるも一種の勇。運を持ち、神を持ち、而して蹈張るも一種の勇。北方の強も一種の勇なら、南方の強も一種の勇だ。北宮勳のも一種の勇なら、孟施舍のも一種の勇だ。「自ら反みて縮からずんば褐寬博といふとも吾れ憚れざらんや。自ら反みて縮くんば千萬人といふとも吾れ往かん」といふのも勇だ。ニイチエ宗徒の謂ふ所の勇は其のうちのどれだ？

勇の重んずべき一徳たることは言ふを俟たぬが、只其の徳としての性質が善惡相通であることを忘れてはならぬ。勇敢、剛毅、果斷、豪邁及び大膽、冒險及び自制、克己等を悉皆「勇」の作用とすれば、勇は畢竟方便善で、應用は使用者の心々、釋迦、基督、仲尼に宜しく、歴山、該撒、奈翁に宜しく、君子に宜しく、賊子に宜しく、收賄公吏に宜しく、殘虐の爲政家にも宜しい。譬へば飴だ。柳下惠が用ふれば老親が滋養の料、盜跖が用ふれば錠を開くの具だ。又利刀だ。忠臣之れを揮つては逆賊の頭斬るべし、狂人が之れを手にすれば近所合壁大騒ぎだ。之れを要するに「勇」は絶対的美徳ではない、只人間の處世上善惡兩用の重寶な道具といふに過ぎぬ。随つて「勇」さへあればと思ふは鼻元思案だが、而も我れ他共に何となく「勇」を絶対善のやうに思ふは、彼の「薄志弱行」の、方便上、善にも惡にも用をなさぬのに比べるからのことだ。「惡に強きは善にも強し」で、こやつ流石に膽力だけはある、一旦改悛したならば有用な材であらうと思ふからのこと

だ。その意味を離れては、利己心に伴ふ「勇氣」乃至「膽力」等を稱美すべき謂はれない。

取調べるまでもなく、ニイチエの勇は、(若し在りとするれば)其の性質から見ても、又其の主義から見ても、爲己一邊の勇氣即ち我を立せんための勇だ。其の寡聞孤陋にして事理に明かならず、空想的、獨斷的、馬車馬的な點からいへば、盲勇氣とも名づくべきだが、兎も角も一種の勇氣には相違ない。前段にも述べた通り、彼れは八面に敵を作り、縦横に奮闘した。彼れは赤裸々におのが所信を披瀝した。些の矯飾もなく、些の忌避もない。(と言ひかけると、信徒連中は乗地になつて)

「無論だ! 世界開闢以來の唯一眞神を其の帝座より蹴落し、歐洲二千年來の大本尊、神子基督を罵倒した大勇氣の壯烈は、到底、貴様たち外國人の想像の及ばざる所だ。ニイチエ大師の反基督主義は驚天動地の大霹靂と崇めた、へ奉るべきものだ!」なぞと言はうて。

成る程、八面に敵を作つて縦横に奮闘したといふは事實だ。併しその敵は、一二例を除けば、大概未見の學者、然らざれば古人や死人や外國の學者や無人格の主義や不具體の議論だ。剩へ反駁せられて答へたことが無い。罵りばなし、怒鳴りばなしといふ軍法の闘だ。いかさま、基督教の倫理を罵倒したには相違ない。が、高等批判勃興して既に幾昔の昨今に、それが何だ? たかゞ彌次馬の、而も尻馬だ。夥しく敵を作つたが、彼れは城中に閉籠つて二度とは出て闘はぬ。或ひはその敵の大概は、彼れを反撃する能はざる書中の敵か、でなくば其の非難をさへ聽く機會を有たぬ外國の敵だ。

「自ら反みて縮くんば千萬人といふとも我れ往かん。」眼前に直接に、具體的に且つ現實的に、夥多の敵を叩へてゐて、さて主義の爲に直往し兼ねてそれを實踐するをこそ眞の勇氣といふべきだが、兎も角も糊口には窮せぬ身で、獨り書齋に閉籠つてゐての大言壯語が何の大勇氣ぞ? 人大概は我が口もしくは我が父母妻孥の口を糊するの道に窮すればこそ勇氣が沮むのだ。又直言直諫を難しとするは、好意の直言すら、面と向つては言ひだしにくいものといふ人情の弱點を指したものだ。蔭でならば大抵の者が所謂蔭辨慶の大勇士だ。とりわけ神経質乃至多血神経質の、癪持の、多感多情の、人前では(外聞に關せぬ限りは)甚だ温順、惡くいへば鼻柱も腰も弱い手合が、蔭では格外の大激昂、大氣焰、筆を取つては面と向つた時とは打つてかはつて、思ひ切つた而も無責任な惡口雜言なぞを並べる例もある。訥辯の人の達筆と同じ道理の反動作用で、さもあらうか?

ニイチエもまたそのたぐひだ。偏屈で、狷介で、大高慢の我儘者で、全然世間交際はせず、たつた一人の心友らしいものとするも絶交し、我が家のみ引籠つて、唯我獨尊で、左右には劣才劣識の女連ばかりをひきつけての放語漫言、筆を取つては未見者や死人を敵手、交際せぬ學者や書籍を敵手に原稿紙上の奮撃突戰、但し正々堂々旗鼓相見ゆる底の論戰ではなくて、その大概は獨相撲、畠水練の格だ。一つまちがへば、あつばれドン・キホーテ傳中の好話柄とは、流石に評するさへ氣の毒でならぬ。

同感、相憐を罵倒したニイチエだが、憫むべきかな、其の實は女連の追従と同感とに（自ら欺いて）精神上の露命を維いでゐたのだ。二つには「純利己主義の本性満足説」は、自分はおくまでも真理と信ずるところから、多分全世界の（表向は兎も角も）隠然たる同意賛成を得べきものと、そこに半無意識の望を据ゑて（其の豫望が中つてニイチエ宗の大繁昌！）世に公にしたものと推せられる。絶対獨立を主義とする大勇士の自家撞着の心事憫むべきではないか？ 要するにニイチエの勇は家庭的、書齋的、消極的で、所謂大なる瘦我慢に過ぎぬものだ。

さし引残る所の價值幾何？

既に反動の健兒でなく、反語家でも慷慨家でもなく、むしろ惡時代精神の權化で、言行一致の、偏屈な我儘者で、大膽不敵な危言は吐くが、絶交際で、閉居主義で、勇氣はあるが非實際的、非世間的、家庭的、書齋的、消極的の勇氣で、思索家としては頭から空想的、臆測的、獨斷的、然らざれば倫理に關する限りは常識的、而も野性のまゝの常識的で、若し何等かの取得があるとすれば、それは、些の矯飾無く、些の忌避なく、有りのまゝに、感じたまゝに、おのが思想感情を吐露する正直、即ち小兒めいた天真爛漫にありとしか、如何算盤を取直して見ても位る取が出来ぬとしたら、何と、目下内外の信徒、崇拜者、就中ついでこの阿羅漢連が擔ぎ廻つて樽天皇にしての

ける謂はれ因縁が解しにくいではないか？

愚か〜！（と何處やらで上品な貴族的な託宣が聞える。）自體ニイチエは學者では無い、其の言ふ所を學說など、見るが抑の誤りだ。彼れの述ぶる所は學說以上の理想、學說以上の想像、謂は、人間靈性の呼吸を以て直ちに人の肺腑に通ずるにあるのだ。其れを俗學者流が自家の例の歴史論や倫理見に照らして彼れ此れ批判し得たつもりであるのは何たる滑稽ぞ？ かゝる俗學者流に一大頓悟を與へん爲に、取りも直さずニイチエは生れ出たのである。

これある哉〜！こゝは一つ平民口調をやめて「口上茶番」めかぬやうに、餘所ゆきに御座り奉つて、貴族的の莊嚴な調子で言はうぞ。そこだ、その我々共大俗物には呑込めぬ學說以上の理想とやら、想像とやら、人間靈性の呼吸とやらいふやつの説明が承りたいのだ。此の先一句は甚深無量の、言語道斷の「恐らくは彼れ自らも解する能はざりし天地人生の幽微也」とあるか？ いかさま、當人自身は却つて半無意識なともあらう、推獎者は之れを付度し解釋して其の何の意たるを宣傳するが本務ではないか？ そこがそれ我々俗物にこそ出來ね、天才の眞意を知るは天才の質の批判に限るとだ。御本山の獨逸の批判家たちがシェークスピアを通辯したやうに一番御盡力が願ひたいものだ。當人にさへ解らぬ位ゆるゑ、崇拜者には尙ほ解らぬ、所謂捻華微笑の境だとあるか？ それでは讀まぬとし書かぬどしの、一切聾話の格で、没分曉だ。引合に出される捻華微笑こそい、

迷惑の。

五〇二

「曰はく言ひがたし！」逃口上としては調法だが、哲學者、批評家の自慢げに口にすべき言葉か？ いかさま、言ひがたいとは幾らもあるが「曰はく言ひがたし」と答へるは「我が智足らず、我が才足らず、我が言葉足らず」の義で、明かに不能、不器の自白、敗北の自白だ。「分析しても語りがたく、総合しても語りがたく、批擬を絶し、類推を絶し、比喩にも言顯しがたく、色にも畫にも寫しがたく、聲にも樂にも寓しがたし」の意だから、此の自白は、力の及ぶかぎり種々の方便を試みた上でいふべきことだ。初手から「曰はく言ひがたし」と宣言する程なら批判家の招牌は何故掲げた？ ちと持餘ると「何ともいへぬ」、「さら／＼とよし」の紋切形で抜けるなら、山出でも劇通は勤まる譯だ。

そちらから見ても馬骨輩の非難が滑稽とも大阪俄とも見えようが、人の目は得手勝手なものさね、こちらから見ると其方様の卓説が多少滑稽のやうにも見える。イヤと／＼矛盾して根から要領を得ぬ抽象名詞、固有名詞、とりわけ書名、人名の雜然たる行列を見ると、どうやら愁嘆場のやうな感じもして悲劇のやうにも見える。「靈性の呼吸」だの「學説以上の理想」だの「直に人の肺腑に通ず」だの、獨逸語を習はなんだ故か、ちつとも解せぬ。それは一體どんなことつてござりますか？ 大師様のは菩薩乗で、甚深無量で、逆もこちらら凡夫俗物の得て聽くべからざるものと

も斷念めませう、せめて「靈性の呼吸」といふ奴だけは聽いておきたい。敵手は没分曉でござる。ならうことなら實例か何かで願ひたい。輪郭ばかりでなく彩色も濃淡もお序にお頼み申します。と言ふと、誰れだか傍から「重箱ばかりぢやア面くらひまさア。どうせ下さるものなら眞の物を容れてね」と口を添へた。

「吾人が天才を歎美するは（と前の閑雅な聲が後を繼いだ）吾人の精神的生活を豊富にし、是れによつて自ら慰め、自ら勵み、かねて是世に處する安立の地盤を求むるにある。凡俗者流の生活する世界以上に於て吾人の理想的天地を建設するの希望は、是等天才偉人の前蹤によつて少からず確められ、且つ勵まされる。吾人は是の希望によつて吾人の人格を修養し、吾人の信仰を活かし且つ固むるのだ。是の間の消息は倫理見や歴史論でニイチエを批評し得たりとする輩の窺知を許さぬことは言ふまでもない。」

されば、そこを通辯の功德で、窺ひ知らせて貰ひたいといふのだ。が、彌、出でてさう彌、抽象づいめでは、吾々俗學には呑込めぬ。天才の著作に觸れ、ば何の譯もなく精神的、生活とかいふ奴が豊富になるのか？ 希望がどう勵まされ、どう確められるぞ？ いかなる仔細、手續で人格修養の助けになるぞ？ まさか、それまでが「曰はく言ひがたし」でもあるまい。

それはさうと、天才といふものは變なものだね。自分すらわからぬ、「曰はく言ひがたい」とを

勝手に並べて、其の思索上に何の取得もなくつて、山も歌はず、河も詠ぜず、それで大詩人になりすまして、波濤萬里を隔てた我が國の英才たちの精神的、生活まで豊富にする。如何さま、大俗物の馬骨などの目で見ると、人間業とは思はれぬ。神怪不思議だ！ これも調べものだわえ。

哲學者、豫言者、反語家、詩人、天才

宗旨に派分、流儀に裏表がある格で、ニイチエ宗徒の見解もいろいろで、哲學者、豫言者、反語家、詩人の四資格を兼ね具へたと仰ぐもあれば、前號の閑雅な聲などは單に「人間靈性の呼吸を以て直に人の肺腑に通ずる」天才たるに過ぎぬと言ふ。空想臆斷が哲學でなく、惡時代精神を代表する語が豫言でなく、言行一致の危言が反語でない以上は、「詩人」と見るか、「天才」と見るか、もはや此の二種の外に見やうは無いが、思想に何の益する所もなく、而も倫理上には有害な妄想を注入する作家を詩人、天才ともてはやす理由が疑問だ。先づ詩人から調べうぞ。

夫れ詩歌は想を以て取るべく、辭を以て取るべく、調を以て取るべきだ。同じく、想といふうちにも、理を以て取るべきもある、情を以て取るべきもある。思索家を兼ねたが爲、又は時代精神を謳歌し若しくは豫言したが爲に重きを置かれるもある。ダンテ、ミルトン、シェレー、ウァーヅワース、ゲーテ、シルレル、テニスン、ブラウニング等が其の例だ。人情、世態を客觀的に描寫したが

爲に永遠にもてはやされるもある。ホーマー、チョーサー、シェークスピア、モリエールがそれだ。或ひはまた山を歌ひ河を詠じ、自然の真趣旨を發揮し得たが爲に悦ばれるもある。十九世紀に入つてから此の種の詩人が輩出した。バイロン、シェレーらも一面はこゝに壽を有する。キーツ、スフィンバーンらも其の仲間だ。或ひは又全く時代精神と懸けはなれた純空想の別天地を詠じたが爲に愛誦せられる詩人もある。コールリッチ、ロゼッチらの荒唐にして妖艶な諸作の如きがそれだ。或ひはまた生な、思無邪な赤子の聲の如き至情の作もある。バインスの作のうちに、ウァーヅワースの句のうちに、と數へるまでもない、我が三十一文字や十七字中にそのたぐひが夥しい。

ニイチエを詩人といふは以上のどれに配してのことだぞ？ 思索家たちの詩人としては（學說以上の理想とやらが、説明され、ば格別）何の取所も無いのみか、有害至極だ。然らば人情世態を客觀的に描寫した詩人か？ 否々、偏見家、獨斷家といふ事實が其の然る能はざるを頭で自白してゐる。然らば自然美を詠じた詩人か？ いゝや、信徒自らも「山も歌はず、河も詠ぜず」と評してゐるし、馬骨が見たゞけでは、ニイチエは、韻語の作も若干あれど、到底自然詩人たるの價値は無い。然らばロゼッチやコールリッチの作を誦する時の如く、彼れのを讀めば中古ロマンスの昔に復つて、荒唐、幽怪の、非人間の、純空想の別乾坤に遊ぶことを得るか？ 否、彼れの作は純現實的、純利己的の旨を歌つたもので、あくまでも人間的で、寧ろ大俗氣、大慾心を鼓舞すべきものだ。然

らば彼れの作は單に天真流露の至情の聲か？ 然り、天真流露だけは略たしかだ。併し情の歌の第一義たる思無邪といふことを缺いてゐるから、到底眞の詩歌と稱しがたい。詩歌は決して主觀的なるを忌まぬが、私情的、利己的、爲我的を嫌ふと猶ほ粉黛の硫黄を嫌ひ、芍薬の鐵を嫌ふが如くだ。

「學說以上の理想」とかいふ奴が説明されて、其の内容と價值とが分明とならば格別、さなくば以上五種の標準に外れた詩人の資格は何ぞ？ たかゞ韻語家か、警句家か、修辭家だ。

さて、恨めしやな！ 韻語家、修辭家としての批評となつては、獨逸語を習ツとかなんだ報いで、馬骨ぐうの音も出ませぬわい！ (思想上の價值だけは翻譯でも、日本流でない以上は、ほぼ分るから、ホーマー、ダンテ、ゲーテ、シルレルの評も強ち押強とも存せぬ。尤も少々は強い方でもあらうが、尙ほ彼の要領を得いでゐて推獎する強さには迎も及びませぬかのやうにも存せられて。) せめて英譯と引くらべて辿り讀するほど讀めたなら原書の名でもならべうものを、と後悔も今更及びませぬわい。

警句家、修辭家としてのニイチエ

其の思想全體としては不健全で、謬妄で、矯激であつても、其の作中に散在する隻句片言には多少の眞理が含まれてゐて、間人をして招撫に違なきを覺えしむることもある。譬へば雲丹を取る

が如くだ、形は醜く、肉はもとより食ふべからず、剩へ貝は百を以て算へながら腸と卵とは之れを得ること甚だ尠少といふ代物だが、其の醇粹にして新鮮なるものに至つては、其の風味の美忘るべからざるものがある。僻論、邪説のうちに拾ひ出さるゝ警句、妙文句は恰もそれだ。

警句家は併しながら、是非とも修辭家でなくてはならぬ。諺が好い例だ。畢竟するに、言ひまはしが(就中簡潔と奇拔とが)警句や格言の命だ。此の故に警句家としての個人の批判には修辭上の評價が伴はねばならぬ。

寫真で見た人相ゆるゑ、迎も色艶までは鑑定は出來ぬが、煮返しでも味つて流石に清新の風味があるらしく感ぜられるはニイチエの文だ。そこは千膳一律の料理法や慣例一偏の獻立に食傷せなんだ功德でもあらうか？ 總じて筆づかひが新鮮で、落想は警、嘲罵は辣、斗擬も目新しく、直喩、隱喩も潑刺としてゐる。之れを後の數千年以前にこそ生きてゐたでもあらうが、今は化石した植物や、動物、標本ばさみにはさまれた木の葉や、花瓣、箱に磔の蝶や蜻蛉、それによつて似た死詞藻や、死典故、類函や韻府や御覽や類聚や活法になびてゐる奴の行列に比べると、いくら低く積つても手前島の野菜と八百屋が店の賣残りとはどにちがはうぞ。

ニイチエの歡迎せられるは、一は其の修辭の力だと評した人もあつた。兎も角も乾燥な獨逸の論壇に對しては異彩を放つたものに相違ない。諸國の信徒の音頭取は概して文學家であるなぞもニイチ

チェの文章に一種の魔力あることを暗證する事實だ。乾物で味つても其の旨が忍ばれるから、生のは一しほであらう。信徒衆、たんとお蠟燭をあげさせられませい！

併し其の警句、妙文句の大かたは、やはり雲丹に比すべきもので、而も鹽が利過ぎてゐるので、到底下戸向でなく、又常用すべきものでない。若し予が讀んだ譯が逐語譯なら總じて奇言は多く、格言は尠い。つまり句造り、言ひまはし又は着眼に旨味があるので、警句といふよりもむしろ危辯と名づくべきが多く、到底ベーコンの格言、エマーソンの警句など、日を同じうして談すべきものでないと思ふ。又終始一色、一味、一調子で、彼のカーライルの文章の如き、富贍な、雜駁な、ごつたかへした、壯大しいやうな、蕪雜なやうな、何のことはない、博物館の火車騒ぎ見たやうな面白味もないと睨んだ。

享保の昔、宮古路豊後といふ淨瑠璃語りが江戸に下つたが、其の猥雜の歌詞、浮靡の曲調が淫に過ぎ、傷に過ぎて、人情を破り、風俗を害ふことが夥しかつたによつて、官は遂に嚴令して之れを禁ずるに至つたといふが、これが今の新内や常盤津の大根だと考へれば、豊後が喉にも、文句にも、無論棄つべからざる旨味はあつたに違ひない。宮古路にして今在らば、馬骨なども一わたりは聽聞仕りたいものと存する。さりながら、如何に中學唱歌的駄音楽や、西洋直輸入の借用音楽のみが跋扈する世の中だとて、それを攘はんための救世軍の總督に、まさか豊後縁を据ゑうとも存せぬ哩。

苟も國家の爲を思ふ以上は、彼れを採用するよりは、まだしも長唄か、富本か、一中か、さなくば心長く新國樂の制定をと心掛くべき筈である。警句家、修辭家として幾何かの取得があればとて、偏僻邪侈なニイチェの如き思想家を此の過渡時代の嚮導師、人格修養の力綱、「理想的天地を建設する」土臺石にしようなどは、所詮本氣とは思はれぬが、さりとして浮氣沙汰なら、彌、以て怪しからんことだ。

天才

思索家氣を根から離れた詩人も詩人、寧ろ文章家、警句家、修辭家といふ資格のニイチェ大師さまを取調べて見たが、不信心の俗眼のせい、有難い御功德が一向に見えなんだ。此の上は殘る問題「天才」の魔力たつた一つだ。

デニヤスといふ英語なら、必ずしも美稱でないが、「天才」と言へば、「天道」、「天使」、「天堂」、「天皇」、「天來」など、耳慣れてゐるゆるゑ、「自然の才」、「生具の智」などの義たるよりは寧ろ「人間以上の先天智を具へた」といふ義に解せられる傾きがある。尠くとも天才と評せられた當人は、さう解して自ら媚びんとする傾きがあるから、此の語の濫授者はちと反省して貰ひたいものだ。

通例、世間の分析に由ると、天才ヂニヤスの原素は概ね下の如くだ。曰はく「空想」、曰はく「缺常識」、曰はく「多感多情」、曰はく「狂熱」、曰はく「常規を以て律すべからず」、曰はく「不覇放縱」、曰はく「自尊自信」、曰はく「爛眼」、曰はく「直覺」、曰はく「英才」と。之れを大俗的に世話に碎けば、氣隨氣儘の、移り氣の、氣短の、癩癩持の、情に脆い、分別力に乏しい、物事に耽溺する、自分天狗の、剛情張の、負惜みの強い、名聞氣の盛んな、随つて羞耻はにかみがちの、矯飾がちの、取越苦勞の、嫉妬深い、邪推深い、疑ひ深い、臆病な、併しまた名聞の爲には往々にして前後を忘れ、利害をも忘れ、父母をも自分をも忘れるものある、が、其の氣が脱ぬると（若しくは我が好かぬことに對しては）兎角懶惰に流れ易い、物ぐさだちの、放縱やうじやうの、自墮落肌おちおちの、自制力（克己力）の薄弱な、同情は深いが一切自分定規の、眞の意味の忠恕おもひやりは根から届かぬ、理論では兎も角も、實際的には人情知らず、世間知らずの、或時は間常識以下即ち痴ちか、或時は間常識以外即ち狂きちん、一言に蔽へば神經質乃至多血神經質だちの伶俐な、機敏な、但し育ててこねた我儘わがままツ子といふのがそれだ。これならば甘やかして育てた天才は皆「天才」となる譯だ。近松が世話物中の男主人公は悉く天才だちだと言はねばならぬ。それが果して「天才」の眞定義であらうか？

所謂ヂニヤスに右様の性癖の附帶することは事實と思はれるが、それは無論不健全な側面で、其の衰むべき側面では無い。寧ろ「天才」の弱點又は病癖など、名づくべきだ。又は“spoiled genius”

と呼ぶべきものだ。

天才の本領は概して前解のとは直反對だ。蓋し常智、凡才は一を教へられて漸く其の一を知り、名實並び臻り、情理兼ね備はるに及んで漸く、其の事物を會得し、修身處世の道に至つては幾度も同じ過失を反覆して尙ほ且つ悟ると遅い習ひだが、眞の意味で謂ふ天才は、一を聞見して若しくは一たび教へられて六七を知るの智を具へ、或ひは直覺に、或ひは類推るいすいに秀で、或ひは名に縁ゆかりりて實を自得し、或ひは情の門より一躍して理の堂に昇るの力を具し、必ずしも他の指導を俟たずして發明奮勵し、他に欺かれず、又自ら欺かず、流俗の奴とならず、時勢の玩具とならず、自立自恃、自尊自信、自强自責して身を終るまで休息退轉せざる者らしい。随つて其の必具の條件は先づ下の如くであらう。曰はく「自ら欺かざる誠實」、曰はく「廣く深き同情」、曰はく「無際限の向上心及びそれを嚮導すべき大想像力」、曰はく「不屈不撓の意志、不退轉、不休息の努力」、曰はく「燃ゆるが如き情熱及びそれを制する克己力」、曰はく「自尊及びそれと表裏する没名聞心、没俗氣、没俗氣」。而して彼の小才智及び手先の器用などは却つて其の本領ではないらしい。

常識以下は痴ちか、常識以外は狂きちんだ。天才は是非とも常識上プラスサムシツ或物でなくては道理に叶はぬ。「自惚」「薄志」「懶惰」「虚偽」「術氣」「財慾」、これらは馬骨程度の常識でさへ心附く愚痴、弱點だ。それをすら悟り得ぬ手合を天才などはかたはら痛い。天才だちかも知れぬが、それらは出來

そこねた天才だ。以後は宜しく呼改ることだ。例へば「似而非天才」、「賈天才」、「疵天才」、「屑天才」、「汚天才」、「狂天才」、「病天才」、「偏天才」、「歪天才」、「畸天才」、「變天才」……(いつそのこと「變人」かな) さア、く、選取つたく！

「己れを知れ」を最大の處世訓と崇めた希臘人は國民中の天才肌、其のうちの眞の代表者がソクラテスと、斯ういふ標準で照鑑すれば、俗に所謂天才は天才には相違ないが、十中九までは疵入だと言はねばならぬ。本論に引合に出したうちですらルッソー、ショーペンハウエル、バイロン、シェレー、キーツ、コールリッジ……いづれも疵物づくし。眞に枚擧に遑がない。

之を要れするに「天才」といふ總名は「生具の才」といふと同義で、必ずしも美稱では無いのだが、天才を人物として推尊せんとすれば、千百中、たか々一二を剩すに過ぎぬ稀有の場合に就いて其の當對となる人を求めねばならぬ。然るに世の批評家連漫然として天才の稱を美稱らしく濫用して古今の詩文を論じ、若しくは放僻邪侈の振舞をば天才の特權でやもあるかの如くに曲解し、強護し、暗に無知無識の少年輩が自惚心を悦ばせ、間接には放逸無頼を勧め、薄志弱行を教唆するに至る。正に是れ隠然として「人の子を賊するもの」だ。不埒至極、無責任至極ではないか？

世間或ひは天才の自信を自惚と混する者あるが、自信と自惚とは龍と蜥蜴ほど違ふ。自惚は「自欺」だ。即ち天才ならざる證據ともいふべきだ。天才の自尊は其の最も低き場合とても、彼の俗才

子の如くに他さへ知らねばかまはぬといふ虚偽、虚榮、虚飾の卑しさに安んずるに忍びぬだけには高い。彼れは他は知らず天地は知らざるも我が心の知りて嘲るを堪ふことが出来ぬのである。それが虚偽を絶ち、街氣を絶ち、名聞氣を絶ち、あらゆる虚榮を絶つ所以、又自強煩悶して之れを断除し盡さんと奮闘し、苦戦し力行する以所である。肉體上(コスメチック!)服飾上(金石絹布!)物質上(臺榭庭園!)の虚飾はいふまでもない、精神上的虚飾(官爵、學位、偽徳!)とても一たび心附いては意識しつゝ、施すには忍びぬ。断ち盡し排し盡すまでは身が拷問臺に掛かつた如く思ふ。況んや學を街ひ才を街ひ、劣輩味俗を瞞着して得々たるが如きは無論天才の屑しとせぬ所であらう。按ふに、眞天才の、一面は自尊倨傲なるが如くにして、一面は甚しく謙遜で且つ温順なは、多分右の理に基くのであらう。

彼れは天才だと他にも言はれ、我れも自ら許して、不羈矯激、放肆蕩迭、薄志弱行、是れ即ち天才たるの證據だなど得々たる手合は、其の眞に天才肌なるか否かは別問題として、其の自卑の醜たへられたものでない。人事ながら慚愧に堪へずして涙が落ちる。

ニイチエが *spotted genius* 若しくは不健全なる天才たることは馬骨も認める。但しそれが爲に氣の毒なと思ふの情即ち惻隱怵惕の涙が浮ぶ氣味はあれど、到底隨喜渴仰の念は起らぬ。彼れが病的思索の悲劇に感じて多少消極的には悟る所がないでもないが、積極的には精神的、生活とやらがさつば

り豊富になつたとも存じ申さぬ。尤もそこが我々凡俗の情ない所かも知れぬ。

ニイチエ 歡迎の眞理由

持前の馬鹿正直から先方の言論を眞實に受けて、一々念入りに取調べたが、案外であつた。神怪不思議の魔術家でもあるかのやうに閑雅な聲が褒め立てたフリードリッヒ・ニイチエはつまり幾多瑕疵だらけの天才即ち消極的天才、畸天才、消極格の人物で、蜘蛛男や大女などと軒を並べて、あれ二十世紀の縁日見世物になる位ゐるが落ちたと悟つた。如何になんでもこんな香具師の金箱のやうな者を今の俊才連が崇拜しよう筈がない。ニイチエくと吹聴するは、畢竟は萎靡沈澱せる文壇の大惰眠を破らんとすの善巧方便、老婆心切、ぐいと悪く勘ぐつたところが、洋行歸りの恫喝の格で、ほんの一時の浮氣沙汰、人騒せの悪戯であらう。それを眞正面から偽批判の分析三昧はい、阿呆、馬鹿正直も程にしたがよい、とツイ昨日の朝、さる友人が忠告してくれた。

いかさまな、さうもあらうか？「遙に天の一方から吹來つた蓬然たる長風」だの、「藝術家、文士の身方」、「有力なる援軍」だの、「人格修養」の力綱、「理想的天地」建設の地盤だのと、さもく生眞面目らしく、有難さうに言ふから、本氣かと思つたが、さては英雄人を欺くの格であつたか？成る程、當今一二人といふ俊才たちが、何の、ニイチエづれに勵まされるの、誨へられるのなど言

ふ不見識などがあらうぞ。如何なことを論じたやら、よう調べて見ぬうちから、傳聞で賛成し、隨喜し、若しくは風がもてくる陣太鼓の遠音二つ三つ聞くや否や降参するなどの輕薄は、彼の堂々たる學風上から見てもあるまじき筈であつたを、我れながら正直すぎて鈍しいことをしてのけた。

さやうく。如何に「文藝が蒙りたる侮蔑」に對する吊合戦がしたいからとて、身方の兵が如何に「烏合の衆」だからとて、又其の腕力が如何に「甚だ力なき者」だからとて、氣の狂れた畸天才消極どのなぞを「猛烈なる指揮者」と崇めたて、「號令之れより新なるべく、紀律之れより嚴なるべし」などと雀躍するには及ばぬとだ。如何に末法の世の中だとて、片山里の淫詞、邪教ぢやあるまいし、何も氣のふれた山伏どのを活佛ごかしに崇めたてるにも及ぶまいて。

畢竟は俊才達の思ひつき、ニイチエ坊の楯蔭で勝手に大氣焰を吐かうが爲だ。若い衆が發起の時祭と同格で、飲みたさ、踊りたさが主で、知らぬが佛の神様はほんのダシ、遊びがすめば、お精靈さま同様、責任も何もかも一切しよはせて西の海へサラリ流さうの寸法なら、尙ほ以て妙案の！とは言つて見たもの、ニイチエ歡迎の眞理由は、而も最も肝腎の根本の理由が今一つある。何だい？

ニイチエのニの字も渡らぬさきから今の多數の老弱、男女、貴賤、上下は既に實に於てニイチエ宗の大的歸依者、信者、實踐家であつたのだ！ニイチエの學説は、只その實に名義を與へ、是認

を興へたばかりだ!

それにつけても爰に不思議を止めたはモルモン宗さの。同じく實に於て歸依されてゐながら、根から歓迎されなんだ。宗旨にも運と不運とがあるか? 但しは初手に學者へ傳道せなんだのが手落か?

シヤギリ

やれ、長いことお邪魔さま致しました。ニイチ。歓迎の眞理由は俊才たちのほんの一時の悪戯と事きまれば、先づ安心でござるによつて、一先づ退座いたしませうが、序ゆるに一言申添へたいは、今の諸雑誌、新聞紙に筆執らるゝ英才方、學者方へお頼み。馬骨なども弟があり、甥があり、子供らのござつて、或ひは高等小學、或ひは中學の生意氣盛り、始末におへませぬ。親のいふとはきかず、師匠のいふとは忘れませんが、皆さまがたの御名文だけは諸誦にまでいたしましての信仰、熟字、成語、譯語、句格、語格、論旨、取別けて修身處世の訓など、いづれも諸君のお庇で、習ひおぼえますることで、有難い仕合せにぞんじます。此の上とも何分の御指導、御感化のほどを單へに願ひあげます。

近ごろに至りまして、宅の小僧共薄べらな雑誌やうのものをこしらへ、頻りに兄弟喧嘩、親戚喧

嘩の悪口などを書き散らし、時としては親共、師匠の蔭言までも書綴つて、近隣を見せあるきまするによつて、さることはすまじき事と誠めますれば、イヤこれは侃々諤々の直言だの、黨同伐異の弊風を破るのだぞ申して要領を得ませぬ。イヤ親身の間の直言ならば、先づ内々で面と向つて言やれ、眞先に世間に吹聴すべきでないぞ。ましてや人前で人身攻撃までしておきながら恬然として交際し、剩へ物ほしうなつて媚へるなどは卑劣な所爲だぞと誨へましても、「それでもこれは先生がたが書く雑誌の眞似だ」などと親の手には乗りませぬ。よもやとは存じまするが、さるお慣例もござることか、或ひはそれが取りも直さず徒然のお手すさび、ほんの洒落弾きのニイチ。節の一曲でいもござりまするか、伺ひおきまするでござりまする。さよなら!

『帝國文學』記者に與へて再びニイチエを論ずるの書

竹風君、『帝國文學』第十二を手にすることを得て君が辨駁の文を讀みぬ。予は君が辨駁の態度の、彼の願みて他を言ふ輩の所爲に似ずして、流石に其の師ニイチエが唯一の善美處たる眞摯と正直とを體踐せられたる如き概あるを悦ぶ。又君がニイチエヤニズムの鼓吹が、一時の客氣私情に出でずして寧ろ學風の刷新を企圖せんとするに在りし由を諒とするを得て、君と其の師と、ニイチエヤニズムの最醜惡處に於て相背馳せるが如き趣きあるを悦ぶ。

「馬骨人言」に憤慨して君はニイチエの評傳と『ザラツストラ』の翻譯に従事すとや？ そは近ごろ面白き方法なり。君もし著譯に據りてニイチエが本領を顯揚せば、予もまた一冊子を著して間接もしくは直接に彼れが邪説を折伏すべき自家の倫理見を開陳せん。按ふに、かくの如きは、彼の枝葉の論、語義の争ひ、及び人身攻撃に流れ易き雜誌論客ボレミックの所爲に比して、讀者を益すると比較的に多かるべく、且つ其の論難の私情にあらざるを證するに便宜ならん。予は君が企てを賛成す。併しながら君が「馬骨人言」に對する此のたびの辨駁は悉皆正鵠を外れたり。其のうち君と予と其の立脚地を殊にせるが爲に生じたる異議の如きはもとより止むを得ざる所なれど、誤解臆斷に基けるも

のと牽強附會に類するものとは、予に取りては正當防禦のため、君にとりても後の立論に用あるべければ、こゝに一わたり辯析せんと無要の業にあらざるべし。中には折返し答駁辯議せられなば、予又直ちに答辯すべきものもあるべきなり。君は予が

匿名の所由

を訝りて、疑ふらくは責任を避けんための卑怯の心ならんと臆斷せり。あたらず。凡そ匿名キチヂの所由は、君が擧げたる三ヶ條の外に向ほいくらもあり得べき筈なり。君が所由キチヂと見做せるものは皆利己的動機に出づ。ニイチエヤンの見解としてはさもあるべし、さりとて之れが爲に他の利己的匿名を否認せんこと、恐らくは沒論理ならん。但し其の理は今こゝに説くの要なし、諷刺嘲諷の體を用ひたりし理由と共に他日他處にて述ぶること、せん。只一言せんに、予は本名を公にするの必要を見ざりしなり。「無道德主義の鼓吹」といふ無形の敵、漠然たる敵に對しては名を顯すの責任を覺えざりしなり。我れこそ其の鼓吹者と名宣りいづる者あるに至れば署名して論を交へんと勿論なり。君は予が言に憤激せりといふ。君は予が「馬骨人言」を草するに至りし動機を知れりや？ 憤激は概ね爲我的なり。予が動機は單にそれのみにあらざりしなり。輕佻至極なりと予が信じたる

無道德主義の鼓吹

に對したる時の予が感想は、憤激と云はんよりは寧ろ公怒義憤ともいふべかりき。はじめはニイチエヤニズム及び其の輕佻なる推獎をば寧ろ人道の輕薄なる敵として賤みたり。やがて其の喧傳せられ、推尊せらるゝを見聞するに及んでは、我が國民の矜持を侮蔑せられたるが如く感じて憤り、其の倫理見の恰も予が平生の倫理見と直反對なるを覺りては、さらぬだに混亂せる我が德育界の一の妨礙と做して憤激せり。文致の皮相にのみ拘泥して予が志の眞摯なるを疑ふ勿れ。ニイチエヤニズムにして爲我一邊主義の替名ならんか、予が彼れと不俱戴天を盟へること決して今日に始まれるにあらざるなり。予不肖なれど事に教育に従ふこと十八年、中に就いて幼弱の訓育に關係せる此の五年間は、聊か倫理研究に心を傾け、かくて定め得たる德育の立脚地は、奇怪にもニイチエが意見と其の形式に於ては著しく相類似し或ひは殆ど吻合し、而も其の内容に於ては殆ど全く相背けり。彼れは常套を排し、形式を排し、文藝修養を鼓吹せり。彼れは突飛急激、我れは漸進、其の手段こそ異なりたれ、彼れの口に唱ふる所は予が此の年頃不完全は勿論ながら多少實踐せる所なりき。彼れは形而上論を棄て、理智を棄て、ひとへに生欲に安立せんとし、予は純粹哲學、認識論を棄てざれども、之れを以て實踐倫理と峻別し得べきもの、又は遙に後に來るべきものと假に定めて「性」

を德育の發途點と定めたり。彼れは所謂宗教を抛ち、哲學を抛ち、科學をも斥けにき。予も初、德育に關する限りは、哲學を後にし、宗教を後にし、科學をも只手段として採用しぬ。彼れは其の倫理見に於ては「馬骨人言」に論じたる如く、あくまでも常識的なり。自分勝手を理想とし、氣隨氣儘を希望とする、かばかり赤裸々の常識的倫理はなし。否、全然たる沒倫理なり。予も德育の第一歩を、純ら常識より歸納して爲我一邊と不自制（不克己）とを根本の惡と定めたり。（之れを以て善の極とするニイチエの説と如何に直反對なるかを見よ。）按ふに世の道學家の倫理見は、いづれもニイチエのに反對なるべし、而も疑ふらくは、「形式」上に於て相類同すること予の如くなると共に、其の「内容」の直反對なること予の如きは稀なるべし。之れを要するに

予とニイチエと

は其の形式のみ相類して其の内容相反せり。同じく性と言ふ、彼れはホッブスらと共に一元に立脚し、予は斷として二元に立脚す。同じく本性の満足を説く、彼れのは帝政時代の羅馬人が野性的常識に立脚せる利己的快樂主義なり。予のは寧ろ希臘的圓性主義もし、は儒家の率性主義、近くば若干の解を加へなば、彼の自我圓現主義にも相通ふ所ありといはん。彼れのは遂慾、我れのは自慊。

自我の内容は同じからず。是等の詳細はもとよりこゝに説き盡すべくもあらねど、予と彼れと粗形式を同うして其の内容を水火の如く相殊ことにする由を知られなば、今の徳教の頹廢ジャスチフヘーションに是認ジャスチフヘーションを與ふるに外ならざる彼れが邪説の鼓吹弘布は、或ひは予が主義と混同せらるゝが爲に、或ひは予が教訓と衝突するが爲に、取りも直さず予が努力の妨礙ハカシメたること、局外者にも察知せらるべし。否、彼れが放僻の説は、明かに徳育界全體の障礙なり。其の説が單純粗鹵にして俚耳に入り易き故に危険なり。惡時代精神の權化なるが故に危険なり。是れ予の「馬骨人言」を草するに至りし主因なり。其の體を諷刺に假りしは、要するに其の鼓吹者中に甚だ憎惡すべきものを見ざりし爲のみ。

按ふに無道德及び無道德主義と戦はんは生を人間に享けたる者の天職にはあらざるか？ 況んや假初かりぞめにも任に教育に當るものをや。予は文壇に上りてこのかた未だ曾てかゝる好題目に逢着せざりき。かゝる研鑽に力を注がんと寔に我が一期の本望なり。外國のニイチェヤン身を下して我れと論を闘はさんか、我れは之れを光榮とせん。彼方のニイチェ論者に翻譯して汝の暴論を見する勇あるかといふ君が疑問の旨は善くは解せず、諷刺嘲諷の筆致までをも全くさながらに寫されんには、異存あるべうもあらざるなり。

君は予が論を罵つて、明治はじまりて以來の最惡語と做せり。或ひは然らん。予はもと嘲罵を嗜む者にあらず。よしや多少の誘魔サマテイション來るも之れに打克たんと力むるものなり。予にして自反と自責

とを廢して我が性癖の狂ふまゝに任せんか、けふまでに嘲罵すべかりしもの、或ひは一二のみにあらざりしならん。それは兎もあれ、予は君等の所謂ニイチェヤニズムに於て、圖らずも眞に

痛罵に相當する邪説

を得たり。夫れ古來非義を行ふものは多く、邪説を唱ふる者は多し。而も前者の大概は正義を口にし、後者の大多數も眞理を口にせり。未だみづから無道德を標榜せしものはなかりき。白晝公々然として非義を鼓吹し、剩へ歡迎せられ、推重せられ、崇拜せられんとするに至りしはニイチェを以て初めとなす。「偽善は惡徳が美德に對して納むる税なり」とはいみじくも言ひたる哉。偽善は赤裸々の惡徳よりも有害の度に於ては寧ろ優ると雖も、偽善の世の中に行はるゝは道義の尊嚴の尙ほ流石に存するの證なり。形式ばかりなる貢をだに不徳の獻ぜざる時とならんか、道義の制裁絶無の證なり。淑慝無差別の證なり。

偽善もとより惡むべしと雖も、此の意味に於て寛假すべし。天真爛漫の公惡は、其の正直憐むべきに似たれど、其の道義を侮辱する爲の故に嚴乎たる制裁を下さるべからざるなり。かくいふはニイチェ其の人をば空前の惡漢といふ義にはあらず。彼れは只思想の自由、言論の自由に浴して自家の所信を披瀝せしに過ぎざるべし。故に彼れが著にして眞に散文詩に過ぎざらば、其の本意の如

何に係らず、吾人の之れを見る、彼のマンドギルが『蜂物語』、若しくはスキフトの『ヤフー談』、若しくはバイロンの『ドン・デュアン』若しくは近世のデカデントの詩歌及び彼の小説の寫實の邪路に入れるものを見ると敢て異なるとなかるべきなり。其の作に寓意ありや、慨世の餘に成れりや、若しくは言行一致せりやなど、必ずしも問ふを要せざるべし。或ひは散文詩にとゞまらずして、歴たる論議の體を成さんか、言論は自由なり、思想は自由なり、之れを發表するに於て何の不可あらん。其の惡感化の現證擧がらざる以上は、廿世紀の今日に於て彼のマンチエスター^{マンチエスター}法官の所爲を學ばんは輕佻なるべし。只夫れ其の放僻橫邪の説が、一知半解の間に紹介せられ、推奨せられ、外國の天才、豫言者、大詩人などいふ昧者おどしの尊號を戴いて盲崇せられ、德育地を拂ひ、思想混亂せる社會に流傳し、世の無邪氣なる無識者には惡しき先入の見を與へ、既に墮落せる青年輩には其の非を回護するの口實を供するに及びては、之れが妄を辯析し、之れが非を鳴らし、筆誅を元兇に加へんと止むべからざる勢ひならずや？ 夫れ極端なる世界主義を唱道するは國家主義の敵ならん。君主國の臣民にして共和政治を鼓吹するは君主政治の賊ならん。神を無視せんか、基督教徒は之れを異端となさん。涅槃成佛を無視せんか、佛教徒は之れを邪道となさん。しかれども局外者より之れを見れば、彼れ一理、此れ一理、いまだ是等のものを以て人道に對する絶對の敵なりとは斷すべからざるなり。然るに無思慮、無分別、無見識の幼弱の目に映するニイチュヤニズムに至りて

は純然たる無道德主義、絶對の利己主義也。義務を無視し、良心を無視し、不自制を獎勵し、忠恕側隱を排斥し、禮儀を破り、師父を侮るを鼓吹す。是れ豈に教育の賊ならずや？ 幼弱は當來の元氣なり、其の元氣を腐蝕するもの之れを社會のバチルスとせずして何物をか社會のバチルスとせん？ 苟も德育に従事せんもの、之れと戰はずして何者と戰はん？ ミルトンは高雅の紳士なり、然れども共和政治の回護の爲には敵者サルマシウスを痛罵するにあらゆる惡語を放ちたりき。誰れか法華宗祖を聖者にあらずといふ。而も其の所謂邪宗を罵るの語の何ぞさしも激烈なりしぞ！ 蓋し彼等の眼中邪道異端あつて個人無きなり。かゝる例に比擬せんは不倫ならんが、予がニイチュヤニズムに對するの心的態度將た之れと相似たり。眼中「無道德主義の鼓吹」有つて個人なし。痛罵の迸るを敢て制めざりし所以なり。

然り、「馬骨人言」は或ひは明治はじまりて以來の最惡語にもあらん、併しながら一々理由を具し、論證を具しての惡語なり、漫罵にはあらざりしなり。

よしや予が言は惡語なるが爲に、多少予が品格に累すとせんも、ニイチュの崇拜者たる君の口は、かりそめにもかゝることを口にするの權利なきなり。君は其の師が其の公々然たる點について言へば、スキフト、ブルテールの徒も及ぶ能はざる惡語家たるを忘れたるか？ 彼れが口ぎたなくカント、ルーター、キリスト、ソクラテス、ダーキンらを嘲罵し、貶辱せしことを忘れたるか？ ニイ

チエは羅馬滅亡以來の最悪語家にして、而も無責任不舉證の悪語家なりしなり。倫理見に於て師と相背き、學風の刷新を企圖せらるゝは悦ぶべし、師が唯一の得色たる痛罵其の物を非難しつゝ、ニエチエ宗義を宣傳せんは聊かしくき仕事ならずや？

さて、君と予と、論を將來に闘はさんが爲には互ひに的を見誤りて無要の齟齬に無要の時間と勞力を費すを避けん爲に、豫め嚴重に相約し置くべきとあり。他なし、論争の中心點を變移すること勿らんこと、主題の本末を顛倒すること勿らんこと、是れなり。何をか「論争の中心點」と謂ふぞ？ 曰はく、ニエチエニズムの是非是れなり。何をか「主題の本末」と謂ふぞ？ 曰はく、時代精神とニエチエニズムとの關係に關する論は「本論」にして、ニエチエ其の人の才分、品性等に關する論は「末論」なり。

本論

を別ちて須らく四段となすべし。第一は、現時代精神との關係上より見たるニエチエニズムの價值。e. 彼れの所説は陳腐なりや、創新なりや？ 反動の健兒なりや、循俗の驕兒なりや？ 爛眼の批評家なりや、盲目の獨斷家なりや？ 新時代精神の豫言者なりや？ 惡時代精神の權化なりや？ 彼れの散文詩及び倫理論文は眞面目の著作なりや？ 將た慨世の餘に成れる反語なりや？ 即ち一

種變則の諷刺文なりや等、是れなり。

第二は、倫理主義の上より見たるニエチエニズムの價值。e. 彼れの所説は眞理なりや、謬妄なりや？ 健全なりや、不健全なりや？ 若し半眞、半妄、半健、半不健なりとせば、其の健、眞なりとせらるゝ部分は如何ばかりにして、其の健、眞なりとせらるゝ理由は如何？ 竹風君よ、此の點は君らが最も重く責任を負うて闡明せざるべからざる點なることを記憶せよ。

第三は、我が思想界、德育界との關係上より見たるニエチエニズムの價值。e. 彼れの説は有益なりや、有害なりや？ 有益なりとせば、如何なる廉々をば如何なる理由によりて裨益すと做すぞ？ 凡そ幼弱者には隱微幽玄なる旨趣は了解せられがたきもの、若しくは（老莊などの誤解せられ易きが如く）誤解せられ易きが習ひなりとすれば、假に彼れの説を反語もしくは諷刺とするも、表面はあくまでも道德的虛無主義なり、之れを我が無定見の幼弱者に讀ましめて有益又は無害といふ其の理如何等、是れなり。此の點もまた君等鼓吹者が辯明の責任を有すること多大なりとす。

第四は（竹風君よ、こは君と論戦を開くに當りて新に加はりたる一題目なり）君とニエチエニズムとの關係是れなり。e. 君はそも如何なる廉々に就いて最も多くニエチエを推奨せんとするぞ？ 『帝國文學』の六、七、八、諸號に見えたる君が意見と、高山氏が美的生活論を賛美したる時の君の意見と、天溪氏らに答へたる時の君の意見と、こたび予に答へられたる駁文の意と、彼此

相並べて照檢すれば頗る奇怪なる疑惑生ず。否、餘りに雜然として、いづれが君の本旨なるかを判知するに困む。蓋し『帝國文學』の論説欄にはじめてニイチエを紹介せし君は多少ニイチエニズムの極端なるを認めながらも、漠然其の豪放と偉大とを頌して其の人品を追慕せるが如き概あり。然るに後に雜報欄に顯はれたる君は、痛く高山氏の本能満足説に響應して、甚しくニイチエの遂慾主義に隨喜し、純乎たる無道德主義者たるが如し。而して其の同じ傾向は天溪氏らに對するに及びては更に甚しきを加へ、過日の教育會に於ける放言に至りて其の極に達したるもの、如し。反科學主義をすらニイチエそのまゝに奉體せらるゝかの如き口吻も見えたり。(このあたりの證左は君の答辯次第にて、一々に提出せんと、いと容易し。)知らずいづれが君の本旨なるか? いかばかり君はニイチエなるか? 予れ甚だ判じ惑ふ。ニイチエと同意見の廉々だけを簡に箇條書にして『帝國文學』の紙上に示せ。こは君が著譯以前に於て必要なり。單に予に對してのみならず、廣く社會に對して君が必要の義務たるべし。君にして之れをなさざらんか、君を目して純乎たるニイチエと呼ぶ者あらんも、君咎むるの權理なからん。予すら判じ惑ふ、幼弱者が君が本旨を錯誤し顛倒せんは、有り得べき危険ならずや?

末論

もまた分つて三段となし得べし。第一は、純乎なる詩人、i.e. 現時代精神とは利害相關すること甚だ微薄なる純空想家、若しくは警句家、修辭家としてのニイチエ其の人の價值論なり。くはしくいへば、彼れは如何なるたぐひの詩人なるか? 純客觀か、主觀か? 自然詩人か、山水風露を詠する詩人か? キーツ、ロゼツチ、コールリツヂなどの如く、荒唐なる、若しくは幽艶なる、若しくは虚靈なる、神怪なるローマンズの別天地を叙寫するの詩人か? 若しくは單に節奏に妙なるか、措辭造句に巧なるか等、是れなり。これらは「馬骨人言」の既に一應は辯析せし所なり。

第二は、個人としてのニイチエの價值論なり。i.e. 假に彼れの倫理見は謬妄不健全と定まりたりとするも、彼れは個人としては善良なる國民、眞摯誠實なる學者、多感多情の詩人、文章家にあらざるか、否か? よしや彼れは種々の遺傳、境遇、乃至教育、修養等の不妙なる影響によりて晩年は不健全に流れたりとするも、其の一生を貫いて渝らざりし淑徳は眞摯と正直と勇敢なりといふ。果して然りや、否や? 彼れの大胆は果してさばかり稱美すべき者なりや、否や等、是れなり。これら將た「馬骨人言」の既に一わたりは辯析せし所なれど、尙ほ念の爲に掲げおくなり。此の點は彼れの倫理見を慨世の餘に成れりなど回護せんとする者に取りては必要なるべし。細かに明證を擧げて、尠くとも「馬骨人言」をば破せらるべきなり。

第三は、天才としてのニイチエの價值論なり。i.e. 思想の眞妄、言行の健不健、社會に於ける影

響の善悪は度外として、單に才分の價值を論ぜば如何？ こも「馬骨人言」の既に言へるを先づ一々に破し來らざるべからず。君がこたびの答駁の如きは漫罵のみ。

竹風君よ、重ねて君に約束す、論の本末を顛倒する勿れ。本論を決して後に末論に移ることを忘る、勿れ。予が「馬骨人言」を草せし本意は、あくまでも無道德主義者（と言はぬまでも遂慾主義者）としてのニイチエの推獎と崇拜を及び其の主義其の物を攻撃するに在りき。換言すれば其の「公然たる無道德主義」「絶対利己主義」「少數暴横是認説」と世道人心との關係問題なりき。彼れを個人として論ぜしは彼れが眞面目の倫理見を無證據にして、「諷刺」なりなど辯ずるものありしが爲のみ。彼れが勇氣を論ぜしは、其の説の眞妄、是非を度外にして、其の壯を説き、其の豪をたへ、漫然彼れを巨人視するものありしが爲のみ。又彼れを詩人、修辭家、天才などの上より論じたるは、彼れの謬妄なる倫理見、教育主義の有害なるを認め得たる上に於て、尙ほ十分に公平ならんが爲に、彼れが詩人、作家としての天分の美を以てして或ひは前の失を償ふに足らざるや否や、之れを明かにせんが爲の老婆心切のみ。予は君が心を虚うして「馬骨人言」を再讀せんことを望む。「天才論」「詩人論」に對しても予は決して論戰を辭せず、只論戰の正當順序として、須からく其の別途となし、後段となすべきを言ふのみ。君よ、必ず先づ根本問題を決し來れよ。然らざれば、名譽ならざる批判或ひは君の頭上に下らんことを恐る。

かくいは、君ら或ひは辯ぜん、予らは思想家としてニイチエを推獎せしにあらず、只詩人的天才としてなり。故に其の倫理見、教育主義の論は寧ろ末にして其の才分論こそ本なれ、と。

げにや、君は一處に於て明かに彼れの思想家にあらざることを斷れり。然れども又他處に於ては「輿論の聲に反抗し時代の精神に大痛棒を與へたる者」と彼れを稱美し、又一轉しては「ニイチエが思想傾向は或ひは時代精神なりしならん。然れども其の精神を道破せるものは彼れにあらずや」と激賞せり。いづれが君の本旨なるにや？ 疑ふらくは、論ずる君みづからも今は之れを判するに惑はんか？ それは兎もあれ、若し君らにしてニイチエは思想家にあらずと辯じ來らば、予は先づ君らに向つて其の使用語の明解を需むることの止むを得ざるを感ずるに至らん。君らが所謂

「思想家」の定義は如何？

「詩人」の定義は如何？ 按ふに「思想家」にして哲學者、科學者の謂ひならんか、ニイチエは「思想家」にあらずして寧ろ「詩人」なるべし。「詩人」にして純乎たる客觀的描寫家、若しくは些も時代精神とは相交渉する所なき純空想の諷詠家などの義ならんか、ニイチエは純然たる「詩人」と言はんよりは寧ろ談理家にして批評家なるべし。「新エロイズ」や「エミール」や、一種の散文詩と言はん言はん、されば「思想家」を哲學家と同意義とすれば、ルッソーは「思想家」にはあら

で「詩人」ならん、而も人の彼れを是非するや未だ曾て一大思想家を以てせずんばあらず。何が故ぞや？ 其の功も過も一に其の時代精神と相交渉する點に存すればなり。君らが本尊の境遇も亦た明かに之れと酷似する所のあるにあらずや？

假に彼れは純空想の詩人にして、彼の「轉生論」中に見えたる、君の所謂「宗教的、詩歌的空想」にのみ本領を有すとせんか、君らが激賞し隨喜して時代精神の豫言者もしくは道破者と做す所以の意解すべからず。君が其のはじめ『帝國文學』の論説欄にて紹介したるは悉く彼れが思索の大綱にして、之れに伴ふ君が批評解釋は皆其の思想の（絶對的にあらざるも）讚歎に外ならざりしにあらずや？ しかも尙ほ君は彼れ

ニイチエを詩人、空想家として

のみ推獎せりと言ふや？ 若し夫れ世の批評家が所謂眞詩人を推獎し其の價值を論ずるとき態度と口吻とは古往今來かくの如くにはあらざるなり。またかくの如くにはあるべからざるなり。

君は予が「轉生論」、「超人説」に論じ及ばざるを怪しめり。「超人説」は彼れをして其の理想の人物を説かしたる條下に略示したりき。何の異しむとあらん？ 予は現世間に惡感化、惡影響ありと認めたる點に關してこそ彼れを論じたれ、純空想家としての彼れに對しては殆ど些の用も

無きなり。既に時代精神と相交渉する所なし、予豈に空想の自由を咎めんや？ 蓋し「轉生論」に詩歌としての別價值あらば、そを解釋し、批判し、若しくは反譯せんは、君ら追隨者の分なるべし。予將た其の評と其の譯とを明治文壇の珍とせん。未だ知らず、純空想にして、些も現世間と相渉らず、而もロゼツチの、如く幽艶なるにもあらず、キーツの、如く妖艶なるにもあらず、コールリッヂの、如く玄怪なるにもあらざるたぐひの純空想にして、剩へ自然を描いて靈妙なるにもあらず、情懷を叙して無邪なるにもあらぬたぐひの純空想にして、君らの推獎措かざるはそもく如何さまの空想なるにや？ 予は君が深切なる説明を聽かんことを俟つ心切なり。予も嘗て聊か詩文の研鑽に心を傾けし覚えあり。君が予に語る、流石に牛に對して琴を彈するが如くにはあらず。

否々々

かゝる論辯は全く無要なり。ニイチエが我が文壇に紹介せられしは悉く皆一種の思想家としてなり、大膽なる論者としてなり。高山氏の「文明批評家論」之れを證し、君が諸論も亦た之れを證す。否々、方今歐米に於てニイチエを是非褒貶する、將た主として其の倫理見にあるや確實なり。ニイチエニズムといふ名稱其の物が明かに其の一思潮たることを現證しつゝあるにあらずや？ げに彼れが一面に詩人たるの資はあらん、而も誰れか彼れを推してゲーテ、シルレルらと伍せしめんと

せし？ あらば、それは崇拜者の顛倒見ならんのみ。彼れ或ひは詩人ならん、但し一種の思想の表白者としての詩人たり、其の特別なる倫理見を抛ち去らば、彼れが『ザラツストラ』果して幾何の價値をか剰すべき？ 思想家たるの特質を削り去りて後の彼れが詩美の評といふもの、あはれ、君が自在舌を俟ちて聴かまほしけれ。

君は頻に予を罵りて「無責任」といひ、「粗暴」といひ、「淺薄」といひ、「卑陋」といひ、「滑稽」といひ、「噴飯に堪へず」といふ。しかも君が駁論は未だ一も其の然る所以の理を明白にする能はざるなり。予がニイチエと其の主義とを痛罵せしや、一々其の理由を附し、證明を附しにき。漫罵にはあざりしなり。君が予を罵るや漫罵なり、全然没理由か然らざれば正鵠を逸したる亂射なり。其の幾分は顧みて他を言ふの怯に似たり。例へば、予がニイチエの史知識の淺劣を嘲れるを反撃して、汝こそ史知識淺劣なれと嘲りながら絶えて明證を擧げざるが如き、或ひはニイチエヤニズムを「盲反動」と罵れるに憤激して、汝こそ「最も盲目的」と叫破しながら一も其の理由を辯明せざるが如き、或ひはニイチエが本性満足のは非に對して只僅に二行有半の辯を做して「著者(馬骨人言)は又ニイチエが率性主義の倫理を以て常識以上の理想にあらずと做せり。こは常識を見て理想を見ざるが爲のみ」と漫説し去つて又顧みざるが如き、文士の禮として先づ如何ならん？ 若し夫れニイチエと獨逸思想界との關係に就いては君にも一定新解あらん、予もまた諷刺を主とせし彼の論文の言ふに

及ばざりしもの尙ほ多々あり。予も更に之れを説かん、君の駁論も聞かまほしけれ。但し君の所謂

歐洲思想史論

にして嘗て『帝國文學』及び某文學雜誌などに散見せりしものに止まらば、予は君が十九世紀思想史論によりて啓發せらるゝこと殆ど絶無ならんことを危むものなり。君は予に獨逸十九世紀思想史を討究せりやと問へり。予は反問せん、君は獨逸十九世紀の思想史は十八世紀の歐洲思想史、就中英國の思想史より其の討究をはじめざるべからざることを覺悟して、其の思索を結了したりや？ 而して十八世紀の思想の流れは、一に哲學、二に神學、三に倫理論、四に政治論、五に文學論、藝術論の凡そ五段に分流して而もいつとなく相混流し、剩へ中古思潮、古代思潮と斷絶すべからざる關係を有す。故にルネサンスを善解せざれば十八世紀は解しがたく、中古思潮を熟知せざればルネサンスは解しがたきの理、乃至中古思潮ミドル・エイジ・コンプレッションと基督教との關係、基督教と羅馬帝政時代の風俗壞廢との關係、羅馬と希臘との倫理、道德上の關係等、總て此れらの討査を経由したりや？ 予が史的知識恐らく甚だ淺膚なるべし、只君が既往の思想史論は秋毫も予が知識を補ふに及ばざりしなり。予は疑ふ「馬骨人言」がニイチエ鼓吹者の爲に代言せし獨逸惡時代精神談は君が『帝國文學』に掲げた學弊談に比して幾多遺漏を補へるに似たるものあざりしかを。

予がニイチェとゲーテ、ダーキン等との關係を評して、彼れはゲーテ、ダーキンを精讀せざりしならんといへる、臆測と言はゞ臆測なるべし。但し予は其のダーキンを嘲る口氣の汚きに比して其の學說に誨へらるゝことの餘りに貧なるに驚きたるなり。君はニイチェがダーキンを「English joker」と嘲れる短詩を忘れたるか？ 苟もダーキンの著を精讀したらん者にして、彼れを「joker」と做す、難からずや？ 又「ユーベルメンシュ」の名目を借り來る程にゲーテに私淑しながら、「キルヘルム・マイステル」が修身訓、乃至『ファウスト』が處世訓を少しも解せざるが如きは如何？ 予の臆測にして中らざらんか、予は謹んでニイチェが靈に謝すべし、然れどもそは君が合理有力なる回護と説破とを俟ちて後の沙汰たるべきなり。乞ふ、せめてもニイチェがゲーテよりも愚ならざる、ダーキンよりも愚ならざる、ルッソーよりも愚ならざるの明證を舉げよ。予また再駁せん。

ニイチェが思想はよし時代精神に過ぎずとも之れを道破せるが故に偉なりとや？ 所謂時代精神とは何ぞ？ 文明の弊を罵るの聲か？ 形式教育の排斥か？ 煩瑣研究の非難か？ 沒趣味教育の痛罵か？ かゝる思想の傾向を君は眞面目に創新なりと言ふや？ ルッソー、ベスタロチの説は如何？ ゼルテリズムの一面に此の傾向見えざりしか？ ロマンチズムの思潮は如何？ マシュー・アーノルドの教育主義は如何？ 或ひは今の獨逸には珍らしからん。さりとて獨逸を以て全歐を律し、我が學界をも律せんとするは孤陋ならずや？ 夫れ言ふもの必ずしも行ふ者にあらず、行ふも

の或ひは言はざることあり。君よ、視聽を自家の周邊にのみ限る勿れ。

或ひは時代精神とは予の所謂「惡時代精神」の義にして爲我一邊主義の謂か？ 嗚呼、之れを道破せる者、古今何ぞ限らん？ 論としては楊朱、ソヒスト、マンドギル、ロシュフォーコー、ホップス等其の名の天下に轟ける者あり。之れを散文詩に寫したるものとしては、マンドギルの『蜂物語』、スキフトの『ヤフー談』、ドストイェフスキーの作の一面、佛のブルジュエ、モーパッサンらの作の幾分、所謂デカデント一派の詩歌、これら皆道德的虛無主義乃至爲我一邊主義の具體化ならずや？ ニイチェを諷刺家、反語家と曲解せんと試むるものは偶々以て彼れが唯一の特色たる「赤裸々の無道徳主義」を削り去つて、彼れをして精神的、文學的に死滅せしむるに外ならざるなり。

君は頻に予がニイチェ知識の深淺を疑へり。知識淺からば如何？ 一二冊を讀みての立論たりとも、一夜にして成れる痛罵なりとも、其の議する所鑿々として據る所あり、正鵠を逸せずば可からずや？ 予がニイチェ知識の深淺を疑ふもよし、但しそは予を論破して後にこそ提出せらるべき疑問なれ。君は論理的に予を破することを爲さずして只管臆斷漫罵す。文士の禮なりや否や？

君且つ曰はく「獨逸語を知らざる人の、今日ニイチェに關して如何ばかり評し得べき」と。奇なる哉語や。ニイチェの名著は残りなく英譯せられたるを知らずや？ 彼れを知る何の難きことかある？ 翻譯は信賴すべからずといふか？ 君は梵語を學ばざる佛典學者は悉く取るに足らずと言は

んとするか？ 節調疾徐の妙、詞句烹煉の旨めいこそは原文に俟たざるを得ぬ習ひなれど、思想の批判は由來翻譯にて事足るなり。かゝる昧者おどしを反覆せられんは、師が唯一の善美處を體踐せらるる人としては名譽ある所爲にあらじ。

君は匿名の爲の故に予の勇氣を疑ひたりしが、予は寧ろ君の勇に富めるに驚く。幼弱教育の知識、經驗、手心いまだ豊かならずして大膽なる教育案を推奨するの勇に驚く。是れ一つ。人情にも、世故にも、心理にも、倫理にも精通せずして、人間の本性を斷論し、人道の標準を斷論するの勇に驚く。是れ二つ。前と後と、論旨矛盾して動する色なく、剩へ師の本旨とも衝突して異とする色なく、漫然として敵者を罵倒するの勇に驚く。是れ三つ。身教育の責任ある位置にありながら、教育會の席上に於て無定見の青年に對して漠然たる爲我主義を唱へ、"jacket-courage" をすら鼓吹せられ大膽に驚く。是れ四つ。最後に、某問題の爲の故に十有二萬の男女老幼が一實業的天才の犠牲となれる刻下に於て、天才の爲には千萬の凡俗を犠牲にせよと叫破する殘忍至極に類する似而非勇氣に驚く。是れ五つ。

終りに臨みて

君に忠言す。ニイチエ評傳の著や、『ザラツストラ』の譯や、双つながら君の着眼の當否と君の勞力

の多少とによりて、單に一時の要具たらずして永く我が文壇の珍となりて傳はらん。願はくは當の論争の用をのみ目的とせずして、慎重に、公平に、忠實に著譯せよ。ニイチエに反對の諸家の評傳、論議をも参照せよ。昧者をも誨導し、後世にも恥ぢざらんの用心を忘るゝ勿れ。

若し君が用心をここにあらすして再び漫罵を逞うせんか、予が君に應ずるの態度も一變せざるを得ず。ニイチエニズムの猿鼓吹に對してはスキフトが『桶物語』が蹤を追はんも一興なり。

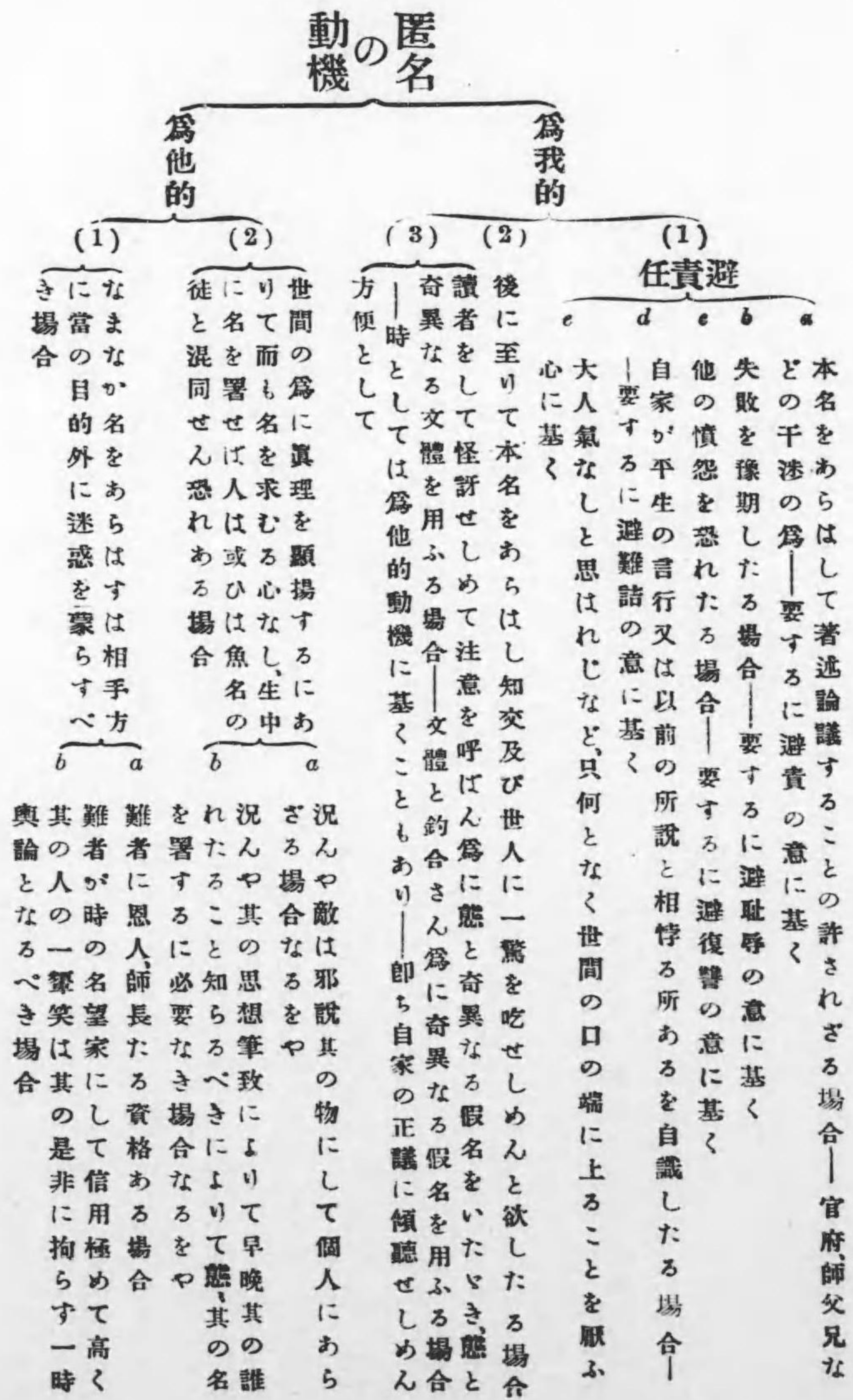
『馬骨人言』跋

匿名の動機

匿名の動機に二種あり、自己の爲にすると他の爲にすると是れなり。自己のため即ち爲我的の場合を更に細別すれば、第一、責任を避くる場合、第二、後に至りて本名をあらはし知交及び世人に一驚を吃せしめんとする場合、第三、讀者をして怪訝せしめて注意を呼ばん爲に態と奇異なる假名をいたゞき、態と奇異なる文體を用ふる場合等に分たるべし。尙ほ第一の場合は圖表に示せる如く a b c d e 等の各種に分類することを得べし。

他人の爲、即ち爲他的の場合を更に細別すれば、第一、なまなか名をあらはすは相手方に當る目的以外の迷惑を蒙らすべし。尙ほ第二、第三と分類すれば圖表の如き a b の場合を得べし。

解し易からしめん爲、之れを圖にして示せば次ぎの如し。



諷刺、反語の是認せらるゝ場合

諷刺と云ひ、反語と云ひ、相似たる種類いと多けれど、そが是認せらるべき場合は、要するに第一、言論の自由、思想の自由なき場合、(専制時代など) 第二、禮儀上もしくは方便上、正面より説破する能はざる、若しくは説破するとの妙ならざる時、(君父、長上などに對して)、又は露骨に説破せば徒らに他をして怒り怨ましむるのみにて何等誨導の功を奏する能はざる場合、第三、他をして正言するよりも鋭く感銘する所あらしめんため——これに多少惡意もしくは敵意の加はれるものと無邪氣なる嘲弄との二種あり。第一の場合を遣悶的と名づくれば、第二の場合を諫止的、第三の場合を修辭的と名づくべきか? 以上三條件の性質を帶ぶるものにあらざれば、正當には諷刺、反語と爲すべからざるなり。尙ほ解し易からしめんために左に圖表を示す。

- (1) 遣悶的——言論の自由なく、思想の自由なき場合——例へば専制政治時代——思想表白の必要上より據なく反語諷刺を用ふ——露骨に小説の名家輩出するは主として婉曲に政治、社會、宗教等を論ずるの必要あればなり
- (2) 諫止的——禮儀上もしくは方便上、正面より説破する能はざる、若しくは説破することの妙ならざる場合——例へば君父長上等に對して——曾呂利新左衛門——東

諷刺、反動

是認の場合

- 方朔——西洋封建時代のフール——以上は主として禮儀上の沙汰に關す——露骨に説破せば徒らに他をして怒り怨ましむるのみにて何等の誨導の功を奏する能はざる恐れある場合——アヤソン、スチールらの諷刺は是れ
- (3) 修辭的——他をして正言するよりも鋭く感銘する所あらしめんため——これに多少の惡意もしくは敵意の加はれるものと無邪氣なる諧謔即ち遊戯三昧に止まるものとの二種あり、——スキフト——ラブレイ——ルシヤンなど

嘲諷の是認せらるべき場合

嘲諷とは *satire* の事なり、而してそが是認せらるべき場合は、第一、議論淺劣、品性儂佻にして敵手の取るに足らざる場合(例へば眞劍に對する扇子の立ちまはりなどの如きを想ひあはずべし)。第二、謬妄なる小狂熱を消沈せしめんための方便として用ふる場合(例へば末松一派などの演劇改良に熱したる當時、竹のや主人の採りし嘲弄の態度の如き)。第三、敵手の武器に鈞合はすための場合、即ち先方が嘲諷の筆を用ふるに此方が眞劍にて向はんは大人氣なき場合 (*measure for measure*)。及び第四、世間が眞面目なる議論に耳を傾くることを厭ふ場合(方便として、將た誘

引法として)の是れなり。

尙ほ精しくは次ぎに示す圖表によりて覺るべし。

嘲 諷

是認の場合

- (1) 敵手の取るに足らざる場合 議論淺劣 意志薄弱(浮氣、客氣、す 品性儂供(不誠意)にやめる)
- (2) 謬妄なる小狂熱を消沈せしめん爲の方便——一束薪の火にそゞろ一桶の冷水——
—ビュリッタンの末派に對するパトラが嘲諷——似而非演劇改良熱に對する
竹のやの嘲弄など
- (3) 敵手の武器に釣合はすため——*til for til, measure for measure*——先方が嘲諷の筆を用ふるに、こなたが眞劍にて向はんは大人氣なし——*ホーア*對*クラッア*街の窮才子
- (4) 世間が眞面目の議論を讀むことを厭ふ場合——五十行とつゞくと讀まぬと云ふ浮氣讀者のみ多き世に方便として、誘引法として

所詮、諷刺 *satire*、反語 *wong*、嘲諷 *ridicule* の筆は如上の條件を具ふる時に於てのみ是認せらるべき者なり。而して三者共幾分か相似たるが如くにして其の實は相異なり。尙ほ此の外に單に諷諧 *humour* と稱すべき筆致もあり。こは聊かも惡意を含まざる場合に用ひられて而も其の姿は諷刺嘲弄に似たる所あり、心すべし。今はそれらの差別に關して細論せず。

以上三説のうち、諷刺と反語とに關する分はニイチェが言論及び其れに類似の無責任の放論を嘲世、諷俗の正論なるが如く曲解するものありて、世間往々之れに惑はされ、名を諷刺に借りて、僻説妄談を縦まにするもの日に多からんとする傾向ありしが爲に草したり。他二者に至りては主として自家の態度を回護して世間の蒙を啓ける也。

近世文學思想の源流

(明治四十一年早大文科講義録の爲に)

緒言

日本現今の文藝思潮ほど紛糾混亂して多端に流れ雜駁を極めた例は、世界いづこの歴史にも無からうと思ふ。今日文藝に志す人は勿論、多年文藝にたづさはつてゐる人々の中にすら、その歸着を定めかねて方向に迷ふ人のあるのも無理の無いとである。恐らく十年以後の形勢を豫言し得る者は今の文壇に只の一人もあるまい。何の事は無い、我が文藝思潮は怖ろしい渦卷のやうである。而して其渦卷の中には數百年以前の東西の思潮も今現に流れ込んでゐれば、ツイ去年、甚しきはツイ今年生れたやうな外國思潮までが殆ど同じ勢ひで奔り込んでゐるのである。で初心な人達は此勢ひの凄じいのに壓倒されて、目が眩んで、足元がグラ／＼になつて、わるくすると飛んでも無い思潮へ卷込まれて空しく文海の底の藻屑となることもある。古い思潮が必ずしも廢れ物とも定らず、又最新の思潮が必ずしも結構とも斷じがたいのであるから、苟も當來の文藝に志す人々は、先づ此大混亂の由來を取調べ、種々の思潮の特質を精査し、徐ろに歸趨を決するの必要がある。

一體かゝる大混亂は如何にして醸し出されたのであるかといふに、

明治の初年に於ける我が政治上の大革新によつて、我が一般の思想界に前古未曾有の變動が起つただけでも、必然の結果として、我が文藝の内容及び形式に一大變化を及ぼすべき道理であるのに、外國文明との接觸は年々歳々頻繁となり、それと同時に文運興隆の大機縁が熟したので、外國思潮の浸入が著しくなつたのである。明治の新文學が興り始めたのは西南戰爭以後の事で、先づは明治十四五年以來と言つてよからうと思ふが、流石に其頃はまだ甚だ混沌たるもので、外國文學を愛讀する位ゐる者はあつても、それに自分の生活が懸つてゐるやうに思つて眞面目で研究する者などはまだトント無いといふ有様、隨つて外國思潮の影響も頗る漠然たるものであつた。西洋の小説に比ぶれば日本在來の小説は脚色が淺薄とか、荒唐無稽に過ぎるとか、一段進んだ處でタカ、心理的感興に乏しいと言ふ位の評に止まつた氣味で、それ以上に立入つた批評を試みる者は先づ無く、第一審美論とか美學とか言ふやうな事を口にする者がまだ殆ど一人も無いと言ふ有様であつたので（其頃西洋では文藝上に種々雑多の新主義が相對峙して激戦してゐたに拘らず）今の所謂ロマンチズムとか寫實主義とか言ふのさへも、その名目をすら知る者が無いといふ有様。尤も、これは押ならして言ふので、此際或學校の一隅又は或一個人の書齋内に於ては人知れず多少進んだ研究が行はれてゐたかも知れず、又現に著述としても、稀には中江篤介氏の『維氏美學』のやうな譯書があつた

が、それらは他と交渉が無いが、さなくも存外に影響の微々たるものであつた。と言ふやうな體で、其頃の文學好きは單に「好き」といふに止まり、之によつて自家の思想感情にまで感化影響を蒙るといふやうなことは先づ無く、よし多少そんなことがあつたにしても、自分は心附かんで過して居るといふのが通例。彼の中江篤介氏がルッソに私淑して自由平等主義を唱へたなどは寧ろ例外と言つてよい。その中江氏すらも其實政治上から彼の主義を唱へたので、純文學上から主義を呼號するといふやうなことは絶無であつた。明治十五六年になつてやう／＼主義を立て、文學に従事する者が殖えて來たが、それとても尙ほ文學上だけの話で、修身處世の上にも其同じ主義の感化を蒙るといふやうな傾向は先づ絶無。又その所謂主義も單に寫實主義の一點張でおよそ二十年近くも押して來たことであつた。其間に元祿文學の流行とか國文學の復興とか多少の小波瀾はあつたものの、要するに單調子で、外國文學の感化も概して英國式であつたと言つてよい。然るに日清戰爭前後から俄然として形勢が一變し、外國思潮の浸入が俄に急になつた。獨逸、露西亞、佛蘭西等歐洲大陸の目ぼしい國々の文學思潮が相並んで我が新代文學者に影響を及ぼし始めた。十八世紀末より十九世紀末に至る間に彼方の文壇に瀰漫したあらゆる思潮は、時を同うし若しくは密接に相前後して何の前知らせも無しに浸入して來た。早い話が、西洋の文壇が最近一百年間に經驗した種々雑多の重大な變動に——利弊相半する種々の複雑な大變動に——我が日本の文壇は日清戰爭以來今日に

至る僅々十五六年間に於て殆ど盡く接觸し得たといふわけになる。西洋が百年間で學んだ事を僅々十五六年間で學んだと言へば、如何やら大した得をしたやうでもあるが、それが取りも直さず大いに不利なる所以でもあつて、吾々當來の文藝に志す者の深沈なる考究を要するのである。それは扱おき、どうしてこのやうに外國思潮の侵入が急になつたかと言ふに、無論その因縁は極めて複雑で、迎も手短かには辯ぜられんが、當講話に關係の最も深い點を主として言へば、文運の興隆につれて文學専門の人々が著しく殖えて互ひに文學上の生存競争に熱衷する結果、最初は先づ何でも新しい武器を得て戦はねば勝利を博するとは難いと考へ、主として西洋近世の文學に思ひを潜め、其作物を研鑽し、次ぎに其評論を玩味し、續いて其歴史を調べ、種々の文學論、種々の審美論等を討究した結果、多くは半無意識の間に次第に其感化を被り、或ひは其作を譯し、或ひはそれに倣つて新作り、或ひは其論を紹介し、或ひは其説を適用し、或ひは其主義を呼號し、十人十色の好惡に應じて外國の新主義を攝取し、折しも燦然として一時に生ひ出でた無數の雜誌、新聞紙を利用して八面一度に新説を唱へ始めたのが原因であると思ふ。是れに於てか内外未曾有の幾多奇異なる現象が生じた。例へば西洋ではロマンチズムの反動として寫實主義が起つたのであつたに、日本では寫實主義が入來つた後に頗る遅きにロマンチズムが這入つて來た。

而もその當時にはこの倒行逆施に心附いた人が殆ど先づ稀といふ爲體。併しながら畢竟それは半

ば以上人爲的に入つて來たので頗る不自然な現象であつたから、その唱へられて程も無いうちに文壇の思潮は激變して、所謂自然主義の世の中となつた。かと思ふと之れと同時に印象主義も唱へられる、標象主義も唱へられる。或ひは又沙翁やゲーテやシルレルやを激賞する聲の漸く廣く行渡りかけたかと思ふうちに最早既に之れを貶す聲が聞える。ワグネルを紹介する評論が少々ばかり見えたとかと思ふうちに何時しかオペラ沙汰は忘れられる。イブセン、トルストイの研究が始まつたかと思ふうちに最早それは棄てられたやうになつて、文壇は露國最近の文學又は佛國最近の文學に其注意を傾倒するといふ有様。新しいと言ふ語は御符や呪文の如くに今の人心を魅し、陳いと言ふ呼聲はさながら死刑の宣告のやうに畏怖せられる。これは時勢の然らしむる處、海外の文壇にも之れに類する紛亂が無いでは無い、併し彼方では少くとも一百年がたの浮沈消長を経た結果として斯様な紛亂を醸したのである、隨つてその斯くの如く成來つた因縁も、その一々の得失も、解つてゐる向には解つてゐるの故、まさか百年前、五十年前の思潮を以て今を律せんと試みたり、現に覆車の前轍があるのに又候その愚を再びせんとしたりする様な没分曉漢は先づ無い。特に我が文壇に於ては、下手にすると相應に文學知識に富んだ人々の間にも、存外に文學史知識の豊かで無い事があつて、所謂逆施行式の指導を試みかねないのが第一弊。或ひはまた或一思潮の美所は心得てゐても其弊には昏く、或ひはその長短共に心得てゐても其前後の思潮との關係を明にせぬなどいふことも

ある。蓋し今の作家、就中批評家らの新思潮を奉じ新主義を呼號するのは、主として自家を立するが爲であるから、勢ひその奉ずる思潮の美、主義の長を誇張する事が第一となり、次ぎには他の思潮や主義を排斥し摧破するのが眼目になり、どうしても偏頗もしくは過激になり易い。こゝに多少の弊害のもとづく所以がある。彼のロマンチズムの初めて唱へられた時分にも、自分は深く此理を感じたので、又それと同時にロマンチズムの利弊、兩面を十分に會得するとは我が文壇の將來の爲に頗る必要な事と信ずる仔細があつたので、早稻田大學文科生の爲に特に科外講話としてロマンチズムの分析を試みたことがあつた。然るに文壇の風潮は、前に語つたやうな次第で、忽ちのうちに活動寫眞が變化するやうに其局面を改め、今はロマンチズムなどいふことは全く過去の物の如く見做され、甚しきに至つては其利弊は勿論、定義のあらましをも辯じ得ない者が多くなつた。舊きを棄つること敝履の如しとは實に今の文壇の慣はしである。併しながら自分の信ずる所によれば、ロマンチズムは明かに近世文藝思潮の最大泉源である。ロマンチズムの何たるを明かにせずしては到底西洋近世の文藝を談すべからざるのみならず、今の所謂寫實主義、自然主義等の由つて來つた所以を解することも難く、随つて之れに依らざる限りは當來の文藝思潮の傾向を假にも卜知する道が無いやうに思ふ。尤も、ロマンチズムに關しては、曩に大塚文學博士が『太陽』に載せられた一論文もあり、長谷川天溪氏が『太陽』の臨時増刊中に敘述せられたる長編もあり、何れも

深い研究に成つた有益な著と信じて居る所なれども、それらと自分の講話とはまた大分その方法に於て異なる所もあれば、兎も角も一應講じ試みることにしたのである。名の陳きを厭つて其關係の自家に密接なことを遺忘せられずば講者の本懐である。

上古及び中古の歐洲思潮

希臘思潮——ヒブルー思潮——暗黒時代

ロマンチズムの複雑を極めた性質、その因縁、その脈絡、その關係を明かにしようとするれば、勢ひ先づロマンチズムといふ文學上の革新運動を呼び起した根本因たる擬古主義（クラッシ、ズム）の何たるかを明かにして掛らねばならぬ。ところが所謂擬古主義は、明かに歐洲の十八世紀といふ一時代の特殊な時代精神が産んだものに外ならんから、少くとも一應は此時代の特質を調べて見る必要がある。併しながら件の十八世紀思潮は、歐洲近世文明の大源泉たる彼の「ルネサンス」即ち人文復活又は文藝復興と譯する大革命運動の最後の歸着たるに外ならぬものであつたのだから、事の順序として徒の概略でもよいから「ルネサンス」の何たるかを物語る必要が生じて來る。然るに「ルネサンス」は言ふまでも無く中古暗黒時代の反動、而して暗黒時代は羅馬帝國大瓦

解の自然の結果即ち歐洲古代文明の大反動たるに外ならんから、甚だ煩はしいやうだが、如何しても一應は古代即ち希臘思潮まで遡つて見ねばならぬ。言ひかへれば、過去の歐洲思潮を瞥見した上でロマンチズムの講説に取掛かるのが當然の順序である。

歐洲三千年の文明は複雑多端な要素から成立つてゐるものであるから、到底簡略にはその歴史を説きやうも無い。さればと言つて、最も著大なる感化影響を及ぼした大要素のみを掲げ出すのも、偶、以て初心の讀者をして、件の二三大思潮のみが歐洲文明を醸し出したかの如く誤解せしむる虞れが無いでも無いが、こゝには主として文藝上に感化影響を及ぼした思潮といふ條件を附けて特に二大思潮を擧げようと思ふ。一は古代希臘に於て花を開き實を結び羅馬帝國に傳はつて凋落した文明要素、之れを通例ヘレニズム即ち希臘思潮と言ふ。二はヒブルー思潮、更に正當に言へば基督教的精神。前者は現世生活を第一とし、人間の本性を重んじ、總じて自然といふ事を重んじ、自主自立といふ事を尊んだ。之れに反してヒブルー思潮は人間よりも神、現世よりも未來、本能よりも靈性、自然よりも超自然を尊び、自主自立といふ事よりも利他献身といふ事を第一と立てた。此二大思潮の起伏消長する間に、第十世紀以前の歐洲文明の経緯が織り成されたのであつて、更に之れを複雑ならしむるに與つて力あつたものは種々の民族が固有の特質とその特質が醸し成した文明の要素である。嘗にそればかりで無い、彼の十五世紀に於て絶巔に達した人文復活も、十八世紀に

於て全盛を極めた擬古主義も、十九世紀のロマンチズムも、その反動として起つた新尙古主義の系脈も、今の所謂寫實主義、自然主義も、或ひは直接に、或ひは間接に、或ひは渴仰的に、或ひは反動的に、件の二大思潮に關係してゐるので、此二大思潮を離れては、歐洲文藝無く、又之れを離れては殆ど全く其消長を論ずることが出来ないのである。希臘思潮は今を隔ること少くとも二千六七百年の間に於て既に立派な文明を醸し成したのである。彼の血族を尊び私徳を重んじ外國人を卑んで夷狄と呼び、専ら都會に住して小き共和國を組織し、自主獨立の自由主義、本能を重んじ肉體を尊む自然主義に立脚しながら、美を愛し智を尙び、調和を喜び力行に勉め、毎に中庸を理想として過不及なからんとを第一とせし古代希臘文明が是れである。この個人主義的、現世的な文明は紀元前四百二十九年に逝去せしアセンスの大政治家ペリクリスの時代に於て其全盛期に達し、爾後アセンスの衰頹すると共に衰廢した。希臘文明に代つて興隆した羅馬帝國の文明は畢竟するに件の希臘文明から、文藝の美や中庸の徳や哲學的精神など言ふ最も肝要な緩和要素を著しく抜き去つた上に、更に拉典民族の本來性に基いた殘忍殺伐な精神や極端な利己心や功名心、實利主義等を附け加へて出来たもの故、其必然の結果として、先づ國體としては帝國主義、即ち外國は如何ならうとも羅馬國の利になりさへすればよいといふ極端な國家的利己主義、それから又政體としては羅馬上流の市民さへ安樂に暮すことが出来さへすれば下等社會や奴隸や屬國の民や外國人などは如何あらう

とも關はないといふ國家至上主義、上流專制の寡人政體、而してそれを彼れ是れ言ふ者があれば武力と英斷とを以て會釋無く之れを壓伏するといふ武斷政治。さて斯くの如くにして時の全天下の富を羅馬の一市に吸収し、「羅馬人に非ざれば人にあらず」と誇り矜り、東西古今の歴史に恐らくは比類無かるべき利己一邊の現世主義の生活を送つたのが當代の羅馬市民。帝王にはカリギュラ、ニロの如き桀紂が殆ど五指を屈するに足る程に現れて、血族相姦し骨肉相殺し、市民には自己一人の慾をほしきままにせんと欲する必要上から妻を迎へることをすら厭ふ者の輩出するに至つたも此頃。專制時代の習ひとして一天萬乗の君主に暴横、淫蕩、驕奢、殘忍等の諸惡徳を兼備した者の出るとは怪むに及ばん事だが、特り羅馬の帝政時代は上中流を擧つて小暴君、小專制君主たるに外ならぬから驚くべきである。是れが所謂羅馬の帝國主義で、眼中羅馬上中流以外には頭で人類は無いのである。國家としても唯我獨尊、國民としても唯我獨尊、其最も重んずる所は現世の功名、現世の利福、其最大の娛樂は大觀覽場に於て數百頭の獅子や象や虎やを闘はせ、若しくは是等の猛獸をして無數の罪人を噬殺させ、或ひは劍客と稱する數百人の犠牲をして眞劍を揮つて相殺傷せしめ、其七顛八倒して苦むのを看る事であつた。而してそれを觀て歡呼したのは獨り暴君や豪族ばかりでは無く、上中流の花の如き女等も加はつてゐたといふから驚くべきである。まだしも娛樂が斯様な殺伐殘忍な事のみ止まつたら、或ひは是れ武斷的國風の然らしむる所、未開時代の止むを得ない現象

とも言ふべきだが、當時の文藝の方面を看れば到底其様な辯護は出來ぬ。演劇でも舞踊でも立派に希臘から傳來し大規模で行はれてをつたので、決して未開どころで無い。而も其演劇、舞踊、繪畫等が概して野卑、俗惡、淫靡を極めたもの。併し其多くはあまりに馬鹿々々しく露骨なので猥褻なと評することが不適當なほどであつたらしい。彼の贅澤を極めたる温浴場が市内に幾ヶ所となく設けられて上流社會は何の爲す事もなく入りびたり、全日そこにあそび暮すこと連日であつたといふも此頃。是等の狀況は今一々語るに違が無い。羅馬帝政時代の風俗史に就いて會得せられたい。たとへばレッキアの『歐洲道德史』、ドレーバーの『文明史』、ギボンの『羅馬史』、ベリーの『羅馬帝政史』等によると、其大概を知ることが出来る。ファーラーの『闇と黎明』、シエンキキッチの『何處へ行く』のごとき著作も参照に値ひすると思ふ。ついで話が枝葉に流れたが、此現世的快樂主義、肉慾主義、利己一邊主義の一方に偏した劣惡な時代精神に反動して、その大缺陷を補つたものは實に彼のヒプルー思潮、一層正當に言へば基督教の福音である。その初期に於ける基督教の精神は明かに文明の排斥であつた。現世主義、快樂主義の折伏であつた。彼等初期の基督教徒は神の命、天の默示、之れを無上命令と眞額に奉體して些の疑惑をも挿むとを許さず、あらゆる小人智の判斷を排し、理窟を斥け、人間原罪の説を呼號して、艱難辛苦は人間が先天的の宿命である、まぬかれ難き懲罰であると唱へ、頭下しに現世を非認し、偏に未來の復活を説き、極端に自己を棄つる

の諸徳——慈悲、忍辱、節慾、獻身、報怨以德の諸徳——を鼓吹し、名利、權勢、家庭の福祉などを絶對に貶しめ、或ひは公然と或ひは隱約の間に後年枯禪宗の三原規となつた清貧モナスチズムと遜順ポパイチーヒユリミチーセリベシと獨棲（不嫁娶）とを推奨し、四海同胞の平等主義に立脚して無差別博愛の公德を宣傳した。何と是等諸要素は、彼の希臘全盛時代から傳はり來つた諸文明要素の直反對であること明かでは無いか？ 帝國主義に對する四海同胞、利己に對する愛他、差別に對する平等、人智に對する神意、理窟に對する信仰、現世に對する未來、快樂に對する忍苦、傲慢に對する遜順、名利、奢侈、淫逸に對する清貧獨棲、一として直反對ならぬは無い。かゝる精神界の大革命が起らざるを得なかつた次第は單に是れに徴したのみでも明かである。

かくて基督教的精神は他の希臘思潮即ち異教的精神と猛烈な軋轢を経験すること幾百年、とゞのつまりは基督教的精神が全勝を占めることとなつたが、さらぬだに澆季の世の然らしむる所として、人心が次第に世をはかなみかゝつてゐた處へ、一方には件の基督教的精神の教化もあり、又一方には第二三世紀の頃より退隱苦行して沈思禪念に耽る習はしがシリヤ、埃及に起つて追々歐西に波及し來つたので、厭世悲觀の傾向は年々歳々に著しくなり、自然のまゝ、本性のまゝに生活して現世を享樂するといふ習俗は漸く減じ、肉を賤みて靈を偏重するを理想的と做すの風を醸した。靈肉の分離闘争は蓋し此時に始まつたのである。さるほどに西羅馬帝國の瓦解以來ケルト、チュートンの

諸民族は諸處に割據して龍驤虎視し、兵馬倥傯、戰雲は暗愴として歐洲の全局に漲るに及んでは、弱は常に強の餌食となり、權力武力の外に正義も無く道もなく、權門豪族の榮花に傲る者も盛衰一朝にして處を替へ、萬乘の尊きに在る者とても何時其位を失ふかも圖られぬ無常迅速、支那日本の戰國時代や、釋迦出世の頃の印度などにも比すべき亂離の世の中となり、現世の頼み難きを感じるの念が一段激切になり來つたので、人心ますます基督教に向ふと同時に、所謂枯禪宗モナスチズムの感化がおひおひ著しくなつたので、浮世の事にたづさはつて活動しようといふ意氣は彌々萎靡し、隨つて現世を非認する厭世の思潮は殆どその極に達した。加ふるに此時に當つては時の道德の唯一の源泉たりし羅馬法皇が威權天下に并ぶ者の無いのに驕つて暴横年に甚しく、國王の王と自稱して奢侈逸樂をほししまゝにするといふ爲體ていたらゆる、その下に立つ僧官らは其意を受けて愚民を瞞着し、體裁のよい口實の下に民財を掠め奪ふことをのみ是れ力めた、さて斯様な目的から言へば、民衆をして事理を解せしむることは邪魔となるとも便宜とはならぬゆる、彼の有名な法皇グレゴリーの如きは痛く民俗に學問せしむることを嫌ひ、一へに彼等をして無知朦昧に止まらしめんと欲した。爾來羅馬教會の方針は、常に「民をして由らしむるとも知らしめざらん」とするに在つたので、肝腎要の聖書の誦讀をさへも嚴禁して、只管様式的宗教をのみ課することを力めた。こゝに於てか當時の基督教は、その昔、宗祖イエス・キリストが宣傳し實踐したものと相隔たること千萬里のものとなつた。

憫れむべきは時の民衆である。一面には王侯の壓制があり、他面には宗教の暴横があり、戰亂は殆ど間斷なくして生命財産の安寧をたしかめ得ざると同時に、思想の自由は行爲の自由と共に杜絶せられ、學問は少数者たる僧侶に壟斷せられて、心は長へに無知の雲に掩はれ、枉屈も之れを解くに由無く不法も之れを訴ふるに處無しといふ有様であつたので、歴史家は此時代を名づけて歐羅巴の「暗黒時代」といふのである。希臘思潮の弊を救つたヒブールの精神も茲に至つては漸く其極端に流れ、靈を偏重する結果、肉の人間といふ事を度外視し、冷灰枯木の如くにして世を送るを理想的と立つるに至り、竟にまた一の弊竇となつたのである。之れを要するに紀元後第六七世紀頃より世は次第に闇となり始め、十二三世紀の末に至つては、さしも光彩陸離たりし希臘文明の遺産も蕩然として地を拂ひ、歐洲全土の民を擧つて淺ましい半未開の状態に退歩せしめた。併し世はいつまでも斯くの如くにして永續すべき筈が無い。所謂「ルネサンス」は此「暗黒時代」の反動として起つたのである。

ルネサンス

その因縁——その効果

ルネサンス、又は英語にて謂ふリネーサンスは、通例は「文藝復興」と譯することであるが、それだけでは此大事變の真相を蔽ふことが出来ぬ。古代の學問が復興して、諸種の學術が榮えたといふ事が所謂ルネサンスの一主動力でもあり、又其主^まな現象の一つであつたに相違ないが、尙ほ其真相が是れに盡きてゐると思つては間違ひである。ルネサンスは「新生」、「再生」又は「復活」の義で、その關係する範圍が極めて廣い。一言で言へば、歐洲諸民族の全心の復活である——智力上、道徳上、宗教上、學藝上に於ける歐洲諸國民の覺醒であると言つてよい。多年僧侶の教權に拘束せられて心靈上の自由を失ひ、同時に又王侯や貴族に壓制されて行爲上の自由をも失ひ、半死半生の昏睡状態にあつた西洋中古の民衆の精神が、新機運に感化せられて漸々に大自覺をなし、先づ學藝上、社會上に、次ぎに宗教上、政治上に破天荒の大活動を創始した事蹟を總稱してルネサンスといふのである。要するに、ルネサンスとは歐洲の諸民族が中古時代の紛亂を脱して近代の秩序へ移るに至つた其變遷期の全部を蔽ふ名稱で、取りも直さず古代文明との境目を指すのである。即ち希臘羅馬の思潮とヒブールの思潮とチュートン族の本性、風俗とが混淆し融會して、歐洲近世思潮を成した時代である。本來が大握みに附けた名であるゆゑ、そも／＼いつからいつまでを指すのかと言ふ事になると、それは餘り嚴密には定めがたい。通例は紀元後一四五三年東羅馬帝國が土耳其に滅された年を端緒とするが、畢竟するにこれは徒^{ほん}の便宜上の符牒たるに過ぎぬ。又彼の第十五世紀と

十六世紀とを以て其全盛期と定むるが如きもヤハリ大體を示す迄である。正當に解すれば、今尙ほ歐洲の諸國民は——むしろ世界列國の民衆は——第十五世紀に端を發いた人心の自覺を今も尙ほ續けてゐるのだと言つてよい。ルネサンスは人間大自覺の序幕も同然である。彼のルーテルの宗教改革の如きは其引返しであつて、佛國大革命の如きはその第二幕であるとすれば、十九世紀の諸變動や廿世紀の現在の事業はその第三幕もしくは第四幕を演じてゐるのだと見ても不當で無い。讀者はルネサンスと吾々との關係のほゞ斯くの如く密接なるべき由を會得し、さて後に下に講述する所を讀まれない。

ルネサンスの因縁は一朝一夕の事でない。その遠因は基督教の信奉せられた以後の羅馬帝政治下に潜伏して竊に反動の機の到るを俟ちかねてゐた例の希臘思潮、即ち靈よりも肉、他界よりも現世を重んずる異教的^{ペーガン}精神に胚胎したのであるが、別に其近因とも又要素ともなつたのを擧げると凡そ七ヶ條程ある。第一は西、佛、獨、英等の新國民が野蠻蒙昧の境涯を脱しておひくく自覺し來つたにつれ、舊文明の肝要な機關であつた拉典語は次第々に弃てられ、各地方に之れに代るべき新國語が發達するやうになつたと共に、之れに頼りて表白せらるゝ思潮や感情は、必然の勢ひとして舊文明とは脊中合せのものと成つて、隱然各民族の自覺を促しつゝあつたといふ事、換言すれば新興

國民の英氣漸く熾んにして半無意識の間に革新の機運の仰望しつゝあつたといふ事。第二は中古時代には無上の權勢を有してゐた種々の制度や組織が十四世紀に至つては大きに衰廢し最早天下の人心を御するだけの威力が無くなつたといふ事、例へば靈俗兩界の無上權力としての羅馬法皇の威嚴、神聖犯すべからざるものとしての諸國王の特權等がおひくく衰廢し來つたと、宇宙教會とか宇宙帝國とか言ふことが名實ともに萎靡したこと、封建制度の崩れかゝつて貴族や武士の勢力が以前程では無くなつたと同時に、各處に新しい都會が興つて町人の權力が次第に發達し、所謂中等社會といふ一階級が成立ち、それが政治上にまで幅を利かすやうになつた事等。さて第三は、前に言つた中等社會や新興國民を十分に自覺せしめて、其潛勢力を爆發させる大導火となつた古文學の復興である。特に稱して文藝復興と言ふのは是れ。彼の戰國擾亂の間凡そ七百年間も埋没してゐた希臘の文學的思潮が復活したのである。是れは主として當時の頑冥孤陋な神學的學風と偏狹にして不自然であつた時の基督教的道德とに反動して起つたもので、人間が持つて生れた理智と本能との自然の作用である。踴躍を惡み自由を欲し、新を需め奇を喜ぶ人間固有の性情の所爲である。何等か在來のとは異なつた依據證典を得たいものと苛求し、何等か新發展をなすの援助となり暗示となるものを得たいものと渴望しつゝあつた當代の民衆が、彼の自由にして豊富なる人間本位の希臘的文物に初めて接觸した時の心持は、さながら春の野山が十分の膏雨に潤つたやうなもの、見るうちに芽を發

し、雷を破り、忽ちにして百花亂發、紅紫繽紛の盛んな春色を呈するに至つた。それより以來思索
 討究の精神は年と共に發暢して、先づ學問上に大膽なる新見解を試みる者が頻々として出でて、智
 の解脫が成就さるゝと共に、あらゆる方面に於て智的活動が始まつた。つゞいて是等學問上の新見
 解を實地に適用して見ようと試みる者なども輩出した。例へば、古代の思潮を其儘に體踐して基督
 教の教ふる所とは全く直反對なる主義によつて此世をわたらうと欲する者も出るやうになつた。こ
 こに於てか新しい文學や藝術が勃然として興り、その感化影響の及ぶ所、文藝家ならざるものにも
 之れに倣ふ者がおひ／＼生じて情意の解脫が始まつた。第四の原因は種々の發明及び發見である。
 例へば、古學の復興を傳播することに與つて最も力あつた紙の發明、印刷術の發明、其迅速なる進
 歩改良、或ひは次ぎに語る新大陸の發見や、海上探檢の必要具となつた羅針盤の發明と其應用、及
 び封建制度を破壊するに與つて最も力あつた火藥及び戰砲の發明等。或ひは彼の破天荒の學說。例
 へば一五四〇年に公にせられたコペルニカスの地動説の如きは、宗教上にも政治上にも社會上にも
 多大の影響を及ぼし、彼のトレミーの舊天文學説は爾後まつたく廢棄せらるゝやうになつてしまつ
 た。其他ゴサリヤス（一五一四—一六四）の解剖學、ハーゼー（一五七八—一六五七）の血液循環論
 など、何れも空前の新説であつた。さて第五には新大陸の發見、海上探檢の大流行。ダイヤズは一
 四八六年に喜望峯を發見し、コロムブスは一四九二年に亞米利加に着し、バスコ・ダ・ガマは一四九

八年に印度に着き、マゼランは一五二二年に地球を一週した。第六はルーテルの宗教革新の大活動。
 或ひは是れをルネサンスの因縁とするは不當だといふ説があるかも知れぬ。何となれば宗教革新の
 機運は一面はルネサンスの結果たるに外ならぬとも言へるからである。されど時に因となり時に果
 となるは大事變の習ひであるから、茲には普通の説のまゝに之れをも因縁中に加へておく。ルーテ
 ルが所謂赦罪狀の下渡しまひわたに憤激してウイッテンベルヒの寺門に九十五ヶ條の教會彈劾の文を貼附し
 たのは一五一七年の事で、公然羅馬法皇の破門令を火中に投じたのは一五二一年の事である。ルー
 テル以前に英吉利にウイクリフといふがあり、ボヘミヤにもヒュツスといふがあつて、二人とも器
 量熱心多くルーテルに劣るとも思はれなんだが、時非にして二人共その志を得遂げなんだ、ヒュツ
 スは一四一五年に火刑に處せられた。和蘭のエラスマスの如きも古學復興の驍將であつたと同時に
 羅馬教會攻撃軍の急先鋒の一人であつた。ルーテルとても最初は古學の復興に同感を寄せてゐたの
 であつた。さて此宗教革新運動の結果は信仰の自由、良心の自由といふことを成就し得た。之れを靈
 の解脫などと言ふ。最後に第七の因縁としては件の新教派の運動に驚きて羅馬教會派が自衛の爲に
 企てた對抗運動を擧げる。歴史家は之れを呼んで「カウンター・リフォーム」と言ふ。「對抗革新」と
 いふ義で、舊教派が自家部内の積弊を自覺して紀綱振肅を試みたのであるが、これがおのづから新
 機運を助成するの縁ともなつた。或ひは之れを「カソリック・リバイバル」とも言ふ。「正統宗の復

活」といふ義。法皇クレメント七世と獨逸帝チャールス五世との間に結ばれた一五三〇年のポロニヤの盟約が此運動の基礎となつたといふ。有名な西班牙の僧ロヨラが組織したゼジュイト教の如きも此運動の一部たるに外ならぬ。

以上七ヶ條、これらが重立つ因縁には相違ないが、一言に約して言ふと、ルネサンスの眞原因は、人為的の制度に對する個人の本能の反動である、即ち靈に對する肉、神本位の學問に對する人間本位の學問の反動である。それゆゑにこそ此種の學問を専門とした學者連を「ヒューマニスト」(人間學者)といふのである。之れより先き、前にも一寸言つておいた通り、彼の大法皇グレゴリーは「無知は、信仰の母なり」といふ事を標語として學問を禁じ、先づ數學者を放逐し、次ぎにオーガスタス帝創立の大圖書館を焚拂ひ、すべて知識とか討究とか言ふことを蛇蝎の如く忌み悪んでよりこのかた「信仰の時代」といふ美名の下に無智蒙昧は天下の俗を成し、纔に取殘された少數の専門學者はあつたけれども、それらとても其研究する事柄は偏へに神學の範圍内に止まり、而も牽強附會を極めた煩瑣千萬な研鑽を事として辛うじて理智作用の命脈を繋ぐといふ有様。此時代の學統をスコラ哲學といふ。本來此學統は佛蘭西王に使へてゐたエリゼナといふ蘇格蘭生れの哲學者が第九世紀頃に唱へ出したので、廣く諸國に傳はつたは第十二世紀の事で、其神學の研鑽に應用せられはじ

めたのは第十一世前後の事だといふ。蓋しスコラ哲學は、おひく覺醒し來つた理智の要求に抗しかねて、之れと時の妄信とを何とかして調和せしめようといふ爲に唱へ出されたものと見てよい。當時の宗教的信仰の一種哲學的の解釋を下して兎も角も合理らしくしようと試みたのである。

學問界の有様からが大體右の如き次第で、中古時代には人は皆僧衣や僧帽に耳目を掩はれ心身を包まれて窮屈千萬な體で生活してゐたのである。山水の景色の美を賞することさへも一種の罪惡と見做すといふ習ひであつたから、苟も聖僧と言はれるやうな手合は絶勝の山水をよぎるに當つては目を閉ぢ珠數をつまぐつたと云ふ。彼の名僧バーナード上人が瑞西のリマン湖畔(今のゼニヅ湖)を通つた折、驢上に頭をめぐらさなんだと云ふは有名な話である。さればその頃苟も宗教を信ずる者は現世の生活は、譬へば廻國修行をしてゐるに外ならぬものと觀念し、一日も早く此廻國を果して極樂淨土に安着したいものと祈願し、念頭絶えず罪業と死と神の審判と此三大事をのみ繰返し、すべて美しいものは人間を惑はし陥入るゝ係蹄、又肉體に快く感ぜらるゝやうなことは悉く皆罪惡、浮世の榮花は電光石火、人間は墮落して迷へる者、死は必然にして神の審判は到底避くべからず、怖ろしき地獄は長へに存して常に人の子の墮ち來るを俟ち、天堂は高くまた遙かにして攀ぢ登らんと難し、無智は信仰服従の證として神之れを嘉みしたまふ、禁慾と苦行とは人生の最も安全なる戒律、云々云々。彼等は常に斯くの如く教へられもし此くの如く嚴令せられもして世を送つてゐ

た。而して之れを其根柢より覆して新天地を人心の内外に開き、前に例無き一大自覺をなさしめたのがルネサンスの力である。

ルネサンスの大功績は第一に世界の發見であつて、次に人間その者の發見である。此期間に起つた一切の現象は悉く此二句中に攝れることが出来る。すなはち世界の發見といふ事を二大門に分ける。其一つは此地球の探検、他の一つは宇宙の組織に關する取調、正當に謂ふ科學の進歩がそれである。前にも話した通り、彼の伊人コロムブスが亞米利加を世に知らせたのは一四九二年で、蘭人が喜望峯を一週したのは一四九七年、而してコペルニカスが太陽系の組織を説明したのは一五〇七年である。これらの發見が如何なる驚くべき働きをしたかは、其前の一千年と其後の四百年（即ちルネサンス全盛期）とを對照して見ると自ら明かである。昔は此世界即ち人間の住んでゐる此地球は天帝の眼の瞳子に比せられ、萬有の中心と假定せられ、日月星辰その他一切の物は皆此地球のために造られたものとのみ見做されてゐた。之れを地球中心觀、英語で *geocentricism* といふ。

然るにルネサンスの時代となつて、科學的研究が進むにつれ、無上至尊と思ひ崇めてゐた此地球といふものは、其實、一大光熱體の周邊を廻轉する幾多球體中の徒の一種たるに過ぎぬものであつて、其中央の巨大なる光熱體其者さへも、其實、數限りも無き同種類の天體中の一に列するに過ぎぬものだといふことが此際はじめて世に知られた。その頃の基督教は地球中心觀を土臺にして教

義一切を立て、ゐたのだから、右様な天文學上の新説が流布しはじめたときには此上も無き恐慌を引起した。廿世紀の今日までも連續してをる科學と宗教との軋轢は全く此時に端を發いたのである。今までは星占術とか地卜術とか煉金術とかいふ半は謬信に原いた怪しい似而非學術の附屬物たるに過ぎなんだ初期の科學が、此際はじめて獨立の發展をはじめ、爾來年毎に駭々として進歩し、竟に廿世紀の今日に及んだ。科學は近代世界の精神——即ちルネサンス——が産んだ第一子だと言つて當然である。

即ちルネサンスが齎した世界の發見とは、一面は人間の住み得る限りの地球の隅々隈々を探検したを意味し、一面は科學の力によりて自然界のあらゆる現象を檢査して之れを利用するの途を開いたことを意味する。

次に人間の發見といふにも亦たおのづから二重の段取があつた。蓋し人間を古代の希臘人や羅馬人が觀たやうに、單に俗的、現世的に見るのも一の觀方であるが、ヒブロー人が觀たやうに靈的、宗教的に觀るのもまた一の觀方である。此理は既に前々の講話中にも辯じたことで、此、言はゞ直反對の人生觀こそは歐洲の文明を起伏消長させた原因であつて、最初は到底相調和しがたいもの様に思はれてゐたのであつたが、それが果して到底調和し難いものであるかどうかといふのが、要するにルネサンス時代の研究の（或ひは意識して若しくは十分には意識せずに）目的であつた。

學者も藝術家も轡を并べて此方面の研究に向つて驀進した。

中古時代には文學も藝術も他の哲學と共に神學の奴隷たるに過ぎなうだ。彫塑も繪畫も俗人間に行はれてゐる宗教的感情に適合する標號シムボルを製作するにとゞまり、陳い型を是れ奉じて、只徒らに様に依つて胡蘆を畫くの用をなしてゐたものである。これは畢竟少しでも新意を加へて作すれば神聖な傳説を蔑ろにするに等しく、不敬の所爲だと見做される恐れもあつたからだが、二つには只舊い型に依つて作しさをすればよいといふ長い間の慣例に囚はれて、何等独自の研鑽を試みたことが無いので、自然その者に就いて寫生を試みようなどいふ才も力も無かつたからである。然るにルネサンスの曙光と共に藝術上に新しい精神が興つて來た。すなはち彼の間本位、現世本位の希臘思潮が半無意識の間に勃興し來つたので、人は追々に人の肉體が必ずしも卑むべきものでは無くて、寧ろそれみづからにして美なものだといふ事を意識し始めた。そこで在來の習慣もあるとゆるゑ、尙ほ依然として題材だけは基督教の傳説から取つたもの、之れを刻んだり描いたりするに當つては寫生の筆致を發揮しようと試みるやうになつた。一つは、在來の方式だけでは藝術上の何等新意匠を發揮することも出來なかつた苦し紛れでもあらう。就中繪畫には此新傾向が著しく現れ、畫工らは相競うて裸體の研究をはじめた。姿勢、服裝、態度、表情等の研究を實物に就いてははじめた。教會堂内の掛畫や壁畫までがおひ／＼其面相を一變して、全く寫生的な生き／＼した人間を現するに至つ

であつた、聖母マドンナも聖子も只の人間に畫かれ、聖書の傳説も劇の一場のやうに畫かれ、聖者セントも天使エンジェルも生理的完フィジカルパーフェクション全を體現する爲の者のやうになつて來た。表面はあくまでも宗教の爲に畫くと號しながら、其實は隱然として美を愛し肉を讚め現世を喜ぶの情を鼓吹してゐたのが當時の美術である。勢ひ既に此くの如くであつた折から、古文學の新旭光がさながら洪水のやうに流れ入つて來たから、血氣を本領とする諸藝術家は時こそ來れと勇み立つて、猛然として假面を抛ち、天下晴れて美を製作する事に驀進し、幾ばくもなくして藝術の大解放を成し遂げ、彼の目覺しい伊太利繪畫の全盛期を醸し出した。思ふに肉體の卑しむべきものにあらざるを世人に解せしめて、之れを復活する事に與つて最も力あつたは藝術家であつたと言つてよい。併しながら人間の精神の如何に豊富なるものなるか、如何に威嚴あるものなるか、如何に價值あるものなるかを明かにして、一へに他力と他界とを是れ崇めて、自卑悲觀するの餘り自暴自棄おちいに陥らんとしてゐた中古の諸國民を救つたのは實に學者や詩文人の力である。

中古時代には希臘の古文學はさておいて古羅馬の詩文章すら世人には殆ど全く棄てられてゐたのである。學者中にさへヴーシルの詩やポイシヤスの文を所有してゐたのは極めて少數であつたといふ。況んやルカンとかオギッドとかジュゼナルとかシセロとかホレーヌとかを所持してゐるものは殆ど無かつた。丁度我が足利氏の末戰國時代の有様と一般である。ところへルネサンスといふ事が始

まつて、一朝にして無盡藏とも形容すべき古代文學の寶庫が開かれ、同時にバイブルを其原語で以て讀むとが出来るやうにもなり、且つ又ユダヤ、アラビヤ等に關する種々の珍らしい研究もはじめられ、人間の智見が俄然として擴張した。全く夜が明けたやう。按ずるにルネサンス時代に於ける學問の歴史は凡そ三期程に分れる。第一期は渴仰の時代とも名づくべく、世人が何等か新智見を得たいものと憧れ渴して、水の低きに就くが如く、或ひは蟻の甘きに就くが如くに古文學の貪讀に心を傾けた時代である、いはゞ古文學盲崇時代。第二期は收穫の時代、即ち第一期に播いた種が實つた時代。第三期は更に其收穫を精査して宜しきに依つて取捨した時代、名づけて批判考證の時代といふ。第一期には彼の伊のペトラルクのやうな立派な學者さへ、たま／＼希のホーマーの寫本を手に入れて、迎も十分には解らぬながらボツ／＼拾ひ讀みにして其渴仰の幾分を慰めたといひ、同じく伊の西鶴ともいふべきボツカチオも同じ渴望に促されて中年以後ながら希臘語の學習をはじめたといふ、それほどに古學の振はなかつた時代。第二期は彼のニコラス第五世が東方諸國に人を派して古寫本を蒐集し、一四五三年に有名なヴチカン圖書館を創立し、又フロレンスの主治者コスモ・デ・メディチが所謂「メディチ家の大蒐集」^{コレクシヨ}に着手し、又同じフロレンスの碩學 Poggio Bracciolini (一三八〇—一四五九) が歐洲中の市府や寺院をあなぐつて古寫本を取集め、且つコンスタンチノーブル市から流轉して來た希臘學者らを募り集めて (十五世紀の前半) 専ら古文學の獎勵に力めた頃で

ある。此期に於ては古寫本の尊さと言つたら無かつたといふ。彼の中古の宗教全盛時代に基督や其弟子の遺物が―髪の毛一筋、古器の破片一つが―神聖な物として尊崇せられたと同格であつた。随つて學者らが古書の探求に熱狂して一へに東方希臘に目を注いだ有様は、同じく中古の謬信時代に十字軍の名の下に列國の王侯武士が血眼になり、競つて東方ジエリサレムへ押寄せたと同じ格であつた。但し其頃はまだ批判考證の道が開けてゐなかつたから玉石同架、眞贋無差別であつたが、第三期に入るに及んでおひ／＼批判が始まり、考證が始まり、字典類が出来、印刷術の創始と共に古書の翻刻といふことも始まつた。

これらはルネッサンスも大ぶ進んでからの話であるが、兎に角右様の手續によつて人間本位、現世本位の希臘古學が復興して來たのである。而して此種の學問を歓迎してゐる間に、自然にその中に含まれたる人生觀に啓發せられて、世人が個人といふもの、價值を知り、自ら信するの勇氣を生じたにつれて自ら尊むの見識をも生じ、隨つて從來は盲信してゐたことにも疑惑を懷くやうになり、進んで其眞偽を討究して見ようと思ひ立つやうにもなつた。不可思議或ひは神祕と見做されてゐた事も此に至つては批判討究の目的物とならざるを得ない。かくの如くにして後の理智^{リーズン}の時代、科學^{サイエンス}の時代の端が發かれたのである。

かやうな傾向の盛んになつたにつれて、スコラ學派全盛の頃に行はれてゐた形式的の論理法や修

辭法や屋上に屋を架する煩瑣な註釋や編述は自ら廢棄せられ、批判的もしくは實驗的に何事をも研究する精神が盛んになつて、反神祕的な、反獨斷的な潮流が思想海に漲りわたつた。彼の暗黒時代には、前に既に述べた通り、著述も藝術品も其目ぼしいものとなると、悉く宗教の用具即ち神學の婢僕同様のものであつたから、たわいもない謬信妄説の代表物でない以上は必ずや何等か教訓の意を含んでゐぬものは無かつた。尤も其教訓は言ふまでも無く時の信仰原もとにいたもので、不合理であらうが荒唐無稽であらうがそんな事は一切かまはなだゆゑ、宗門外の心を以て觀れば、或ひは空怖ろしい謎の如く凄愴沈鬱、或ひは物悲しい夢の如く模糊朦朧として要領を得がたいのが通例。畢竟獨斷的教義と神祕主義ミステシズムとが堅く結合した結果で斯様な一種特別な文藝が出来たのである。此頃の詩文章には比喩譚アレゴリーが多く、又藝術品には標示主義シムボリズムになつたものが平一面ぺいたんなのは此理にもとづく。然るに此模糊曖昧、隱微沈鬱、怪奇荒唐などいふ氣脈はルネサンスの衰ふると共に廢れて、同じく教訓を與へるにしてからが、謎のやうな夢のやうな教訓の代りに明晰にして的確なる實際的の忠告や眼前口頭の是非利害に關係する世間的の訓誡が與へらるゝこととなつた。在來の學問藝術が宗教の附屬物であつたに反して今は學問は學問として獨立し、美術は美術として獨立することとなつた。眞を眞として研究し、美を眞として研究するといふやうな事は全く此時代が序開きであつたと言つてよい。英のベーコンとか佛のデカルトとかいふやうな新説を唱ふる哲學者も此機運に乗じた

ばこそ出たのである。英のマローのやうな無道德な作家、伊のアリオストのやうな無宗教の詩人も此時代なればこそ出たのである。伊太利が新繪畫、新彫刻の本源となつたのも是れがためである。美的生活とか本能満足とか自然的生活とかいふことも、十九世紀以後に唱へられた程に明白ではなく條理だつてもゐないが、唱へられもし實行せられもした。要するに、他界を重んじ靈の生活を主とした代りに、現世を重んじ肉の生活を主とし、歴世悲觀して退隱することの代りに、樂世樂觀して活動し、且つ慾を斷じ我を滅して枯禪的生活を送れと訓誡する事の代りに、自立せよ、自信せよ、進取せよ、向上せよと獎勵し鼓舞するといふがルネサンス時代に於ける各國民の精神。それが所謂其頃の時代精神フレイトガイスト。一言以て蔽へば、今の所謂個人主義の勃興がルネサンスの産んだ最大の結果である。

按ずるに中古時代の歐羅巴——殊に伊太利——は久しく等閑に附せられてゐた畑地のやうな物であつた。其外面こそは甚しき荒蕪で、逆も手の附けられさうにない物と見えたが、其幾重か下には舊世界の文明の種子が或ひは密に或ひは粗に埋没してゐたのであるから、若しうまく肥料を施し、うまく耕耘を試みさへすれば、其埋もれた種が又發芽してやがて花を着け實を結ぶべき立派な可能性を具へてゐた。されど機が未だ至らぬので、誰もそこに目も着けねば手も着けない。で來しかたを顧みれば所謂中古の暗黒時代、只もう漠々朦々たる無智闇昧の數百年、さればとて指して行くへ

を見渡せば、是れもまた朦朧模糊として殆ど林岳をも見分け難いといふ濃霧の世界。だから若し地盤や種子が悪かつたならば、假令幸ひに機運が到來して學問の復活が創始せられたからと言つても何等いちじるしい功績も擧らないで畢つたかも知れなかつたのだが、幸ひにして此際の諸民族——伊太利をはじめ列國の民衆——の状態が恰もかゝる革新事業に參與するに適當してゐたのは眞に造化の妙配劑といふもの、勿論彼等は甚しく無智であつた、文化の恩澤に浴せないが爲に尙ほ依然として半未開の状態にあつた。併しながらそこにまた淳樸粗剛といふ長所があり、未だ曾て使用した事が無い爲に、學問や活動に對する無盡藏の精力があり、戰國時代の無政府同様の世に生ひ立つて代々幼少より辛酸に馴れ、種々の艱難に心身を鍛ひならし來り、奢侈懦弱の生活などは未だ曾てしたことが無いといふ強みがあつて、彼の多年贅澤な生計くらしに馴れて何事も自發的に行ふ勇氣が無くなり、浮靡纖弱なことにのみ惑溺して、二六時中懶惰根性が身に沁み入つてゐるといふやうな人間、若しくは餘りに刻苦して學問を研鑽した爲に神經が疲れ果て、創始力は消耗し、最早學問に對する新鮮な感興などは全く亡くなり、今はたゞ機械的にのみ考究をつゞけてゐるといふやうな學者、又は身心とも夙とくの昔に半死の状態におちいつてゐるのなれど、金錢の力の與ふ限り、或ひは藥劑の助けを借り、或ひは其他の手段を講じて辛うじて一縷の命を繼ぎ、やつと生き存へてゐるといふやうな人間とは大違ひ。筋骨いかにも逞ましく、元氣いかにも若々しく、譬へば血氣正に壯んな少年や

青年のやうな國民、見るもの聞くものを皆新しく感ずる所から之れに赴く熱心も激しく、如何なる危険艱難にも堪へて慕まつ地に勇往邁進しようといふ氣概ある國民。こゝらはロマンチズム時代の青年とは大違ひ。これは後にいふのだが、ロマンチズム時代又は其以後の青年には一代の文明に飽歴して、それがために病み疲れ、精力が衰へ、自意識ばかりが鋭く、只智慧ばかりが働いて、何事に對しても批評眼ばかり高く、實行力は空しく、何の信仰も無く、何の理想もないといふ手合が夥しい。然るに懷疑から生ずる倦厭アンヌイとか、疲憊ファチグとか、努力の失敗より來る絶望ゾスベアとかいふやうな事は當代の若い民衆の未だ曾て經驗せざる所であつた。彼等は何物をも愉快に感じ、何事をもなし得べしと自信してゐた。要するに生活の銳氣が彼等の四肢五體に漲り溢れてゐた。ルネサンスの偉業は一に此勃々たる新國民の英氣によつて成就せられたのである。

ルネサンスの精神を代表する巨人大家を求むるに當り、若し姑く藝術家を除き、單に文學者だけに就いていへば、通例、六人を算へる。第一は伊太利のアリオストー（一五三三年死）、第二は和蘭のエラスマス（一五三六年死）、第三は日耳曼のルーテル（一五四六年死）、第四は佛蘭西のラブレイ（一五五三年死）、第五は西班牙のサーヴンテス（一六一六年死）、第六は英吉利のシェークスピア（一六一六年死）である。併しながら最もよくルネサンスの顛末を代表してゐると思はるゝ二大作家は伊太利の大詩人ダンテ（一二三二年死）と英吉利の劇詩人シェークスピアであらう。此二大家